
スターウォーズ 氷帝伝

チルノ・トレバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スターウォーズ 氷帝伝

【Nコード】

N7216W

【作者名】

チルノ・トレバー

【あらすじ】

目が覚めるとそこは知らない場所だった。少女はそこで一人の騎士に救われ、その姿に憧れる。そして少女は騎士の道を進み始める事になる……。基本原作通りに行きますが、原作で死ぬキャラが大量に生き残ります。オリジナル展開もあります。チルノがほぼ別人です。こんなのチルノじゃない！という人やスターウォーズなんて嫌いだ！という人は見ないほうが良いです。初投稿なので誤字、脱字や、内容がグダグダになるかもしれません。感想は大歓迎ですが、作者の心は豆腐のように柔らかいので批判は出来るだけ優しく

言ってもらえると嬉しいですよ。

プロローグ（前書き）

初めまして。

初めて書くので酷い事になると思いますが、見てやってくださいませよ。よろしくお願い申し上げます。

プロローグ

side チルノ

「どこ……どこ……?」

目が覚めるとそこは幻想郷ではなく知らない場所だった。

見たことの無い植物や見たことのない生物がうろついていた。

知り合いも居ないこの土地でチルノは恐怖や心細さから一人涙を流した。

泣いていると近くから話し声が聞こえた。

チルノは話し声の聞こえる方へ歩いていった。

そこには男達が大勢集まっており何かを話していた。

side 密輸業者

「今回の密輸は上手くいったな」

「所詮ジェダイなんざこんなもんですよボス」

「こんなに簡単に偽の情報に引っ掛かるなんてなジェダイの底が知れるな」

「ハハハ、ちげいねえや!」

男達はどうやら密輸業者の様だった。

チルノは運悪くその話を聴いてしまった。

「ボス次はどうします?」

「次は・・・いや、どうやらお客さんがいるようだな」

密輸業者のボスと思われる男はチルノの方を向いてそう言った。

だが肝心のチルノは気付いていないようだった。

男は部下に指示をした。

「お客さんを持って成しやれ」

そう指示された男は直ぐチルノの後ろに回り頭に銃を突きつけこう言った。

「盗み聞きはいけねえなお嬢ちゃん」

sideチルノ

「盗み聞きはいけねえなお嬢ちゃん」

気付いた時にはもう遅かった。

いつの間にか一人の男が自分に銃を突き付けていた。

その男は笑いながら、

「悪いが死んでくれや」

そう言っつて引き金を引こうとしている。

「やだ・・・やだよ・・・」

「死にたくないよお」

チルノは怯えながらで助けを求めた。

まだ死にたくない。その一心で。

「誰も来やしねえよ・・・じゃなあばよ」

チルノの命運はここまでかと思われた。

「待て」

その声が聞こえるまでは。

side???

マスターウィンドウと共に密輸業者を搜索していた私は、密輸業者のアジトが分かったと言うマスターウィンドウと気になる事があると言っつて別れて探索していた。

すると、「死にたくない」と言っつ声が聞こえた。

微かだったが確かに聞こえた。

小さな女の子の声。

助けを求める声。

私は声の聞こえた方向に走った。

そこには銃を突きつけた男が小さな女の子を今にも殺そうとしているではないか。

男は此方に気付かずにごう言った。

「誰も来やしねえよ・・・じゃなあばよ」

そう言って男は引き金を引こうとした。

他のジエダイ達なら見捨てるのだろうか。

だが私は目の前のこの子を見捨てるつもりなど無かった。

「待て」

目の前の少女を殺そうとしている男にそう言った。

side 男

「待て」

誰かがそう言った。

声の聞こえた方を見ると一人のヴァークが立っていた。

「・・・何だてめえは？」

「その子を放せ」

「・・・何だと？」

「その子を放せと言っただけだ」

「出来ねえ相談だなそりゃ」

「なら力づくでさせてもらおう」

「チツ・・・面倒を増やしやがる・・・まあいい」

「一撃で殺してやるよー！」

そう言っただけで男は銃を向け、引き金をひこうとした。
だが・・・

「何い！？」

その銃から銃弾が出る事は無かった。

何故なら、男の持っていた銃の銃身が緑色に輝く剣によって切り裂かれていたからだ。

「てめえまさか・・・ジエダイ！？」

「気付くのが遅かったな」

「ぐああ!!」

男は胸を切り裂かれ倒れた。

「マジかよ・・・くそお」

そう言っつて男は意識を失った。

sideチルノ

一瞬何が起きたか解からなかった。

魚みたいな頭の人が見れて私を殺そうとした人倒してしまった。

その人は私に、大丈夫か?と聞いてきた。

私は急にほっとして涙が止まらなくなってしまった。

その男の人は泣いている私の背中を撫でていてくれた。

とても暖かった。

そのあと泣き止んだ私はその男の人と話していた。

「ありがとうおじさん」

「いや、構わないよ。ここは危ない、すぐうちに帰りなさい」

私は俯いた。

家に帰ろうにも帰り方が分からないのだからどうしようもない。

「家に帰ろうにも分からないの」

「解らない？」

私は全てを打ち明けた。

こことは別の場所に暮らしていて目が覚めるとここに居たことも。

「なるほどな・・・分かった、今回の仕事が終わったら君の住んでいた場所を探して君を家に送ってあげよう」

「ありがとうございます！」

「構わないさ、それと聞きたいんだが何故襲われていたんだい？」

「話し声が聞こえたから行ってみたらたくさんの方が居て、その人達の話の聞きちゃって、それで・・・」

「襲われたと・・・しかし話を聞いただけで殺すとは思えない、奴等は何を話していたんだ？」

「えっと・・・密輸がどうとかがって言ってたよ。」

それを聞いたおじさんの表情は険しくなった。

「まさかこんなところで見つけるとはな・・・」

「どうしたの?」

「いや・・・なんでもない君の名前はなんて言うのかな?」

「チルノ・・・」

「そうかチルノ、君はここで待っていてくれ。」

「えっどうして?」

「私は奴等を倒してくる」

私は無茶だと思った。

あそこには五十人ほどの人がいたのだ、とても勝てないと思った。

「そんな・・・危ないよ!相手は五十人ぐらいいたよ!?死んじやうよ!」

「大丈夫だ、すぐ倒して戻って来るさ」

そう言うとおじさんは私の頭を撫でて私が話を聞いた場所に走っていった。

「やっぱりおじさんだけじゃ危ない!私も行こう!」

そして私も走っていった彼を追いかけるのだった。

side 密輸業者

「遅いな・・・」

密輸業者のボスであるこの男はいつまでも戻って来ない部下に対して苛立ちを感じていた。

「そうですね・・・誰か向かわせますか？」

「いや待て、帰って来たようだ」

部下が見ると人が一人此方に歩いてきていた。

「おい、ずいぶん遅かったな！なにかあった・・・！てめえ何もん・・・」

同僚が帰って来たと思い話し掛けた男が喋り終わるその場に倒れた。

「おい！てめえ何もんだ！」

部下が目の中の男向かって叫んだ。

「お前等少し落ち着け」

しかし男は目の前の男を知っているようだった。

「ですが！」

「安心しろ、あいつはまだ生きてる・・・そうだろ？」

倒れた部下の違和感にすぐに気づき、とあるジエダイを思い出した

男は笑いながらこう言った。

「ジエダイマスターのコールマン・トレバー　さんよ？」

「知っていたのか・・・」

「そりゃあ伊達に密輸業を長いことやっている訳じゃねえからな。ライトセーバーで切られて生きてい事はまずねえしライトセーバーの出力を抑えて戦うヴァークのジエダイなんざ俺の知る限り一人しかいねえからな、直ぐに分かったさ。」

コールマンは驚いた。この男は一瞬で倒れた部下の怪我を確認しなおかつ自分のことをすぐに見破ったのだ。

「だがジエダイも結構間抜けみたいだな？二人いたジエダイを偽の情報で引き離す事に成功した時は笑ったもんだぜ！ジエダイもこの程度かってな」

「だが、そう上手くはいかなかった様だな」

「ああ、誤算が発生しちゃったからな・・・お前さん奴を殺したんだらう？」

男は声を少し落としながら鋭い目でコールマンを見取らえた。

「小さな子供を殺そうとしたからな」

コールマンは臆することなく答えた。

「俺あよ、ここにいる部下全員を家族だと思ってる・・・その家族

を殺されたと有りゃあ黙ってる訳には行かねえな」

男は一般人なら卒倒するほどの殺気を出しながら喋り始めた。

「戦うつつもりか？」

コールマンは静かに構えを取った。

「この数相手に勝てると思うなよ・・・ジエダイマスターといえど限界が有るだろう？」

男は殺気を放ちながら部下達に指示をする。部下たちに武器を構えさせ何時でも撃てるように準備をさせる。

「確かにこの数相手に無事で居る保証は無い・・・だが」

コールマンは話しながらフードを投げ捨てた。

「だが、何だ？」

男は聞いた。

「出来る出来ないではない・・・やるのだ」

コールマンはライトセーバーを起動し、男の方に向けこう言った。

男は口を歪めながら言葉を口にした。

「へっ面白い事言っじゃねえか」

「行くぞ！」

コールマンは敵を打ち倒すために走り出す。

「殺れオメエら！！」

男は部下達にジエダイを殺す様に指示し自分も愛用のブレードを構える。

戦いが今幕を開けた。

sideコールマン

「くたばれジエダイ！」

そう言っつて密輸業者達は一斉に銃撃してきた。

だがコールマンは殺到する銃弾を全て防ぎ、その銃弾を弾き返した。

「ガア！」

「グエエ！」

「ウグ・・・」

弾き返された弾に当たり次々に倒れていく。

五十人程居た密輸業者は一瞬でその数を二十人程になった。

「くそっ 困んで倒せ！」

数が一気に減った密輸業者達はコールマンを囲んで倒そうとする。
だが……

「ハア！」

コールマンが突き出した手から衝撃波が放たれ、囲んで倒そうとしていた者たちをまとめて吹き飛ばした。

「うわああ!?!」

「ギャアアア!!!」

衝撃波によって吹き飛ばされた者達は次々に木や壁にぶつかっていた。
った。

残った密輸業者のボスと数人の部下のみであった。

「畜生!調子に……」

生き残った部下達が慌てて銃を構え銃撃するが……

「遅いな!」

コールマンは最小限の動きで躲しながら接近し相手を切り付けた。

「せいっ!」

瞬きをしない内に生き残った部下達は全員切り倒された。

「ぐああ・・・」

「そんな馬鹿なあ・・・っ」

「うぐう・・・」

この場に立っているのは、密輸業者のボスである男一人であった。

「これまでだ！降伏しろ！」

コールマンは男にライトセーバーを向け男に降伏を促した。

だが男は笑いながら自らの愛用しているブレードを構えてこう口にした。

「ハハッまだ終わってねえだろう？俺の相手もしてくれや！」

そう言ってコールマンに飛びかかってきた。

「クッ！」

「フハハハハ！そらア！！」

男の動きは人間とは思えない程に俊敏でそのスピードを生かして攻撃してくる。

だが優れた戦士でありフォースを身に付けているコールマンの敵では無かった。

「でえい！...」

コールマンはその素早い動き隙見つけ男を打ち倒した。

「グッ!?なんだとお!?!」

コールマンは男にライトセーバーを突き付け、こう言った。

「これまでだな・・・お前を逮捕する!」

「チツ・・・好きにしゃがれ」

男は抵抗をする様子も無く降伏を受け入れた。

だが後ろからコールマンを狙う男の姿あった。

コールマンは気づいてい無い。

「後ろがから空きだぜジエダイ・・・」

そう口にしながらか引き金をひこうとしたその時。

「ダメー!」

急に子供の声が聞こえたと思ったら男は気にぶつかっていた。

「ガハッ!?!」

男はそのまま意識を失った。

「なっ!?!なぜ彼女がフォースを!」

コールマンは驚愕した。

先程会ったばかりの子供がフォースを使い自分を救ったのだから。

彼女がなぜフォースを使えるのかを聞き出さなければならぬと思ひ彼女の下に走った。

sideチルノ

「出来る出来ないではない・・・やるのだ」

おじさんに追いついた私が最初に耳にした言葉はその言葉だった。

何故かわらないけどその言葉胸に染みていくように感じた。

私がそんなことを感じている内に戦いが始まった。

・・・おじさんはすごく強かった。

緑色に輝く剣で銃弾を跳ね返したり、相手に手を突き出して凄いいで壁にぶついたり、剣で切ったりして次々倒していった。

あっという間に全員倒してしまった。

私は思った。

あんなふうになりたい。

あの力でたくさんの人を助けたい。

そう思っていた時、後ろから一人おじさんを撃とうとしていた。

おじさんは気づいていない。

私はおじさんを助けるために飛び出した。

「ダメー！」

私は相手突き飛ばそうと手を突き出しながら叫んだ。

「ガハッ!?!」

すると相手はまだ触れていないのに吹き飛ばされ近くにあった木にぶつかった。

「え……嘘……」

私は驚いた。

さっきおじさんが使っていたものと同じ物が出たのだ。

「チルノ！」

おじさんが走ってきてきこう聞いた。

「チルノ……何処でフォースを覚えたんだい？」

「私も解らない……」

私にも分からなかった。

幻想郷に居た時にはこんな力は無かったのだ。

話を聞いた後おじさんがこう聞いてきた。

「一緒に来ないか？」

「えっ」

私は聞き返してしまった。

それほどまで驚いたのだ。

「君にはフォースが有る」

「フォース？」

おじさんはフォースのことを教えてくれた。

フォースはすべての生物に流れておりそれを使えるのはフォース感知者と呼ばれるだけらしいと言う事。

フォースは感情によって左右されるらしいと言う事。

そして私には強力なフォースが有ると言う事。

おじさんは私を連れていって、鍛えたいと思っていることも教えてくれた。

「（私にフォースが・・・）」

私は嬉しかった。

おじさんのような力が私にも有るのがとても嬉しかった。

そしてこの力についてもっと学びたいと思った。

「どうかな？」

おじさんが答えを聞いてきた。

私に迷いは無かった。

「・・・分かった一緒に行く！」

「そうか・・・ありがとう、では行くところか」

「うん！お父さん！」

なぜか私はおじさんのことをお父さんと呼んでいた。

自分でも何故そう呼んだのか分からなかった。

「お父さん・・・？」

おじさんは怪訝そうな顔で聞いてきた。

「えっと・・・えっと・・・」

私はなんとか言い訳を言おうとした。

するとおじさんは、

「好きに呼ぶといい」

と言った。

「うん！」

私は笑顔でそう言っておじさん……いや、お父さんを追いかけた。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？次回はキャラクター紹介を書くつもりです。
それでは。

キャラ紹介1（前書き）

キャラ紹介を作りました。

色々無茶苦茶な点があると思いますが宜しければどうぞ。

キャラ紹介1

<キャラ紹介>

チルノ・トレバー

今作の主人公で、ジェダイ聖堂内に有る最高評議会の評議員の一人。

長期メンバー。

ジェダイの技術部門のトップでもある。

ジヨクラド・ダンヴァとは夫婦である。

ジェダイマスターのコールマン・トレバーの義理の娘、22歳。

(チルノは不老不死なので年齢はあくまで目安である)

種族 フェアリー

所在地

元々ジェダイ聖堂で暮らしていたが、ジェダイ聖堂の隣りに特務研究開発局を造る事を評議会から許可を貰い、特務研究開発局を建造、現在は開発局で暮らしている。

容姿

身長は173cm有り、髪は水色の髪が腰の辺りまであるロングのストレートヘア。

頭にリボンをつけている。

スタイルは抜群で胸は90cm程有る。

顔は十人いれば、全員が振り返る程の美貌である。

服装は、上は白いYシャツにネクタイ締め、を青いコートを羽織っている。

下は黒色のミニスカートと黒色のニーソックスを穿いており、靴は白色の膝上程まであるロングブーツを履いている。

尚、ラボに居る時はコートではなく白衣を着ている。

チルノの服装に対して、メイス・ウィンドウが最高評議会の召集時に問題として取り上げた事があったが、評議会その物の決定が『別に問題視すべき点はない』と即座に却下された為、チルノのほぼ毎日 で私服で行動している。(尚、評議会から咎められたことは一度も無い。)

性格

冷静で理知的、楽道家、そしてとても温厚で大切な物を守るためならジエダイの掟を破ることも厭わない。

彼女の弟子達への教育方針は、『大切な物の為に強くなれ、掟を破ることを恐れるな』

と言う教育方針で、評議会に喧嘩を売りまくっているが評議会から呼び出しを食らうことはほぼ無い。

(評議会がチルノの行動を完全に黙認している)

<チルノがパダワン時代に起こしたとある問題以降評議会の目が甘くなっている為>

親しみの有る口調で話すが、内戦の調停などの大事な場面は礼儀正しい口調で話す。

評議会内でもマスターヨーダ等の一部の者には礼儀正しく接するが、大半の評議員達や他のジェダイ達とは友人の様に接する。

武器

ライトセーバーとダブルブレード・ライトセーバーを各1本ずつ所持している。

ライトセーバークリスタルの色は濃い青色。

戦闘方法

戦う時は二本のライトセーバーを使用しチルノが自分で編み出したアガトと言うフォームを使って戦う。

或いはライトセーバーを使わずにフォースで強化した肉体と元々持っていた冷気を操る能力を駆使しながら戦う。

アガトは、シャイ・チョー、マカシ、ソレス、アタル、シエン、ジユヨー、それと自分の体術を組み合わせたフォームで、ライトセーバーの斬撃と体術に重点を置いて作り出したため、ライトセーバーを持っていなくても全般的に凄まじい性能を誇る。

しかしチルノ本人は基本的にアガトは強すぎてを使いたく無いので、

アガトを使わずに体術で戦う。

それでも十分に強いため殆どライトセーバーを使わない。（本気でやればマスターヨーダと同じくらい強い）

冷気を操る能力は普段は能力を制限して使っているが、本気で使えば星ひとつを凍らせる事が出来る程に強力である。

その為、人が居ない場所以外だと人を巻き込む恐れがある為、加減している。

尚、能力を開放すると背中に氷の翼が生える。

備考

幼少時代に幻想郷からとある惑星に飛ばされる。

その惑星で密輸業者達に襲われていたところを、ジェダイマスターのコールマン・トレバーに救われ、コルサントに連れて来られる。

そこでジェダイになるための適性検査を受けた結果、凄まじいフォースが体に宿っていることが分かり、ジェダイ・イニシエイトやジェダイ・パダワンを経ずに行き成りジェダイ・ナイトを名乗ることを最高評議会から許される。

当然評議員の中でも反対するものは居たので（主にメイヌ等）、名目上はジェダイ・ナイトを名乗り、パダワンの訓練を受けさせると言うことで一致した。

これはジェダイオーダー出来てから今まで一度も無かった事だった。

チルノはジェダイになって直ぐに伝説を作る羽目になる。

その後チルノはマスターコールマンの下でパダワンの訓練受ける事

になる。

直ぐにチルノは自分の才能を開花させる。

肉体的にも精神的にもチルノはほかのジェダイに比べるとずば抜けて能力が高く、特に知能は評議会のメンバー達を凌駕するほどの明晰な頭脳を持っていた。

どれ程かと言うとジェダイ公文書館の情報を全て記憶しており、その情報を元に様々な道具を生み出している程である。

チルノは日々開発局でジェダイ達の為に色々な物を研究、開発を行っており、その道具により救われたジェダイは多い。

チルノには兵器や戦艦を見ると魔改造したくなる癖がある。

チルノは開発局内では局長と呼ばれており、チルノもその呼び方をマスターと呼ばれるより気に入っている。

又、遺伝子情報の研究もしており、その知識量は遺伝子研究に関してトップクラスであるカミーノアンを上回り、チルノは遺伝子科学において銀河で最高の技術を持っている。

尚、ジェダイ・イニシエイト達はパダワンになるまでの間ジェダイとして必要な知識をここで学ぶ事を義務付けられている

基本的にコルサントの特務研究開発局からは出る事は余り無いが、たまに任務や暇潰しに出てくる。

又、外交官としても能力が高く、多くの星の内戦や紛争を解決し、

他のジェダイや評議会メンバー達からも尊敬を集めている。

マスターコルマンの下で訓練を受けていたが、親子の様に接していた為、パダワン時代にジェダイ最高評議会で問題視され、ジェダイから追放され掛けるが、チルノは臆さずに評議員達に、今のジェダイの自由の少なさが暗黒面に堕ちる者増やしているおり、ルーサンの改革以前のジェダイ達の持っていた多くの自由こそが今のジェダイには必要だと言う事、感情無き所には無く、感情を無くす事は人形になることだ
と言う事を評議会メンバー達に対して指摘した。

この言葉に評議員達は感嘆しこの問題を不問にし更にチルノとコルマンが親子関係を結ぶことを許した。（この頃よりチルノに対するメイス・ウィンドウの目が厳しくなる）

この後数ヶ月後にチルノはジェダイマスターになる。

その後チルノは重大な惑星間紛争が勃発している星に配置される。

メイス・ウィンドウからの支持は『重大な惑星間紛争が勃発しているのでこれを一人で戦争を終結させよ』と言う非常に難易度の高い任務をチルノに下した。

（メイス・ウィンドウによる嫌がらせである）

チルノは見事これを完遂し、評議会メンバーとなる。

尚、チルノは評議会メンバーや他のジェダイ達の中に友人が多い。

著名な人物だと、クワイミアンのジェダイ・マスターヤリアル・プーフ、ケル・ドアのジェダイ・マスタープロ・クーン、スリアンの

ジェダイナイトキルアディムンディ、イクトーチイのジェダイ・マスターセイシー・ティン、ノートランのジェダイ・マスターキックト・フィストー、人間でソードマスターの称号を持つジェダイ・マスターシン・ドロリグ、人間のジェダイ・マスタークワイガン・ジン、人間のジェダイ・ナイトジョクラド・ダンヴァ等が有名。

コールマン・トレバー

ジェダイ・マスター。

評議会メンバーの一人。

ジェダイ評議会の評議員のチルノ・トレバーは義理の娘。

種族 ヴァーク

所在地

ジェダイ聖堂在住。

容姿

身長は213cm有り、長い顔と黒い目をしており、頭骨からは曲線を描いたとさかが生えている。

服装は白色のジェダイローブを着ている。

性格

冷静で哀れみ深く、誠実で終始一貫して、あらゆる局面でこの信念に従った行動をとる。

武器

ライトセーバーを一本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は緑色。

戦闘方法

戦う時はライトセーバーを使用しソレアと言うフォームで戦う。

ソレアはニマーンを昇華した物でありニマーンの弱点を無くした物である。

なおコールマンはその性格からライトセーバーの出力を落として戦っている。

備考

密輸業者達を搜索するために降りた惑星で、密輸業者達に襲われていたチルノを見つけ、保護する。(尚、この時密輸業者が五十人程いたが、コールマンは一人で全員を倒している)

その後チルノを連れてコルサントに戻りチルノにジェダイにするために適性検査を受けさせ、合格した為チルノを自分のパダワンにする。

この時には既に親子のような関係であった為に、評議会で問題になり一時はジェダイから追放覚悟をしたがチルノの行動により不問とされ、親子関係を結ぶことを許可される。

現在は外交官として行動している。

ヤレアル・プーフ

ジェダイマスター。

評議会メンバーの一人。

チルノの友人の一人。

種族 クワーマリアン

所在地

ジェダイ聖堂在住。

容姿

身長は264cm有り、小さな体から4本の腕と2本の爪足を生やしている。

腕の片方の組には嗅覚腺が付いており、長い首の先端にある頭部は催眠術でもかけるかのように揺れ動いている。
唇のない口の上には窪んだ小さな目が2つあり、口元は永久的に当

惑した笑みを浮かべている。

また、脳は頭部と胸部に分かれている。

服装は茶色のジエダイローブを着ている。

性格

紳士的で謙虚な性格であり、理性を重んじる。

武器

ライトセーバー一本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は青色。

戦闘方法

マインド・トリックを使い相手の戦意を無くす事により戦いを終わらせる。

稀にライトセーバーを使う時にはソレスを使い戦う。

備考

チルノが聖堂に来たときからチルノに目を掛けており、チルノが評議員になった現在ではよく談笑している程に仲が良い。

反対に一々チルノに難癖を付けているメイス・ウィンドウに対して不快に感じている。

プロ・クーン

ジェダイマスター。

評議会メンバーの一人。

チルノの友人の一人。

種族 ケル・ドア

所在地

ジェダイ聖堂在住。

容姿

身長は188cm有り、 特製の対酸素呼吸マスクを着用している。

服装は黒色のジェダイローブを着ている。

性格

温厚な性格で、純真な正義を信じている。

武器

ライトセーバーを三本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は青色。

戦闘方法

チルノが開発したライトセーバー装備用の専用のアタッチメントを左腕に装備し、右手にライトセーバーを装備し、デュームと言うフォームで戦う。

デュームは左腕のアタッチメントについたライトセーバーを回転させ敵の攻撃を防ぎ、右腕のライトセーバーで攻撃するフォームである。

尚左腕のアタッチメントは攻撃を防ぐだけでは無く、アタッチメントに付いたライトセーバーで突き刺す事も可能である。

備考

チルノがジェダイ評議会に籍を置くようになった時に知り合い、友情を築く。

プロ・クーンはチルノを尊敬しており、メイス・ウィンドウに対して嫌悪感抱いている。

尚、プロ・クーンの装着している対酸素呼吸マスクはチルノが開発した物で、一定の期間で大気を採取する必要が無くなった。

キ・アディムンディ

ジェダイナイト。

評議会メンバーの一人。

後にジェダイマスターとなる。

チルノの友人の一人。

種族 スリアン

所在地

ジェダイ聖堂在住。

容姿

身長は198cm有り、長い頭頂部に2つの脳を持っている。

服装は黒色のジェダイローブを着ている。

性格

冷静で、高い洞察力を持つ。

武器

ライトセーバーを1本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は青色。

戦闘方法

アタルを使い戦う。

備考

チルノがジエダイ評議会に籍を置くようになった時に知り合う。

よくヤレアル・プーフやチルノと共に談笑している姿が見受けられる。

メイス・ウィンドウとはウィンドウを公然と批判する程に仲が悪い。

セイシー・ティン

ジエダイマスター。

評議会メンバーの一人。

チルノの友人の一人。

種族 イクトーチイ

所在地

ジエダイ聖堂在住。

容姿

身長は188cm有り、丈夫で毛のない皮膚に覆われている。

頭から大きく湾曲した角を生やしている。

服装は黒色のジェダイローブを着ている。

性格

平静を装った表情の下に深い感情を隠しており、孤独を好む。

武器

ライトセーバーを1本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は緑色。

戦闘方法

シエンを使い戦う。

備考

ほかのジェダイ達のように談笑している訳ではなく、セイシー・ティン本人はパイロットとしてチルノと信頼関係を築いている。

尚、セイシー・ティンが搭乗している小型宇宙戦闘機はチルノが改造を加えた特注製で、改造を加える前に比べると飛躍的に能力が向上している。

キット・フィストー

ジェダイマスター。

チルノの友人の一人。

種族 ノートラン

所在地

ジェダイ聖堂在住。

容姿

身長は196cm有り、まだら模様の緑色の肌を持ち、頭部から長い緑色の触手を生やしている。

服装は黒色のジェダイローブを着ている。

性格

楽観的な性格である。

武器

ライトセーバーを1本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は緑色。

戦闘方法

ソレスを使い戦う。

備考

よくチルノと行動を共にしている。

シン・ドローリグ

ジエダイマスター。

チルノの友人の一人。

種族 人間

所在地

ジエダイ聖堂在住。

容姿

ダークブロンドの髪を後ろで縛っている。

服装は黒色のジエダイローブを着ている。

性格

苛烈な性格である。

武器

ライトセーバーを1本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は緑色。

戦闘方法

オーガと言うフォームを使い戦う。

オーガはソレスとシエンを組み合わせた物で、攻撃力と守備力を併せ持ったフォームである。

備考

チルノとはよくスパーリングしており、お互いに切磋琢磨し合っている。

ジヨクラド・ダンヴァ

ジェダイナイト。

評議会メンバーの一人。

後にジェダイマスターとなる。

チルノ・トレバーとは夫婦。

種族 人間

所在地

ジェダイ聖堂に住んでいたが、現在は特務研究開発局に住み、ジェダイ訓練生達を訓練している。

容姿

ブラウンの髪をを後ろで縛っている。

服装は黒色のジェダイローブを着ている。

性格

冷静な性格であり、忍耐力が高い。

武器

ライトセーバーとダブルブレードライトセーバーを各一本ずつ所持している。

ライトセーバークリスタルの色は緑色と青色。

戦闘方法

アガトとジャーカイを使って戦う。

他にもテェアズ・カジと言う体術を使う。

備考

ジヨクラド・ダンヴァとチルノは夫婦で殆ど共に行動しており、お互いを深く愛している。

評議会内でも常に冷静に他のメンバー達の話最後まで聞き、最後に自分の意見を述べる。

尚、アガトはチルノとジヨクラドが共同で開発した。

尚この作品において原作開始時の評議会メンバーは以下の通り。

ヨーダ

メイス・ウィンドウ

キリアディムンディ

プロ・クーン

セイシー・ティン

イーヴン・ピール

ヤレアル・プーフ

チルノ・トレバー

ヤドル

ジヨクラド・ダンヴァ

コールマン・トレバー

イス・コス

アデイ・ガリア

キャラ紹介1（後書き）

今回はこの作品での強さ表を書きます。

どなたかうちのチルノのイラストを書いてくれる方がいればすごく嬉しいです。

現時点での強さ格付け表（前書き）

この作品の現時点での強さ表です。随時更新します。モブキャラがかなり強くなっていますが本編の為に必要だったので強化しました。ご了承ください。

現時点での強さ格付け表

強さ表

S

? チルノ・トレバー

? ヨーダ

? コールマン・トレバー

? ジョクラド・ダンヴァ

? メイス・ウィンドウ

? アナキン・スカイウォーカー

A

? シン・ドロリグ

? プロ・クーン

? セイシー・ティン

? キーディ ムンディ

? キット・フィスト

? ルーマス・エティマ

? クレル

? ヤレアル・プーフ

? クワイ||ガン・ジン

? トルウー・ヴェルド

B

? ウイー・マルロー

? セラ・ケトー

? アイマ||ガン・ダイ

? アデイ・ガリア

? イース・コス

C

? ジェダイ・マスター

? ベネイ

? ジェダイ・ナイト

D

?パダワン

?タン・ユースター

E

?ジエダイ・イニシエイト

現時点での強さ格付け表（後書き）

次からは遂に本編です。頑張っ
て書いていきますので、よろしくお
願い致します。

それでは。

見えざる脅威 1 (前書き)

どうも、遂に原作開始です。まだまだ未熟ですが、これからもよろしく願います。

見えざる脅威 1

惑星コルサントにはジェダイ聖堂が有る。

そのジェダイ聖堂の隣にはある一人のジェダイマスターの私設研究施設が有る。

パダワンになる前の子供達はジェダイ・イニシエイトの養成機関であるこの施設でジェダイとして必要な知識を学ぶ。

その教練には施設を管理しているジェダイマスターが自ら教鞭を取り、訓練生に知識を与える。

訓練生たちの教練以外にも此処ではありとあらゆる研究を行なっており、ジェダイが使用している小型通信機などは全てこの機関が開発した物で有る。

この機関が作り出した物により現在のジェダイ騎士団が有ると言っても過言ではないのだ。

ジェダイ訓練生養成施設兼特務研究開発局

sideチルノ

「うーんどうしようかしら・・・」

今書類を見て呻いている彼女こそがこの開発局を管理しているジェダイマスターのチルノ・トレバーである。

因みに彼女はジェダイ最高評議会に所属している評議員であり、ジェダイ技術部門のトップでもある。

戦う時も強すぎるからという理由でライトセーバーを使わずに体術のみを使って戦うほどの腕前である彼女が頭を悩ませる問題は・

「セイシー・・・どうやったらあそこまで強化した機体がい物にならなくなるのかしら・・・」

彼女の抱えている問題、それは彼女の友人の一人セイシー・ティンの専用機である小型宇宙戦闘機の機体がセイシー本人の操縦技術について来れないという事であった。

チルノ本人も機体の追従性を向上させたり速度を出すために出力を強化したイオン・ドライブを搭載したりしたのだが機体がセイシーの操縦技術に耐えられず機体の電気系統が消し飛び、イオン・ドライブは大破、修理不可能になった。

「あれ作るのにかなり掛かったのに・・・」

そう言っただけでチルノが落ち込んでいると、

「チルノ、入るぞ」

セイシー・ティンが入ってきた。

「機体は直ったか？」

「あそこまで壊れたらもう直しようがないわよ……」

セイシーは自分の機体が直ったかを聞きに来たようだった。

それに対してチルノはどんよりとした表情のまま答えた。

「また作り直すのか？」

「それしか無いわね」

セイシーの問い掛けにチルノは頭を押さえながら答える。

「いつそフレームから作り替えるしかないかしら……ん？」

そう言っただけでチルノは考え始める。

するとチルノは何かを思い出したようにセイシーに聞いた。

「セイシー、貴方テレパシー能力を持つてるわよね」

「ああ、有るが……どうかしたのか？」

セイシーは怪訝そうな顔で答えた。

「貴方のテレパシー能力で機体を操作できるように改造すればなんとかなるかも」

チルノはセイシーが持つテレパシー能力で制御できるようにするこ

とを思いついた。

「出来るのか？」

セイシーはその案に食いついてきた。

「多分できると思う」

チルノは多分と言いつつはっきりとした声で言った。

「出来たら連絡するわ」

「ああ、楽しみにしている」

セイシーはそう言って去っていった。

「さて、始めますか・・・ん？」

チルノが改造を始めようとした時、通信用のコムリンクに通信が入った。

「マスターヨードから？」

通信のあいてはヨードからであった。

チルノはすぐにコムリンクのスイッチを入れた。

「マスターヨード、どうかしましたか？」

『マスタートレバー、直ぐに来てくれんかの？』

チルノの問いかけにヨードは直ぐに評議会室に来てくれと言った。

「分かりました、すぐに行きます」

『頼んだぞ・・・』

チルノはそれを了解し通信を切った

チルノはすぐにコムリンクでラボ内にいるもう一人の評議会メンバーで、夫であるジヨクラド・ダンヴァに連絡を取った。

『どうかしたか』

「直ぐに評議会室に来るようによつて」

『了解した』

通信を切った後チルノは今着ている白衣から青いコートに着替え評議会室に向かった。

ジエダイ聖堂最高評議会評議会室

チルノとジヨクラドが評議会室に着くと主な評議員達は既に揃っていた。

「おお、マスタートレバー来たかの」

「ふん、遅いぞマスタートレバー」

ヨードはチルノを笑いながら迎えたが評議会の長であるメイス・ウインドウは不快そうな表情を見せた。

チルノはヨードに用件を聞いた

「何かあったんですか？」

「うむ、由々しき事態じゃ。交易ルートに関する問題で通商連合が艦隊を派遣し惑星ナブーを封鎖したのじゃ」

ヨード重い口調で用件を答えた。

「随分と直接的ですね・・・正直彼等が軍事的戦術に出る事が信じられませんけどね・・・もしかして用件は彼らに対する交渉ですか？」

評議会はチルノに通商連合に対する交渉人としてナブーに派遣しようとしているようだった。

「その通りだマスタートレバー。用件が分かったのなら直ぐに出立しろ」

メイスは用件は終わったとチルノをさっさと追い出そうとする。

「分かりました。ですが私一人ですか？」

「当たり前だろう」

メイスはチルノの問い掛けに何を当たり前前の事と言つ表情で答えた。

「待て！一人でその様な事出来る訳が無いでは無いか！」

だがメイスの答えに評議員の一人であるキィアディィムンデイが激昂しながらその答えを否定した。

「その通りだな・・・せめて二人ほど護衛付けるべきだ」

ムンデイの言葉に同じ評議員のプロ・クーンがそれに賛同する。

「マスターウィンドウ・・・貴方の考えは非常に愚かな物だ。非常に難しいこの任務にたった一人行けな
どと・・・」

評議員の一人のヤレアル・プーフはメイスの考えをはっきり否定した。

「ぬう・・・」

メイスは顔をしかめて黙った。

「マスターダンヴァ、君の意見はどうだ？」

ヤレアル・プーフは静かに話を聞いていた評議員のジョクラド・ダンヴァに話を聞いた。

「そうだな・・・私はクワイィガン・ジンとオビィワン・ケノービを推薦する。彼らなら必ずやり遂げてくれるだろうと私は思う。そして、大切な妻を一人で危険な場所に行かせる訳にはいかん」

「なるほど・・・マスターヨーダそれで宜しいか？」

話を聞いたヤレアル・プーフがヨーダに許可を求めた。

「うむそれで良いじやろう・・・マスタートレバー頼むぞ」

「御任せ下さい」

そう言うとチルノは任務に向かっていった。

数日後

ラディアントVIEI内部

「間もなく到着します」

「分かったわ相手方に着艦許可をとって頂戴」

「了解」

艦長に指示していると目の前の画面に相手方の姿が映った。

『何の御用かな？』

「議長の特使として来ました。着艦許可をいただけませんか？」

『ナブー封鎖は法に乗っ取った物、特使の御見えと有らば喜んで御迎えしよう』

「感謝いたします」

そ言つと通信を切った。

「流石ですね、マスタートレバー」

「あら、ありがとう、オビー」

そう言いながらオビーワン・ケノービが自分のマスターのクワイガン・ジンと共にコクピットに入ってくる。

「相変わらずの腕前だな」

「結構疲れるのよ、これ」

クワイガン言葉にチルノは苦笑しながら言つ。

ルクレハルク級バトルシップ<サカツク>に着艦すると一体のドロイドが現れ挨拶してきた。

「良くお越しいらつしゃいました。私はTC-14と言います」

TC-14に案内されチルノ達はとある一室に案内される。

「特使閣下の御来行を心から歓迎致します。今、主人が参りますので、此処でお待ちください」

そう言つたTC-14は去っていった。

「フォースがトラブル予感させています」

オビ＝ワンそう口にした。

「何も感じない」

「この任務では無く、もっと別の・・・」

「今は目の前の任務に集中しろ」

「マスターヨーダは未来に目を向けると・・・」

「今を疎かしてはいかな」

「まあどっちにしろ、この交渉は長くは続かないわ」

「彼等、根が小心者だから・・・」

暫く三人で話しているとT C - 14 飲み物を渡してきた。

「ありがとう」

そう言いチルノが飲み物を飲もうとした時爆音が響いた。

sideヌート・ガンレイ

「何だと？今何と言った？」

「三人の特使はジェダイの騎士だと思われます」

僕の問いかけにTC-14そう答えた。

すると副官であるルーン・ハーコ提督はこう口にした。

「見なさい！ジェダイが動かぬ筈が無い！」

「お前が言ってジェダイの相手をしろ、僕がシディアス卿に連絡する」

「冗談でしょう？ジェダイの相手など御免被る！」

そう言い合いながら僕は、シディアス卿に連絡するために通信用プログラムを起動した。

「ガンレイ総督何用か」

「シディアス卿、この企み、失敗です……すぐ封鎖を解きます！ジェダイには逆らえませんか！」

「提督……その腰抜けの面、二度と余に見せるでない！」

そう言われるとルーン・ハーコは後ろに下がった。

「ジェダイが出て来るとは少し予想外だったな……予定を速める必要があるか……直ぐに部隊を上陸させよ」

「しかし元老院には……」

「お前たちが気にすることでは無い」

「ジェダイはいかがいたしますか？」

「奴等を送ってきたのが間違いだ。始末しろ！」

「仰せの通りに・・・」

儂がそう言つと、通信が切れた。

儂は直ぐにジェダイを殺すために動き始めた。

特使の乗ってきた船を破壊し、退路を絶つた。

後はジェダイを殺すだけだ・・・

sideチルノ

突然の爆音にオビⅡワンとクワイⅡガンが反応しライトセーバーを起動させた。

しかしチルノは冷静に物事を判断していた。

(この爆発・・・ラディアントVIEIが破壊されたわね・・・と言
う事は・・・)

チルノが思案しているとガスが発生した。

「こうなるわよね・・・クワイⅡガン！オビー！これを！」

チルノはそう言うとかワイⅡガンとオビⅡワンにA99アクアタ・ブリーザーを投げて渡した。

「すまん、助かる」

「お礼はいいわ。それよりも来るわよ！」

そう言うのと部屋の外から声が聞こえてきた。

『死んでおるだろうが、念の為にバラバラに……』

「了解」

「伍長、援護しろ」

「了解、了解」

そう言うのとOOMシリーズ・バトル・ドロイド達は武器を構えた。

「クワイⅡガン、オビⅡ、今よ！」

その声が聞こえるとガスに満ちた部屋から人が飛び出してきた。

「撃て！」

ドロイド・コマンダーは直ぐ様攻撃を指示し、ドロイド達は攻撃したがライトセーバーに跳ね返され二体のドロイドが破壊された。

「よっ！」

チルノは蹴りや拳だけでドロイドを破壊していく。

「この程度じゃあ私は倒せないわよ!」

「凄い・・・」

「よく見て学ぶのだパダワンよ。これがジェダイの中でも最高峰の力を持つ者の力だ」

そう話しているとドロイドは一体だけになったようだった。

「これで、ラスト!」

そう言つてチルノはドロイドに一瞬で接近しサマーソルトキックを打ち込んだ。

それを食らったドロイドは頭が吹き飛び機能を停止した。

「ふう・・・さて先に行きましょう?」

そうチルノは笑顔でそう言った。

二人頷き、三人はブリッジに向かって走った。

途中ドロイドを倒しながら進みブリッジと思われる部屋の前についた。

クワイガンがライトセーバーでこじ開けようとするが、チルノに止められた

「私がやるわ」

そう言つとチルノは扉を思い切り殴つた。

「ハア！！」

一撃で扉は触れると崩れてしまいそうな程にボロボロになった。

「・・・え？」

状況に付いて来れないオビィワンを他所にもう一撃加えようとする
と急にもう一枚隔壁が出てきて扉を塞
いだ。

「ブラストドアか・・・まあ問題無いけどね！せえくのっ！！」

ブラストドアは一撃でボロボロになってしまった。

「これで最後・・・ん？」

チルノが扉を壊そうとすると、丸いドロイドが転がって来て攻撃し
てきた。

「フラックゥアーフォック・オートマタ工業社製のドロイディカ！
？クワイィガン！オビー！逃げて！」

「どつ言つ事だ！」

「あのシールドには攻撃が効かないわ！私が引きつけるから貴方達
は逃げて！後で地上で落ち合いましょう！」

「分かった、気をつけるよ！」

そう言うとクワイ＝ガンはオビ＝ワンと共に逃げていった。

「さて・・・」

「私の相手をしてもらおうかしら？」

ドロイディカがチルノの方を向き攻撃をしようとするが既に其処には既にチルノは居なかった。

「上よ」

その声が聞こえた途端一体のドロイディカが真っ二つになって機能を停止した。

その手にはチルノが殆ど使う事が無い、青い光を放つライトセーバーが握られていた。

残ったドロイディカが攻撃しようとするが、このドロイドが二度と攻撃をする事は無かった。

ドロイディカの体は氷に包まれていたのだから。

「終わりよ・・・砕け散れ」

チルノがそう言い手を握ると氷に包まれたドロイディカは粉々に砕け散った。

「さて・・・遅れちゃうわね」

「急ぎますか」

そう言うとチルノは今まで見た事の無い速度で移動して行った。

残ったのは真つ二つになったドロイディカと粉々に砕け散ったドロイディカの部品のみだった。

見えざる脅威 1 (後書き)

どうだったでしょうか？次はナブー内の話を書きます。
楽しみにしていてください。
それでは。

見えざる脅威2（前書き）

今回はナプー内での話です。オリジナル展開が入ります。それではどうぞ。

見えざる脅威2

上陸船の一つに隠れ、ナブーに降り立ったチルノは乗ってきた上陸船を氷漬けにして完全に破壊し、先にナブーに降りた、クワイⅡガンとオビⅡワンと合流する為に移動していると、この星の原住民であるう人物と一緒にいる二人を見つけた。

sideチルノ

「クワイⅡガン！オビー！」

「マスタートレバー！」

「無事だったか」

「ええ……で、誰？」

チルノは隣に居る人物に聞いた。

「ミーはジャー・ジャー・ビinksって言うよ」

「そう、私はチルノ・トレバーって言うの、よろしくね。ああ、そ
うだジャー・ジャー」

「なによ？」

「あなたグンガンでしょ？彼等の力を借りたいんだけど案内してくれない？」

「案内したいのは山々だけど・・・ミー追放されたの・・・今戻ったらボスにぶっ飛ばされちゃうよ」

「でもここにいとドロイド達に殺されるかもしれないわよ？」

「そ、それは嫌だよ！案内するから付いて来て！」

チルノはグンガン達に協力を仰ぐためにグンガンの住む場所に案内するように頼んだ。

だが、ジャー・ジャーは自分は追放された為案内は出来ないと言う。そこでチルノは森を彷徨っているド

ロイドがジャー・ジャーを殺すかもしれないと教えると、ジャー・ジャーは慌てて案内すると言って走って行った。

「すごいですね・・・マスタートレバー・・・」

「これ位の事は日常茶飯事だからね」

「そう言えばマスタートレバーはどうやって降りて来たんですか？」

「上陸船に隠れてナブーに来たのよ。ナブーに着いた時にバレたんで上陸船ごと氷漬けにして破壊したけどね」

「はあ！？」

そう話しながらジャー・ジャーについて行くと沼地に出た。

「何処まで行けばいいの？」

「水の底までよ！」

そう言っただジャー・ジャーは潜ろうとしたが急に立ち止まってこう言った

「言い忘れてたけどグンガン、余り他所者好きじゃない。だから歓迎余り期待しないでちょよ！」

「大丈夫よ。歓迎されないのは慣れてるから」

そう言っただジャー達は沼に潜っていった。

暫く潜ると水中に街が見えてきた。

チルノ達その街に入って行った。

グンガンシティ

「ここがグンガンシティよ！」

「へえ・・・ここは独自の技術を使っているのね・・・興味深いわ」

チルノは技術者としての血が騒いだのか、嬉しそうにそう呟いていた。

「おいユー達そこで止まれ！」

するとカドウに乗ったグンガンが現れた。

しかしジャー・ジャーは彼と知り合いの様で気軽に話し掛けていた。

「やあ、ターパルス隊長、帰ったよん」

ターパルスは溜息を着きながら、

「またかジャー・ジャー！ボスの所に連れて行く！今度は只ではすまんぞ！」

そう言うとジャー・ジャーはターパルスに連れて行かれ、チルノ達はそれについて行った。

ついて行くと其処には立派な身なりのグンガン達が居た。

その中で最も立派な身なりのグンガン達のボス、ルーゴア・ナスが口を開いた。

「ユー達なぜ来た？地上の機械の兵隊ユーたちの仲間か！」

チルノはその問いに答えた。

「いいえ彼等は私達の仲間ではありません」

「なら何故ここに来た？」

「貴方方グンガンに協力をお願いしたいのです」

「何？」

「ナブーを救うために御力をお貸し頂けませんか？」

「ナブーがどうなるうと関係無い！」

「なら、ナブーに知らせないと」

「知らせる必要等無い、ナブー自分一番だと思ってる、インテリとのぼせてる！」

「地上が制圧されれば次は貴方達です。ナブーが傷付けばゲンガンも傷付く、解ります？」

「襲われない、知られてはいない！」

「そうですね・・・分かりました。ではせめて船をお貸しいただけませんか？」

「良いだろうボンゴをくれてやる。一番の近道はこの星の核を抜けるコースだ。さあ・・・行け」

「御助力感謝します」

チルノは一礼をし背中を向けた。

「ボンゴってなんですか？」

「さあな、乗り物か何かだろう」

「取り敢えず急いで王宮に行かないと・・・」

そう話しながら部屋を去ろうと声が聞こえた。

「星の核を抜ける、それ自殺と同じ!」

「案内が居れば別だけど、フフン!」

クワイ＝ガンはその話を聞くと振り向きルーゴア・ナスに聞いた。

「ジャー・ジャー・ビnkスはこれからどうなるのですか?」

「法に従い罰を受ける」

「彼を案内に借りたいのですが」

「何だと?」

「私は彼の命を救った、彼は私に命の借りがある」

「ビnkス! ユーはこの男に命の借りがあるのか?」

「は、はい偉大なるナス閣下」

「連れて行け!」

そう言うときクワイ＝ガンはチルノ達の後を追っていった。

「考えれば星の核で死ぬよりここで殺される方が良かったかもね!
バカバカ! 何でそんな事言ったの
よ!」

ジャー・ジャー・ビnkスは悲鳴を上げながら追いかけた行った。

ナブー深海星の核付近

ボンゴに乗って移動しているとオビィワンが聞いた。

「そう言えば何故追放されたんだ？」

「簡単言つと、ミー・・・不器用なの」

「不器用なだけで追放されたのか？」

「まあ、簡単に言えばそうなるかも！」

「・・・」

「マスタートレバーどうかしましたか？」

「いや、何でもないわ」

オビィワンが目を瞑って黙っているチルノに聞いたがチルノは手を振って答えた。ジャー・ジャーはずっと喋り続けている。

「ミーがちよつとした事故を起こしたのよ、分かる？ガス爆発！」

「その爆発でボスのハイブリバーをぶつ壊してそれで追放！」

この場所は大型の海洋生物が彷徨っている危険な海域である。

実際ボンゴを襲い掛かろうとした生物も居たが、襲い掛かる前にチルノに氷漬けされていた。

チルノが目を瞑っていたのは襲い掛ろうとしている海洋生物達を
撃つる為であった。

ジャー・ジャー、オビ＝ワンが話している内にナブー首都シードに
着いた。

ナブー首都シード

「綺麗な街ね」

「女王を捜さねばな」

「はいマスター」

「私は別の場所に行くわ」

「何故だ？」

「調べたい事が有るのよ。女王はお願い出来る？」

「分かった、女王は任せろ。女王を見付けたら連絡する」

「お願いね」

そう言うとチルノはシードの美しい街並みに消えて行った。

side out

sideクワイ＝ガン・ジン

チルノと分かれたクワイ＝ガン達は女王がバトル・ドロイドに連行されているのを見つけた。

「上から行くぞ」

「はいマスター」

上の階層に上りドロイドが来るのを待った。

「マスター！」

「今だ！」

クワイ＝ガン達は飛び下りドロイドを攻撃した！

「フツ！」

クワイ＝ガンは一息にドロイドを破壊していく。

「ハッ！」

オビ＝ワンもドロイドが跳ね返したり蹴り飛ばしたりと勇敢に戦っていた。

ドロイドは直ぐに全滅した。

「「」ちらに」

クワイ＝ガンは物陰に女王を隠した。

「我々三人が議長の特使です」

「三人？」

「もう一人は別行動をしています」

クワイ＝ガンがそう話していると遠くで爆発がした。

「な、何だ！？ドロイドか！？」

ナブーの首都シードの知事であるシオ・ビブルは突然の爆発にドロイドが来たのかと身構えた。

「どうやら別行動をしている仲間が暴れている様です」

「一人でか！？なんと無謀な！」

シオ・ビブルは驚愕した。たった一人でドロイドと戦っている者がいると言っただ。

「彼女の心配は要りません。それよりもハンガーは何処かな？」

「こちらです！」

女王の護衛がハンガーへの道を先導し、クワイ＝ガン達は彼を追いハンガーに向かうのだった。

side out

s i d e チルノ

クワイィガン達と分かれたチルノはシード市内を走っていた。

「シード市内の状況は・・・最悪ね、こりゃ」

チルノが見る先にはB1バトル・ドロイドが市民達を連行している姿を見た。

「気に入らないわね・・・」

チルノは不快そうにそう言い、戦闘態勢に入った。

「今助けてあげるからね・・・」

そう言うとチルノは物陰から飛び出しドロイドに飛び掛かり近くにいたドロイドにかかと落としを叩き込んだ。

行き成りの奇襲で近くにいたドロイドは真っ二つになった。

「撃て！撃て！」

ドロイド達は攻撃したがチルノは攻撃を凄まじいスピードで全て避け一撃で破壊した。

「終わりよ」

そして最後の一機をチルノは破壊し、捕まっていた人に話しかけた。

「大丈夫？」

「ああ、有難う御座います。助かりました。私はナブー王室警備隊のチャンバリン中佐です」

「私はチルノ・トレバー。ジエダイよ」

「ジエダイの貴方が何故ここに？」

「女王を助ける為に来たの。今仲間が助けに行っているわ……ん？ちよつと待つて」

二人が話しているとコムリンクにクワイガンから通信が入った。

「チルノ、今女王と共にハンガーに居る。今何処に居る？」

「今ドロイドを倒して人を助けた所よ。今ハンガーに居るって言ったわよね？船で脱出するの？」

「ああ、これからコルサントに向かう。チルノ、お前も早くハンガーに来い」

「いいえ、先に行つて。今からじゃ時間がかかるし、私がハンガーに着くまでに増援がくるかもしれないでしょ？」

「だが……」

「大丈夫よ、ハンガーに有る戦闘機を使うから。何か有つたら連絡して」

「分かつた気を付けるよ」

「そつちもね」

そう言つて通信を切つた。

「私はハンガーに行くけど貴方達はどつするの？」

「私達も連れていって下さい！」

「分かつたわ、行きましょう！」

チルノは助けた市民たちを逃がし、自分に付いて来ると言つたチャンバリン中佐等と共にハンガーに向かいながらドロイドを破壊した。

ハンガー来るまでには最初に助けたチャンバリン中尉、ハンガーに来る途中で助けたジェラス・ジャンク、グレガー・タイフォ、セオメット・ダンレ、ラッシング、アーヴン・ウエンディック、ピロセイ等、40人程になっていた。

尚、ハンガー付近のドロイド軍団はチルノが破壊、或いは氷漬けにして殲滅した。

「ハンガーに着いたけどこの人数が乗れる船は有るの？」

チャンバリン中佐は頷きながら言つた。

「ええ、一隻だけ有ります、此方へ」

チャンバリン中尉に付いて行くと巨大な船が有つた。

「これは・・・ガロフリー・ヤード社製のゴザンティ・クルーザー？いや・・・ちょっと違う、大きさが十数倍以上だしこんなに武装は付いていないわ。ゴザンティ・クルーザーはこんなに 戦闘に特化してない筈・・・チャンバリン中佐、この船は一体？」

チャンバリン中尉は答えた。

「この船はナブーで秘密裏に造られた宇宙戦艦です。女王もその存在を知りません」

「何故戦艦を？」

「もしもの時に備え、王室警備隊の上層部が秘密裏に建造させたのです」

「なるほどね・・・この船は動かせるの？」

「はい、船その物は完成していますし、船の操作に必要な乗員も十五人程居れば動かせる様にプログラムされていますから、大丈夫です」

「船のスペックは分かる？」

「はい、全長720m、全幅460m、全高200m、ハイパードライブ能率はクラス2、予備クラスは12、乗客定員は800人、武装はレーザー・キャノン・タレット50基、クワッド・レーザー・キャノン・タレット30基、アサルト・レーザー・キャノン60基、クワッド・ターボレーザー10基、プロトン魚雷発射管10門、補助武装はN-1スターファイター140機、セラフ級アーバン・ランドスピーダー100機、V-19ランドスピーダー80機です。」

後、シールドは軍用シールドを独自に強化した物で、只の攻撃では傷一つ付きません」

「戦争でもする気だったの？」

チルノは頭を抑えてそう呟いた。お世辞にも自衛の為の装備では無かったのだ。

「まあいいわ・・・取り敢えず船に乗ってナブーを・・・そういえばこの船の名前は？」

「いえ、まだ無いんですよ」

「じゃあ私が名前を付けてあげるわ」

「名前は・・・ファントマでどうかしら」

「良い名ですね」

チャンバリン中佐は笑みを浮かべながらそう言った。

「じゃあ行きましょうか」

そう言ってチルノ達は大型戦艦に乗りナブー脱出するのだった。

見えざる脅威2（後書き）

どうだったでしょうか？

次はナブー封鎖艦隊との戦闘です。
更新をお待ちください。それでは。

見えざる脅威③（前書き）

今回は艦隊戦のみです。

オリジナルの敵キャラが出てきます。

それではどうぞ。

見えざる脅威3

先にナブーを脱出したクワイガン達を追いナブーを脱出したチルノ達はナブー軌道上にいる封鎖艦隊と交戦に入るのであった。

大型戦艦 フアントマ 内部

sideチルノ

「前方に封鎖艦隊です！」

敵艦捕捉の報告が入ると艦内に緊張が走る。

「どうしますか？」

「無理に突破すれば無駄な損害が出るだけね・・・前方艦隊を撃破して突破するわ！全艦攻撃体制に移行！」

チャンバリン中佐の問いにチルノはそう答え、攻撃準備を指示していった。

「ウエンディック中尉！シールドの様子は？」

「問題無い！直ぐに戦闘になっても大丈夫だ！」

「ラッキング中尉、武装はちゃんと使える？」

「大丈夫です！何時でも行けます！」

「ダンレ少佐、操艦はお願いね」

「お任せを」

「目標、前方封鎖艦隊！攻撃開始！」

指示し終わると、チルノは敵艦隊の攻撃を指示した。

ナブー軌道上で艦隊戦が始まった。

side out

封鎖艦隊旗艦ルクレハルク級バトルシップ ヘヴン 内部

side エル・カスター

全く今日はツイてない。ナブー封鎖艦隊の司令として旗艦ヘヴンのブリッジに座っているエル・カスターは溜め息をついた。

先ほどナブーの船が封鎖を突破したのだ。当然カスターは、ヌート・ガンレイ総督直々に叱咤を受け、意気消沈している所だった。

「これでは私の築いてきた栄光が全て水の泡だ・・・」

そうカスターは呟いた。

若い頃から順調に昇進してきたカスターは指揮官としての能力は誰も疑う筈も無い能力を持っていた。

「私の傲慢が生んだミスだ・・・」

その為か、カスターは多少傲慢になっていた。

そのせいで起きたのが先程の失態であった。

カスターは焦った。

この失態が原因で自分が今まで築いてきた栄光が失われるかもしれないと思ったからだ。

「どうにかせねば・・・」

カスターがそう呟き、打開策を考えていると乗艦を衝撃が襲った。

「何事だ！」

カスターは即座に考えを切り替え、状況を訪ねた。

「6番艦 アイエゴ 撃沈！敵の攻撃です！」

「敵だと！？一体何処からだ！」

「ナブー軌道上に敵艦反応を確認しました！」

「モニターに出せ！」

「イエッサー！」

モニターに映し出された敵艦にカスターは驚いた。

ナブーにこんな大型戦艦が有るとは知らなかったのだ。

「あれはゴザンティ・クルーザーか？いや、違う・・・ゴザンティ・クルーザーは、ここまで大きくない筈だ・・・」

カスターは驚きつつも冷静に敵艦の分析をしていた。

「如何しますか？」

「決まっている。迎撃せよ！」

カスターは直ぐ様迎撃指示を出し、命令を飛ばしていく。

「全艦隊に通達！これより我が艦隊は前方に現れた所属不明艦を叩く！火線を集中させ撃墜せよ！」

「私の合図と共に発射せよ！一斉射撃用意・・・撃てえ！！」

カスターの合図と同時に放たれたクワッド・ターボレーザーは真っ直ぐに敵艦に飛んで行き命中したが・・・

「無傷か・・・何というシールドだ・・・」

敵艦は無傷であった。敵艦は反撃し、また一隻友軍艦が撃墜された。

「7番艦 クレイト 撃沈！」

「恐れるな！無敵のシールドなど存在するはずが無いのだ！引き続き攻撃しろ！シールドは必ず破れ」

る！」

「イ、イエッサー！」

「奴等め……一体何者なんだ！！」

後にカスターの指示は正しいという事が証明される。

指示を飛ばしながらカスターは目の前にいる所属不明艦に叫んだ。

これがエル・カスターとチルノ・トレバー初めての出会いであった。

しかし、カスターがチルノを知るのは暫く後の事である。

side out

sideチルノ

「敵艦の撃墜を確認！」

「そのまま攻撃して！敵艦隊をいくらか破壊して離脱するわ！」

「何故です？ここで一気に倒してしまえば良いのではないのですか？」

「私も最初はそう思ったんだけどね……どうやらあっちの艦隊には相当な腕前の司令官が居るようね」

チャンバリン中佐の問いに対してはチルノは少し焦った表情でそう言った

「どう言つ事ですか？」

「さつき敵艦を破壊した時、そこを通つて離脱しようと思つたんだけど、直ぐに敵が破壊された敵艦の穴を埋めるように他の艦を展開したわ。そんな指示を普通の指揮官じゃ出来ないし、出来たとしてもこんなに速く展開できないわ」

「なるほど・・・」

話していると通信士をしているリア・カーシュ大尉が叫んだ。

「敵艦発砲してきました！」

「シールド、フルパワーで展開！急いで！！」

チルノがそう指示しシールドを展開した瞬間敵艦の砲撃がフロントマに命中した。

「ぐうっ！！被害状況は！？」

凄まじい衝撃がフロントマを襲つたがチルノは直ぐに被害状況を報告させた。

「艦体その物に損害は有りません！」

「武装にもダメージは有りません、すぐ使えます！」

「シールドジェネレーターに不具合が発生した！負荷が掛かり過ぎたんだ！」

「やってくれるわね・・・!!」

チルノは奥歯を噛みながら呟いた。

直ぐにチルノはウエンディック中尉にジェネレーターの限界を聞いた。

「後どれ位持つの!？」

「良くて後一回だ!それ以上はジェネレーターが吹き飛ばぞ!」

「後一回ね、分かったわ!敵の攻撃が薄い場所に攻撃を集中して!そこを突破して離脱するわ!」

「分かりました!」

そう指示して十分程経つと敵艦の一隻が爆発した。

「敵艦の撃破を確認!道が出来ました!行けます!!」

「破壊して出来た敵艦隊の穴を通って全速力で脱出するわよ!」

「はい!」

セオメット・ダンレ少佐は指示された通りに全速力で離脱を図った。巧みな操艦技術で攻撃を避けながら離脱まであと少しという所まで行った。

「よし、これで・・・」

ダンレ少佐が続けようとした時、艦体を衝撃が襲った。

「クツ!? 食らったの!?!」

「敵の砲撃がシールドを突破しました! 右舷装甲破損! 損傷は軽微!」

「ジェネレーターが限界だ! これ以上は無理だぞ!」

「後少し持ち堪えて!」

辛うじて攻撃を回避しながら何とか離脱に成功した。

「最後の最後までやってくれるわね・・・!」

チルノは自分の詰め甘さに怒りを抱いているとクワイガンから通信が入った。

「チルノ、我々は今タトウインに居る。今何処に居る?」

「ナブーを脱出したところよ。でもなんでタトウインに居るの? コルサントに行くんじゃない無かったの?」

「ハイパードライブジェネレーター漏れていてコルサントまで持たなくてな。修理を行なう為にタトウインに立ち寄ったんだ」

「なるほどね、私もタトウインに向かうわ」

「分かった」

通信を切りチルノ達はタトウインに向かうのだった。

見えざる脅威③（後書き）

どうでしたか？次はタトウイーンでアナキンと会います。
更新をお待ちください。それでは。

見えざる脅威 4（前書き）

今回はタトウインでの話です。新しい敵キャラが少し出ます。後、オリジナルのドロイドが出ます。

もしかしたら誤字や脱字が有るかもしれませんが、御注意下さい。それではどうぞ

見えざる脅威 4

ナブー封鎖艦隊と交戦したチルノ達は多少の損害を受けつつも離脱し、タトウイーンに向かうのだった。

惑星ナブー、シード王宮

side ナート・ガンレイ

ナート・ガンレイは、ナブー軌道上で有った事を封鎖艦隊司令官のエル・カスターから報告されていた。

「・・・それでその敵艦には逃げられたと？」

『残念ながら・・・』

「ルクレハルク級バトルシップ2隻損失か・・・ツケは高く付いたな司令官」

『申し訳ありません・・・』

「まあ良い、艦隊の数を倍にすれば良いだけの話だ・・・引き続き貴君には封鎖艦隊の司令官を勤めてもらう。良いな？」

『はっ！了解しました！』

カスターからの通信を切りナート・ガンレイは独り言を呟く。

「あの男は有能だから・・・多少の事は大目に見てやらなければ

な。だがそろそろこの総督の地位では物足りなくなってきたな・・・あの老人の言うことは信用できん、いっそ儂自らあの老人を殺し権力を手に入れるのも良いかもしれんな、フッフ・・・ん？」

ガンレイが独り言を呟いていると通信用ホログラムに通信が入った。

「あ奴か・・・」

ガンレイはそう呟き通信用ホログラムのスイッチを入れた。

ホログラムが起動すると其処には一人の女性が映っていた。

「御機嫌よう、総督」

「何か有ったか？」

「ええ、計画は順調に進んでいます。この分だと全て終わるまでそうかからないでしょう」

「それは良い事だ。そういえばお前の妹はどうしている？」

「まだ気づいていません。自分の仕事で手一杯なのが幸いしていませんね・・・まあ軍のトップですから当たり前ですけど」

「良い隠れ蓑になっていると言う事か？お前も政治家のトップだろうに何を言つか・・・まあ良い、あの小娘には目を光らしておけ。感づかれたら厄介だ」

「はい、分かりました。御任せ下さい」

「頼むぞ・・・計画が成就すればあの星はくれてやる。お前の師の事も、あの姫の事も、全て何もかも思いのままで」

「分かっておりますわ。それでは、私はこれで、総督・・・いえ、マイマスター」

「頼むぞ・・・我が弟子よ」

そう言つてガンレイはホログラムのスイッチを切つた。

「あ奴は実によく出来た弟子だ・・・あ奴には安心して事を任せられる。だが、あ奴の妹・・・あの小娘は厄介だな・・・急がねばならんか」

そう呟いていると人の気配を感じ、顔を向けるとそこには一人の二モイディアンが居た。

「・・・何時から居た？」

「あ、あああ・・・」

「まあ良い・・・消えよ」

ガンレイが凄まじい速度でレーザー30プラスター・ピストルを引き抜き二モイディアンの眉間を一撃で撃ち抜いた。

眉間を撃ち抜かれた二モイディアンはそのまま倒れ、事切れた。

「フン・・・」

ガンレイはＬＬー３０ブラスター・ピストルを懐にしまい、転がっている死体に不快そうに鼻を鳴らした。

「誰か！目の前にゴミが転がって居るぞ、処分しろ！」

ガンレイがそう言うと、黒いローブを着た男達が現れ、ニモイデイアンの死体を引き摺って行った。

「アミダラ女王がナブーを脱出し、ナブー軌道上に現れた戦艦は封鎖艦隊を撃破し離脱したか・・・まあ暇潰しにはなるだろう、精々儂を楽しませてくれ・・・」

ガンレイは懐に有るＬＬー３０ブラスター・ピストルを出し指で回転させながらそう呟いた。

ナブーは危険な男を敵に回したのだった。

side out

惑星タトウイーン

大型戦艦 フアントマ 内部

side チルノ

「どうですか？直りますか？」

「シールド以外は殆ど損傷は無いし、なんとかかなると思うわ。でも

シールドは暫く休ませないと壊れちゃうわね」

タトウイーンに着いたチルノ達はファントマの修理を行っていた。

「被害箇所はこの紙に書いてあるからそこを修理して。後シールド
ジエネレーターはここじゃ治せないか

らコルサントに持って行って直すわ。それじゃあそろそろ行くわね」

「お気を付けて」

チャンバリン中佐に見送られながらチルノはランドスピーダーでク
ワイゝガンとの合流地点に向かった。

モス・エспа

クワイゝガンとの合流地点はモス・エспаと言う街であった。

チルノはランドスピーダーで街を散策しながらクワイゝガンを探し
ていた。

「中々良い街じゃないの。．．．ここを治めているのがハットじゃ
なかったらね．．．」

「おい姉ちゃん！良いスピーダーじゃねえか」

「貴方はこのスピーダーが欲しく無くなる」

「俺はこのスピーダーが欲しく無くなる．．．」

「家に帰って人生を考える」

「家に帰って人生を考える・・・」

フォースで近寄って来たチンピラを追い払いながら移動しているとクワイィガンを見つけた。

「クワイィガン！ジャー・ジャー！やっと見つけたわ！」

「おおチルノ！来たか」

「手間取ったけどね。そちらは？」

「女王の侍女のパドメだ。女王が彼女を連れていくようにとの事だな」

「パドメです。よろしくお願いします」

「チルノ・トレバーよ。よろしくね」

お互いに挨拶をしながら移動し、近くに有るジャンク屋に入った。

(ランドスピーダーはオートパイロットにして船に戻した)

「やあ、いらっしやい」

店に入ると、年老いたトイダリアンが出てきた。

「何の用だい？」

「Jタイプ327・ヌビアンのパーツは有るか？」

「ヌビアンのパーツなんざいくらでも有るぜ！付いてきな！」

「小僧、来い！」

店主であるワトーが呼ぶと小さな男の子が出てきた。

「遅かったじゃねえか」

「ファンを洗ってて」

「裏に行くから店番してろ」

ワトーはそう言つとクワイガンと共に裏のジャンク置き場に行った。

「ねえ、お姉ちゃん達天使なの？」

ワトーが去ると男の子がこう口にした。

「えっ？」

「天使？」

「天使だよ。宇宙船のパイロットに聞いたんだ。宇宙で一番美しい生き物だつて。僕はアイエゴ月に住んでいると思うな」

「面白い坊やね」

「あら、嬉しいわ！有難う坊や！」

パドメは困惑しチルノは嬉しそうにお礼を言った。

「なんでそんな事まで？」

「貿易商人や星間パイロットの話を知っているからさ」

「僕もパイロットなんだ。これから宇宙に飛び立つ」

「パイロット？」

「うん、生まれた時からね」

「ここには何時から？」

「うんと小さい時から。三歳頃かな？僕とママはガーデユラ・ザ・ハットに買われたけどポッドレースの賭けに負けて手放したんだ」

「奴隷なの？」

「・・・人間だよ、名前はアナキン！」

「御免なさい、ここには初め来たから勝手が分からないの」

「ダメよパドメ、そんなこと言っちゃ」

「僕が今まで生きて来れたのは手先が器用で物作りが上手いからさ」

「オウ、アウ、アウ！」

裏からクワイ「ガンが戻ってきた。

「行くぞ、ジャー・ジャー」

「オウ、アウ、ウワー！」

「さっきから何やってんのジャー・ジャー……」

「会えて嬉しかったわアナキン」

「じゃあねー！」

そう言っただけでクワイ「ガンは店を出た。

「僕も嬉しかったよ！」

アナキンは去っていくパドメにそう言った。

「これからどうするの？」

「さあな……」

チルノとクワイ「ガンが話しながら歩いていると後ろから騒ぎ声が聞こえた。

「ジャー・ジャー……また何かやったのね」

チルノが見るとジャー・ジャーがダグの男に絡まれていた。

「しょうがないわね・・・」

チルノが何とかしようとした瞬間、意外な助けが来た。

「気を付けるよセブルバ」

「彼は大物だ」

「細切れにされたらレースが出来ない」

「この次は負かしてやる」

「待っている奴隷め」

「返り討ちだよ」

ジャー・ジャーを助けたのはジャンク屋で会ったアナキンであった。

「ハアイ」

「あら、アナキンじゃない」

「お友達ダグと喧嘩になつてたよ」

「それもセブルバって言う超悪と」

「ミー喧嘩は大嫌いね！」

「貴方が助けてくれなかったら危なかったわね」

「でも、ミー何もしてないのに！」

「いや、何かやったんでしようが……」

チルノはそう言いながらアナキンと一緒にクワイ＝ガンのところに行った。

暫くチルノ達は街を彷徨っていた。

「ほら、これ美味しいよ」

「有難う」

アナキンはチルノに食べ物を手渡した。

チルノはその食べ物受け取りていた。

すると店の店主はアナキンにこう言った。

「骨が痛くなってきたよ……砂嵐が来るよ、うちに帰りな、アニ
」

「おじさん達はどつするの？」

「船に戻ろうと思う」

「何処にあるの？」

「街の外の砂漠に有る」

「駄目だよ、今からじゃ間に合わない！砂嵐はとっても、とっても危険なんだ！おいでよ、僕の家直ぐ其処なんだ」

アナキンに案内され砂嵐が去るまでアナキンの家でお世話になる事になった。

「ママ、友達を連れてきたよ！」

アナキンがそう言うのと母親であるシミ・スカイウォーカーが出てきた。

「私はチルノ・トレバー後ろに居るのがクワイガン、パドメ、ジャー・ジャーです」

「まあ良くいらっしやいました狭い場所ですがゆっくりして行って下さい」

「お姉ちゃん達行こう！C-3POを見せてあげる！」

そ言うとアナキンはチルノ達を連れて自分の部屋に走って行った。

Said out

sideクワイガン

アナキン達が去った後クワイガンはシミに口を開いた。

「素晴らしい息子さんです。無償で私達をここまで連れて来てくれました」

「あの子は欲を知らないのです。あの子には・・・」

「不思議な力が有る」

「そうです」

「あの子には先が読める、だからあんなに速く反射行動が取れる。ジェダイの性質です。共和国に産まれていけばもっと早く見つけていたのに・・・あの子のフォースは桁外れです、はつきりと感じます。父親はどなたですか？」

「居ないんです・・・一人で妊娠し、出産し、育てました・・・あの子を連れていくんですね？」

「あの子が望めば」

「あの子は一生奴隷でいる子じゃ有りません・・・あの子をよろしくお願いします」

「必ずジェダイしてみせます」

そう言っているとアナキン達が戻ってきた。

クワイガンはこれからの事を話す為に、チルノを待った。

said out

sideチルノ

アナキンにの部屋に連れてこられた。チルノ達はアナキンの部屋を

見回した。

「へえ、工具が至る所にあるわね」

「まあね、ほらこれがC-3POだよ。すごいでしょ」

「素敵ね」

「本当に？ママの手伝いをさせようと思ってるんだ」

「・・・これを一人で造ったの？」

「うん、そうだよ。一から造ったんだ」

「凄いわね・・・手先が器用とかそういう問題じゃ無いわよ、これ」

「どうしたんですか？」

「いや・・・何でもないわ」

（この歳でこの技術力・・・できれば欲しいわ）

チルノがそんな事を考えているとアナキンがC-3POを起動させた。

「オウ、アナキン様のなんの御用で？」

「お前に友達を紹介しようと思ってね」

「オウ、それは、それは・・・皆様私プロトコル・ドロイドのC

「3POと申します。」

「パドメよ」

「私はチルノ。よろしくね」

「パドメ様にチルノ様、これからよろしくお願いします」

挨拶を済ませクワイガンの所に戻ると食事があり食事をしながら話し始めた。

「僕達の体には爆弾が埋め込められているんだ。僕スキャナで見つけたよ」

「ここには奴隷居るなんて・・・共和国の奴隷禁止法では・・・」

「ここには法律なんて有りません・・・有るのは無法だけです」

「この惑星から出る事が出来れば私が爆弾を取り除いてあげるんだけど・・・あのトイダリアンが手放すとは思わないわ」

「ねえ、お姉ちゃんジェダイの騎士でしょ？」

「何故そんな事を？」

「さっきライトセーバーを見たもん。ライトセーバーはジェダイしか持てないんでしょ？」

「ジェダイを殺して奪ったのかも知れないわよ？」

「それは無いね。誰もジエダイを殺せないし、お姉ちゃん優しいもん、そんな事するはず無いよ」

「有難う。アナキン」

「僕達を開放しに来たの？」

「御免なさい、その為に来たんじゃないの」

「だと思ったのに・・・じゃあ何でこの星に来たの？」

「クワイ!!ガン達が乗って来た船が故障して修理が終わるまでここを出ていけないの」

「ところがお金が無くてね」

「あのごうつくばりにも何か弱点があるとと思うんだけど・・・」

「ポッドレースよ・・・この星では全てあのイカれたレースを中心に回っているの」

「ポッドレースか、マラステアでもやっている。速くて危険なレースだ」

そんなことを話しているとジャー・ジャーが長い舌を使い果物を取ろうとした。

チルノはその舌を掴んで引っ張った。

「二度としないで...」

「ウアオウアー！」

舌を引つ張られたジャー・ジャーは痛そうに呻いた。

チルノは舌を話したがジャー・ジャーはその痛みからか、黙っていた。

「僕明日のブインタレースに出るんだ。僕のポッドに賭けてよ」

「アナキン、ワトーが許さない」

「僕が作ってるの知らないもん！おじさんのポッドって事でレースに出ればいいよ！賞金はパーツを買ってもお釣りが来るよ？」

「アニー、お前をレースに出したくない。レースを見ていると心臓が凍る思いよ」

「アナキン、お母さんが正しいぞ。どなたか共和国に力を貸してくれる人に心当たりは有りませんか？」

「いいえ……」

「そうですか……」

「ママは世の中で一番大事なのは助け合いだって何時も言っているじゃないか！」

「……分かったわアニー。これも運命なんでしょう」

「有難うございます」

「僕のポッド見せてあげる！おいでよ！」

そう言うとアナキンは外に走っていった。

チルノはそのあとを追った。

そこには作りかけのポッドレーサーがあった。

「へえ、もうだいぶ出来てるのね」

「うん、まだ動かないんだけどね」

「じゃあ私が弄ってみるわ」

「お姉ちゃん出来るの？」

「一応ジェダイの中じゃ一番こういう物を作るのが得意だと思ってるわ」

チルノがアナキンとそう話してポッドレーサーを弄っていると。子供たちが来た

「アニー！遊ぼうぜ！」

「悪いけど遊べない。今ポッドレーサー作ってたんだ！それよりも聞いてよ、僕明日のブーントレースに出るんだぜ！」

「これでかい？」

「冗談だろ？」

「何年も前から作ってるけど動いた試しが無いわ」

子供達が口々にそう言うがチルノが現れ、こう言った。

「いいえ、そんな事は無いわよ」

「お姉ちゃん誰？」

「私はチルノって言うの。よろしくね。さっきの話だけど、もうポッドレーサーは出来たわ」

「もう出来たの？」

「ええ、私の方で少し改造したけどね、さあ動かしてみて」

チルノにそう言われてアナキンはポッドレーサーに乗り電源を入れた。するとポッドレーサーは見事に起動したのだ。

「やった、やったよ！動いた！」

「ね？」

「すげえ……」

子供達はその姿をただ呆然と見ていた。

その夜ベランダに居るとコムリンクにチャンバリン中佐から通信が

入った。

「どうしたの？」

「一通りの修理は終わりました。明日になれば船は動かせます」

「分かったわ、明日には戻るからすぐ動かせるようにしておいて」

「分かりました」

チルノが通信を切ると其処にはクワイ「ガンが立っていた。

「チルノ、少しいいか？アナキンの事なんだが」

「どうしたの？」

「あの子の体からおびただしい数のミディ「クロリアンが見つかった。2万個以上有るようだ」

「2万つて・・・私は確か1万5千個ぐらいたし、アナキンがジェダイになって訓練したら私負けるんじゃない？」

「お前のその数値だけでも凄いと思うがな・・・」

「それであの子をどうするの？」

「出来れば連れて行ってジェダイの訓練を受けさせたいと思っている」

「私が評議会に話してみようか？」

「ああ、頼む。私はあの子が運命の子なのかも知れないと思うのだ」
「伝承に有るシスを倒し、フォースに安定をもたらすって言うあの？」

「ああ、あの子のフォースは桁外れだ。おそらく間違い無いと思う」
「その事をオビ―は知っているの？」

「いや、オビ―ワンにはミディ―クロリアンの数を調べさせたただけだ、まだ知らせてはいない」

「そう・・・まあ、まだ知らせなくても良いわね。そういえば明日のレースだけどアナキンは勝てると思う？」

「アナキンは勝つさ。フォースがそう予感している」

「私も同じ考えよ」

「ではアナキンは勝つ事を祈るか」

「ええ」

チルノはクワイ―ガンに夜空を見上げながらそう言った。

翌日

モス・エスパ大競技場

ブインタレースが始まる直前、チルノとクワイガンはアナキンに会っていた。

「準備は万端か？」

「うん！」

「不具合は無いと思うけど、一応注意してね」

「分かったよ、お姉ちゃん」

「いいか、アナキンその瞬間に集中しろ。何も考えるな。本能に従え」

「そうする」

「フォースと共にあれ」

そう言うとチルノとクワイガンは観客席に戻った。

するとシミが話し掛けてきた。

「あの子はどう？」

「落ち着いてる」

「いくらなんでも無謀です！女王がなんと・・・」

「女王は全てを任せると言った。私を信じる」

「自信過剰よ！」

そう話しているとレースが始まったが……ここでアクシデントが起きた。

アナキンのポッドレーサーが行き成り停止したのだ。

「エンスト！？昨日弄ったときはなんでも無かったのに……もしかして誰かに何かされたんじゃない……」

チルノがそう呟いているとアナキンのポッドレーサーが再起動しレースに復帰した。

この時点でアナキンは先頭とはかなり差が出来ていた。

しかしアナキンは巧みな操縦技術でどんどん順位を上げていく。

先頭のセブルバに並び先頭争いをしているとアナキンのポッドから火が出てきた。

アナキンは機転を利かせ、直ぐにその危機を脱してセブルバを破り見事に優勝した。

観客は総立ちになりアナキンの勝利を祝った。

「ママ僕勝ったよ、勝った！」

クワイガンに肩車されながらアナキンは勝利を叫んだ。

レースの後クワイガンはチルノと話していた。

「さて、私はそろそろ行くわ。後でコルサントで会いましょう」

「ああ、コルサントで・・・」

そう言うときクワイガンは、パーツを取りにワットの所に行きチルノは自分の船に戻る為に砂漠に向かった。

チルノが砂漠に有る船の戻る為歩いてると後ろからFCI20ス
ピーダー・バイクが向かってきた。

「ん？誰かしら・・・ッ!？」

スピーダー・バイク乗った人物は、行き成り襲いかかってきた。

チルノは咄嗟に後ろに飛び攻撃を躲し攻撃体勢に入った。

「行き成り攻撃してくるなんて・・・随分失礼じゃない？」

「・・・」

「貴方のその武器・・・ライトセーバーよね。そしてその色・・・
貴方、シスね？と言う事は貴方には師か弟子が居る筈・・・そうよ
ね？」

その人物は何も言わず攻撃してきた。

「行き成り攻撃してくると言う事は当たりね。貴方達シスが何故居
るか分からないけど、倒させてもらっわよ」

チルノはそう言つと襲撃者に向かって走り、その勢いで拳を打ち込んだ。

「ぬ……」

襲撃者は体を僅かにずらし攻撃を避け、そのまま蹴り上げた。

「ちい！」

チルノは腕で防御し、後ろに飛び距離を離してこつ言った。

「やるわね……大体の相手はこれに反応出来ないで喰らって終わりなんだけど……」

「ジエダイの技など通用せん」

そう言い襲撃者はライトセーバーを構えた。

「久しぶりね、貴方みたいな相手と戦うのは……ああそつだ、お礼を言つておくわね」

チルノはそう言つて構えを解いた

「周りに誰もいない場所で襲つてくれてありがとう。ようやく本気を出せるわ」

チルノが呟くと周りの温度が急激に下がり始めた。

「馬鹿な……タトウインは常に熱帯の環境であるはず、貴様……」

・何をした？」

「簡単な事よ。私の能力で周りの気候を氷点下に変えただけ・・・
まあ一時的な物だけだね」

「星の気候を変えたと言うのか？そのようなことが・・・」

「有り得る筈がないと？残念ね、今日の前でそれが起きているわよ。
それより、其処に居ていいの？」

「何？」

「其処に居ると氷漬けになるわよ？」

チルノの言葉に襲撃者はその場から離れようとするが・・・

「逃がさないわよ」

チルノが地面に手を置くと襲撃者の足元から氷の柱が出てきた。

「クッ！」

襲撃者地面から出てくる氷の柱を避けていくが・・・氷の柱に囲まれ動けなくなってしまった。

「これで終わりよ」

チルノがそう言うつと背中に氷の翼が生え、氷の翼を広げた。

翼を広げると凄まじい冷気が吹き荒び目の前に有る物は全てが凍り

ついた。

s a i d o u t

s a i d チャンバリン

「中佐！これを！」

リア・カーシュ大尉に呼ばれてレーダーを見ると砂漠の一部が凍り付けになっていた。

「なんだこりゃあ！何が有ったか分かるか？」

「数分前にマスタートレバーが何者かと戦闘になりました。そして、今行き成り砂漠の一部が氷に包まれました」

「なるほどな・・・そういえば何時でも動ける様にしておくとマスタートレバーが言っていたな」

「どうしますか？」

「フロントマを動かすぞ！低空で飛びマスタートレバーを回収する！」

チャンバリン中佐はフロントマを動かしチルノの所に向かうのだった。

s a i d o u t

s i d e チルノ

「まさかあれを避けるとはね」

チルノは氷の上に座りながらそう言った。

「ギリギリだったかな」

襲撃者はそう言いながら立ち上がった。

「本当は決着を着けたい所だけど、今回は止めておくわ」

「どう言う事だ？」

「時間切れよ」

そう言うと、チルノは後ろに飛び低空で飛んできたファントマの空いているカタパルトに飛び乗りタトウインを後にした。

後に残ったのはファントマの飛んで行った方向を睨む襲撃者だけだった。

見えざる脅威 4 (後書き)

どうでしたか？総督と話していた人物は東方のキャラです。
分かる人には分かると思います。次はコルサントです。更新をお待
ちください。
それでは。

見えざる脅威 5 (前書き)

今回はコルサントの話です。

今回はそれほど面白い所は無いかもしれませんが。

御注意下さい。

それではどうぞ。

見えざる脅威 5

タトウイーンで謎の襲撃者に襲われたチルノだが、攻撃を退け脱出に成功したのだった。

大型戦艦 フアントマ 内部

「ご無事ですか!？」

タトウイーンから脱出した後、チルノはカタパルトに座り込んでいた。

座り込んでいるとチャンバリン中佐が走って来てそう聞いた。

「ええ・・・何とかね」

チルノは手をひらひら振りながら答えた。

「何者だったんです？」

「分からないわ。ジエダイの術に良く通じていたみたい・・・取り敢えずこの事はコルサントに戻ってからね。コルサントに向かって頂戴」

「分かりました」

チャンバリン中佐は指示された通り、フアントマをコルサントに向けて発進させた。

惑星コルサント、聖堂区域

チルノ達はコルサントに到着し、コルサント内に有る聖堂区域に向かっていた。

「この先に有る特務研究開発局に向かって。そこで修理するわ」

「了解しました」

そのまま船を進めると巨大な研究施設に着いた。チルノは目の前に有る研究施設のハンガーに着艦するよ
うに指示し、ファントマは着艦した。

「貴方達はこの船で待っていてね」

「分かりました」

チルノはチャンバリン中佐に指示をして研究施設に入っていく。

チルノが施設内を歩いていると、職員であるジャック・エルダーが声を掛けてきた。

「局長！あの船なんなんですか！？どう見ても戦艦じゃないですか！なんで戦艦に乗って来たんですか？」

「ああ、あの船？ちよつと任務先の惑星を脱出する時使ったのよ」

「惑星を脱出！？何やらかしたんですか！？」

「まあ、そんな事どうでもいいわ。ジャック、あの船のシールドが

壊れてるから直しといて、じゃあね!」

「どうでもいい!?!良くはないでしょ! あっ、ちょっと!どこ行くんですか!?!局長!」

ジャックの声を気にせずチルノはジェダイ聖堂に向かった。

ジェダイ聖堂、最高評議会評議会議室前

評議会議室に入ろうとすると後ろから声を掛けられた。

「チルノ」

「クワイ!!ガン!今来たのね!オビーは・・・何か久しぶりね」

「私の扱いが悪い気が・・・」

「気のせいじゃない?それよりもこれから評議会に報告するんでしよう?なら私も行くわ」

「何か報告することが有るのか?」

「ええ。大事な報告がね・・・」

そう言うとチルノ達は評議会議室に入った。

評議会議室に入るとチルノ以外の評議員は全員居た。

「おお、チルノ戻ったか」

評議員の中には義父であるコールマン・トレバーの姿も有った。

コールマンはチルノに話し掛けてきた。

「お父さん！何時帰って来たの？」

「昨日だ。任務が長引いてな・・・」

「そう・・・」

二人が話していると、評議会の長であるメイス・ウィンドウが横槍を入れてきた。

「マスタートレバー！私語は慎め！マスターコールマンも今は遠慮頂きたい！」

「申し訳ありませんマスターウィンドウ」

「相変わらず頭の固い男だ・・・」

チルノは自分の非礼を詫びたが、コールマンは話を中断させられたのが気に食わないのか文句を言いつつ席に戻った。

「それで、なんの報告かの？」

この場の空気を戻すためにヨーダがチルノに用件を聞いた。

「はい、私はシスと思われる戦士に遭遇しました」

「シスだと？」

「馬鹿な・・・」

「千年も前に絶滅した筈ではないのか？」

「もし、それが真だとすれば一大事だな・・・」

チルノの報告により評議会室は一気に騒がしくなる。

滅びたはずのシスが現れたのだから仕方ないのかもしれない。

「ふむ・・・マスタートレバー、お前には女王の護衛とお前を襲った襲撃者の調査をしてもらおう。襲撃者がシスであった場合、可能ならこれを捕らえよ」

「分かりました」

チルノが頷き、下がろうとすると一人の評議員が声を掛けた。

「チルノ、惑星ナブーの任務の報告はどうした？」

「そう言えば、まだ報告が有ったっけ・・・忘れる所だったわ、有難うジョクラド」

「いや、良いさ」

声を掛けたのはチルノの夫であるジョクラド・ダンヴァだった。

ジョクラドに指摘されて思い出したチルノは新しい報告を始めた。

「惑星ナブーの状況は・・・予想以上に酷い状況です。街をバトル・ドロイドが闊歩し、市民達は収容所

に入れられています。私がナブーの首都でクワイⅡガン達と分れて市内を調査していると、ドロイドに連れて行かれる市民達を見つけたのでこれを救助、市民達を逃がしました。捕まった人の中でナブー王室警備隊の隊員が居たので、彼等と共にナブーを脱出しました」

「その者達は何処に居る？」

「特務研究開発局のハンガーに大型戦艦が停泊しています。その中に居ますよ」

「成程・・・それで報告は終わりか？」

「いえ、まだもう一つ。それはクワイⅡガンが話します。・・・クワイⅡガン、お願い」

チルノがそう言うくとクワイⅡガンが前に出て来た。

「私はフォースの中心を見付けました」

「それは人の周りにと言う事か？」

「いえ、子供です。私はあの子が運命の子だと思つのです」

「運命の子だと？」

「フォースにバランスをもたらすと言うあの？」

「只の伝説では無かつたのか？」

「信じられん……」

評議員達は伝説の存在を見つけたと言う言葉にどよめいた。

しかしヨードは冷静にクワイ＝ガンに聞いた。

「それでマスタークワイ＝ガン、その子をどうしたいのじゃ？」

「あの子をテストしたいのです」

「ほう？その子供にジェダイになるためのテストをしたいと？」

「はい」

「マスターヨード私もお願いします。彼にテストを受けさせてあげてくれませんか？」

「ふむ……」

ヨードが考えいるとメイスが口を挟んだ。

「何を言うかと思えば……素性の知れぬ子供にテストを受けさせる？そのような事を許すと思つのか？」

メイスがそう罵ると評議員のキ＝アディ＝ムンディから反論が飛んだ。

「何と愚かな！話だけで全てを判断するとは！もし、クワイ＝ガンが言う通りその子が運命の子だとすればどうするのだ！」

「実在するかどうかも分からぬ物を信じよと言つのか！」

「ではクワイ＝ガンが言っている事は嘘だとも言うのか！」

「大方、只ミディ＝クロリアンの数が多い子供を連れてきただけだろっ！」

メイスの言葉を評議員のプロ・クーン が否定した。

「それは無い。クワイ＝ガンがそのような嘘をつく必要がどこにある？くだらん中傷は止めていただこう」

「くっ……」

「見る、最初からお前は間違っていたという事だ！」

「しかし、本当に運命の子だと言う証拠は……」

「だからそれをテストしたいとクワイ＝ガンとチルノが願い出ているのだろっが！評議会の長として其処に座っている内に脳が錆び付いたか！？」

「貴様っ！！！」

「まて！」

ムンディとメイスの口論がヒートアップしてくるとコールマンが二人の口論を止めた。

「取り敢えず落ち着け。話が進まん」

「申し訳ありません、マスターコールマン……」

「申し訳ない……」

「マスターウィンドウは暫く無理だな……限定的に私が進行を担当しよう。マスターヨーダ、如何しますか？」

「うむ、その子を連れてこい」

「了解しました」

メイスの代わりにコールマンがヨーダに答えを聞き、マスターヨーダがアナキンを連れて来る事を許可し、クワイガンがアナキン連れて来て、テストが始まったのだった。

チルノ、クワイガン、オビワンの三人は評議会室の近くでテストが終わるのを待っていた。

「さっきの口論は凄かったですね……」

「あの二人、仲が物凄い悪いのよ……」

「いつもちょっとした事で喧嘩するのよ。大体はお父さんが止めるんだけど、お父さんが任務で居ない時は止めるのに物凄い苦労するのよ……前、私が止めようとした時こっちにまで飛び火してね、ようやく収まった時は喧嘩が始まってから一時間位経っていたわ」

「凄いですね……マスターコールマンって」

「まあ、評議会でも一、二を争う位偉いからね」

「そんなに偉いんですか？」

「知らないの？マスターヨーダやマスターウィンドウが居ない時はお父さんが最高の権限を持つよ？それにお父さんは通常の状態でも自分で使える権限は相当の物だからね、個人の権限はマスターウィンドウよりも多く使えると思うわよ？」

「そんなに！？じゃあマスタートレバーはある意味お嬢様なんですか？」

「そうなるのかしら？考えた事無かったわ。小さい頃からジェダイの訓練をしていたから」

「そうなんですか・・・」

チルノとオビワンが話しているとクワイガンが話し掛けてきた。

「チルノ、そろそろテストが終わる頃だ」

「分かったわ」

「マスター、あの子はテストに受かりませんよ。歳が行き過ぎてる」

「アナキンはジェダイになる。間違い無い」

「評議員達をまた無視するわけにもいきませんよ？」

「別にいいんじゃない？」

「やるべき事をやる。それだけだ」

「どうしてそう規則破れるんですか？」

「評議員も今度は黙っていない」

「別にそれ位なら問題無いわよ？私、結構規則破るしね」

「お前もまだ修行が足りんな」

「・・・」

評議会議室に行くとき既にテストは終わっていた。

ムンデイが口を開いた。

「確かに強力なフォースだ」

「まあ、ここまで感じる位だからね・・・」

「では彼をジエダイに・・・」

「いや、修行は受けさせぬ」

しかしメイスは修行を受けさせないと言っただ。

クワイガンがメイスに理由を聞いた。

「何故です？彼は選ばれし者です。お分かりでしょ？」

「マスターウィンドウ、何か問題でも有るのですか？私には問題が有るようには見えないのですが」

「この子のフォースは強すぎる・・・この子を訓練するには抵抗が有るのだ」

メイスがそう言うと、クワイガンがアナキンの肩に手を置いて言った。

「ならば、私が訓練します」

「何じゃと？」

「オビワンは卒業です。実戦で学ぶ事は有りますが私が教える事は有りません」

「心構えは出来ております」

「独り立ちを決めるのは評議会なのじゃ！」

「この子の事や、オビワンの事は今は保留にしよう。今はもっと別の用件が有るのだ」

アナキンの事やオビワンの独り立ちについて話していると、コルマンがこの件を保留すると言い、別の用件が有ると答えた。

「アミダラ女王がナブーに戻るらしい。お前達はアミダラ女王の護衛としてナブーに向かえ」

「そうすれば例の襲撃者も姿を見せよう」

メイスがクワイ・ガン達に任務を伝えていると、表議員であるジヨクラド・ダンヴァが声を上げた。

「マスターウィンドウ、少し宜しいか？」

「何だ？マスターダンヴァ」

「私もナブーに行かせてもらえないだろうか？」

「何だと？」

「ナブーの報告を聞いて私は、後一人ナブーに行く者を増やした方が良いと思った、だから私が立候補したのだ。それに・・・」

「それに、何だ？」

「訓練だけでは腕が鈍ってしまうのでな。マスターヨード、如何か？」

「まあ、良いじゃろう」

ジヨクラドの提案にヨードは少し考えたが、その提案を受け入れた。

「では、任務に向かえ」

メイスがそう言うとチルノ達は一礼し、任務に向かって行った。

「クワイ＝ガン、私とジヨクラドは別の船で行くわ。ナブーで会いましょう」

「ああ、分かった」

そう言っつてクワイ＝ガンと別れ、チルノとジヨクラドは開発局に有る船に向かった。

開発局のハンガーに着くと地面に座り込んでいるジャックを見付けた。

「ジャック、修理は終わった？」

「何とか終わりましたよ・・・」

「そう、有難う。後私がナブーに行く前に頼んだあれはどうなったの？」

「もう少しで完成します。俺達、徹夜でやりましたからね・・・」

「ご苦労さま。私が任務から戻ったら、一日休みをあげるわ」

「お願いします・・・」

ジャックはそう言っつと、フラフラと歩いて行った。

「じゃあ行きましようか」

「ああ」

チルノとジヨクラドは修理が終わったファントマに乗りナブーに向かうのだった。

見えざる脅威 5 (後書き)

どうだったでしょうか？次はナブーに戻ります。
オリジナル展開が入ります。御注意下さい。
それでは。

見えざる脅威 6 (前書き)

更新が遅くなっていますすみません・・・今回はナブーでの決戦です。物凄く長いです。

もしかしたら誤字、脱字や変な所が有るかもしれません。

御注意下さい。

それではどうぞ。

見えざる脅威 6

ナブーに戻る女王の護衛としてチルノ達は再びナブーに向かうのだ
った。

惑星ナブー、シード王宮

sideガンレイ

ヌート・ガンレイとルーン・ハーコは、ホロクロンでダース・シデ
イアスと通信をしていた。

「惑星の占領は終えたか？」

「原始的な生物の小さな集落を占領し終わったところです。今や完
全に我等の支配下に・・・」

「結構、残る気掛かりは元老院の動きだけだ。ナブーには弟子のダ
ース・モールを行かせよう」

「はい、シディアス卿」

「シスがここに・・・」

「お前はモール卿を迎える準備をしろ。儂にはやることがある」

「分かりました総督」

そう言うとルーン・ハーコは去って行った。

ルーン・ハーコが去るのを待つてから有る人物達の名を呼んだ。

「エイギス！マルガス！」

ガンレイが呼ぶと黒いローブを被った男が二人現れた

「お呼びで？総督」

「このシード王宮を、アミダラ女王が奪い返そうとしておるらしい。おそらくジェダイも来るだろう。お前達には来るであろうジェダイの相手をしてもらう」

「了解しました。ジェダイは如何しますか？」

「殺せ」

「了解」

そう言うつと男達は闇に溶けて消えた。

「さて、久し振りの戦場か・・・儂を失望させるなよ」

ガンレイはそう呟きながらシードの景観を見ていた。

said out

大型戦艦 ファントマ 内部

side チルノ

チルノはロイヤル・スターシップに乗っているアミダラ女王とホロクロンで通信をしていた。

「初めまして女王陛下、私はチルノ・トレバーと言います。こっちは私の夫でジェダイのジヨクラド・ダンヴァアです」

「よろしくお願い致します」

『こちらこそよろしく頼みます、マスタージェダイ』

「陛下、率直に申し上げると今の我々では通商連合のドロイド軍団に勝つことは難しいでしょう」

『どう言つ事ですか？』

「まず、戦力が有りません。貴方の護衛と私の部隊だけではドロイド軍団には勝てません。それと、もし戦力が有っても総督を取り逃がしてしまえば御仕舞いです。総督を取り逃がせばもっと多くの戦力を連れて戻つて来ます」

『ではどうすれば良い？』

「私に考えが有ります。ジャー・ジャー其処に居るんでしょ？」

『ミーに何か用？』

「貴方達ガンガンに協力をお願いしたいの。お願い出来る？」

『分かったよ！』

「これで、上手くいけばガンガンの協力が得られます。そうすれば連合のドロイド軍団と戦う事も可能です」

『上手くいく事を祈りましょう』

「そうですね、それでは地上で落ち合いましょう」

『分かりましたそれでは・・・』

チルノはホロクロンを切るとチャンバリン中佐に指示を出した。

「中佐達は軌道上で待機していて。私とジヨクラドはシャトルで降下するわ」

「シャトルですか？」

「ええ、コルサントで修理をしている時にリパブリック・シャトルを積み込んだのよ」

「そうだったんですか・・・」

「シャトルに何人が乗せるわ。そうね・・・ジャーニック中尉、ラッシング少尉、ピロセイ少尉、タイフォ少尉、他にも20人程連れて行くわ」

「分かりました、お気を付けて」

ハンガーでリパブリック・シャトルに乗りチルノはナブーに降下した。

惑星ナブー、森林地帯

ナブーに降下したチルノ達は地上でアミダラ女王と合流した。

「陛下、ただ今到着しました」

「ご苦労さまです。今、ジャー・ジャーがグンガンの水中都市に向かいました」

「では、暫く待機ですね」

チルノがアミダラ女王と話している後ろでは、グレガー・タイフォが叔父のパナカとの再会を喜び合っていた。

「叔父さん!」

「タイフォ!? 無事だったのか!」

「はい、マスタートレバーに助けられたんです!」

「そうだったのか・・・」

「助けられたのは私だけでは無いんですよ、ほら!」

「」「隊長!」「」

「ジャンニック! ラッシング! ピロセイ! お前達も無事だったか!」

「我々以外にもナブー軌道上で、チャンバリン中佐がフロントマで指揮をしています」

「フロントマ？」

「王室警備隊の上層部が、極秘で開発した大型戦艦の事です。隊長も御存知では？」

「いや・・・私はそのようなことは知らない。どうやら一部の者が裏でやっていた事だったようだな」

「ですが、極秘にされていたのが幸いでした。そのおかげで我々は脱出する事が出来たのですから」

「そうだな・・・今は再会を喜ぼう」

パナカ達が再会を喜び合っているとジャー・ジャーが戻って来た。

「ジャー・ジャー、どうだった？」

「街がメチャクチャになってたよ、戦いの後だと思うけど・・・」

「グンガンは皆殺しに遭ったのでしょうか？」

「ミーそれは無いと思うよ！グンガン達多分秘密の聖域に向かったと思うね！」

「秘密の聖域？」

「グンガン、何かトラブルに遭うと聖域に行くね案内するよ、皆付

いて来て！」

チルノ達はジャー・ジャーの先導でグンガンの聖域に向かうのだった。

グンガンの聖域

聖域に着くと其処には大勢のグンガンが居た。

ルース・ターパルスの案内によりチルノ達は、ボス・ナスの前に連れてこられた。

「ナス陛下ナブーのアミダラ女王が見えました」

「うう・・・ハ、ハイドウ！ナス陛下」

一番奥の大樹の上に載っていたボス・ナスがアミダラ女王に話し掛けた。

「ジャー・ジャー・ビックス、その者たちは誰じゃ？」

「ナブーの女王アミダラ、平和を求めて参りました」

「ああ、ナブーのボス！機械の兵隊やって来た！ユーの所為、ナブーが悪い！」

「私がここに来たのは貴方と同盟を・・・」

「ナス陛下！」

「ユーは誰じゃ？」

「私がアミダラです」

「え！？」

「パドメが女王？」

その言葉に辺りは騒然となった。

「彼女は影武者です。忠実な護衛です、私の身を護るためにに必要だったのです。どうかお許し下さい」

「貴方方とは交流こそ無くともこれまで争う事なく暮らして参りました」

「保たれたその平和を連合軍が一気に砕こうとしています」

「今戦わなければ平和は訪れません」

「力をお貸してください」

「この通りお願いします」

「貴方の僕として・・・」

「私どもの運命はあなた次第です」

そう言うとアミダラ女王は跪き、他の者も跪いた。

「ハ、ハハハ！ユー達もうグンガンより偉いと思っていないか？」

「いいぞ、気に入った！ミーとユーは友達！」

その瞬間周りは歓声に包まれた。この瞬間グンガンとの同盟が成立したのだった。

side out

side ガンレイ

ガンレイはナブーに戻って来たアミダラ女王の様子をダース・シディアスに報告していた。

「調査隊を向かわせました。沼地に降りたのは確認済みです」

「アミダラの行動は予想外だ。何を考えている？モール卿、心して掛かれ！」

「了解しましたマスターシディアス」

（シディアス・・・詰めが甘かったな。貴様の詰めのがんさがこの事態を発生させたのだ）

ガンレイはシディアスとモールの会話を聞きながら心の中でシディアスを罵った。

この事態がシディアスの能力の限界を露呈した事にガンレイは気付いたのだ。

（老人よ・・・貴様の底がしれたな。元より貴様に対して忠誠等は無い・・・今は力を蓄え、そう遠くない未来に儂が全てを手に入れる。そう、全てをな・・・）

ガンレイは目の前に映る老人を見ながら、心に秘めている黒い野望を実現するために思考を巡らすのだった。

side out

side チルノ

チルノがアミダラ女王達と話していると街に向かった警備隊が戻ってきた。

その近くでボス・ナスとジャー・ジャーが話ながら歩いていた。

「いや良くやった！ユーがナブーとグンガンをついにした！」

「いやそんな・・・」

「で！ユーをグンガンの将軍に任命する」

「将軍！？うあうああ〜」

グンガンの将軍に任命されたジャー・ジャーはあまりの驚きで気を失った。

ボス・ナスはジャー・ジャーの様子を見て笑いながらチルノ達の所に来た。

「無事で良かった。隊長状況はどうです？」

アマダラ女王そう言うとパナカが報告を始めた。

「陛下国民の殆どは收容所に、少数の警官と親衛隊員が地下に潜って抵抗しています。リーダーを何人が連れて戻りました。連合軍の規模は予想した以上に膨大です。そして強力だ。陛下、この戦い我等に勝ち目は有りません」

パナカがアマダラ女王にそう報告していると、チルノがアマダラ女王に有る策を進言した。

「陛下、私に考えが有ります。まず、グンガン軍は敵の主力をおびき出して下さい。その内に我々が別ルートで侵入し、正門まで行きます。私とが牽制行動を行い、その内隙に王宮に侵入し総督を捕らえます」

「ですが、もし総督を取り逃がせばもつと多くの軍団を引き連れて戻ってきます。それにこの策はグンガンにも犠牲が出る、貴方達の武器では通商連合のドロイド軍団には歯が立たない」

「ミー達死ぬ事を恐れない！」

「だからこそ全力で総督を捕まえるのよオビー。それに、もう一つ私に考えが有るの。陛下、ナブーのスターファイターを軌道上に送り、ドロイド指令船を破壊すれば戦況は私達の勝利で確定します」

「ですが、ナブーのファイターではドロイド指令船のシールドは破れません」

「その為に軌道上にファントマを待機させているのよ。ファントマの攻撃でシールドを破って、ファイターで破壊すればいいのよ」

「成程・・・」

「分かりました貴方の策で行きましょう」

「有難うございます」

チルノの提案を受け入れたアミダラ女王は、攻撃をする為動き出した。

s a i d o u t

s a i d ガンレイ

ガンレイはメクノチエアに映っているダース・シディアスに報告を行っていた。

「思った以上に愚かな女だ」

「沼地に集結している軍勢対して我が全軍を差し向けます。原始的種族が殆どの様です」

「それは我等に好都合だ」

「攻撃を御許し下さいますな？」

「奴等を殺せ、ひとり残らず」

「仰せの通りに、シディアス卿」

通信が切れるとガンレイはダース・モールに指示を出した。

「モール卿、貴殿にはジェダイの相手をしてもらいたい。宜しいか？」

「元よりそのつもりだ」

「では、お願いする」

ガンレイがそう言うとモールは去って行った。

「儂も客人を持って成す準備をするか・・・」

そう言うとガンレイはある部屋に向かった。

其処に有ったのは極秘に王宮に運搬させた漆黒の装甲服だった。

「これを使うのも久し振りだ・・・」

ガンレイは装甲服を触りながら呟いた。

「精々楽しませて貰おう」

そう言いながらガンレイは笑っていた。

s a i d o u t

惑星ナブー、シード王宮前

sideチルノ

チルノ達はグンガンの陽動で手薄になったシード市内に侵入し、王宮前で合図を待っていた。

「合図が来るまで待機よ」

「分かりました、マスタートレバー」

「・・・」

「どうしたの？ジヨクラド」

「いや、フォースがトラブルを予感させている。それも特大のな・・・」

「トラブル？」

「ああ・・・」

ジヨクラドの言葉にクワイ「ガンがとある噂を口にした。

「それと関係が有るか分からないがこんな噂を聞いた事が有る。通商連合の総督、ヌート・ガンレイは

元々はマンダロリアンに所属していて、凄腕の戦士であったと」

「何それ？その噂が本当なら王室警備隊じゃ勝てないじゃない」

「あくまで噂だ。だが注意するに越したことはないだろう」

「ええ、そうね頭に入れておくわ」

ガンレイの事で話していると向かい側に居るパナカが合図を送ってきた。

「来た！」

チルノはそう言うと攻撃するために掌に冷気を集め出した。

奇襲の準備が整い別働隊が攻撃を始めた。

「凍れ！」

チルノがそう言いながら掌に集めた冷気の衝撃波を敵に打ち込んだ。打ち込まれた冷気にドロイド達は一瞬で凍り着いた。

その内にチルノはアミダラ女王達と共に王宮に入って行った。

side out

side ガンレイ

ルーン・ハーコはドロイドからアミダラ女王が王宮に攻めて来たと報告を受けていた。

「大佐！何としてもこの玉座の間にアミダラ女王を入れさせるな！」

「了解」

ドロイドの指揮官は部隊を連れて去っていった。

「こんな時に総督は一体何処へ……」

「儂なら此処だ」

「総督！今まで何処に……その格好は一体！？」

ハークが総督の方を見ると総督の姿に驚愕した。

ガンレイが着ているのはいつもの高級な服ではなく、漆黒の装甲服を着ていたのだ。

「この服か？昔使っていた装甲服だ。儂は昔、マンダロリアンだったのな」

「その装甲服を着てどうするのですか？」

「決まっている。儂も戦闘に参加するのだ」

「そんな、無茶です！もし総督の身に何か有ったら……」

「儂は戦士だ、戦場で死んだとしても悔いは無い。それに死ぬつもりも無い。もし儂が死んでもお前が後を引き継げば良い」

「で、ですが……」

「ここは任せる」

そう言うとガンレイは腕に持っていたT字型バイザーの付いたバトル・ヘルメットを被り、背中に付いているジェットパックを使い開いている窓から飛び出した。

s a i d o u t

s a i d 王室警備隊

王宮の前では王室警備隊の別働隊がドロイドと戦っていた。

「喰らえ！」

ジェラス・ジャン尼克は、そう言いながら残っていた最後のドロイドを破壊した。

「これで最後か・・・ラッシング！ピロセイ！タイフォ！生きてるか？」

「大丈夫です！」

「こちらにも問題ありません！」

「こっちもです！」

ジャン尼克は部下達の安否を確認した。

どつちやら全員無事の様だった。

「よし、我々は別の場所に・・・ん？何だあれは？・・・っ！不味

いぞ・・・避けるおお!!」

「ぐああ!!」

「うつ・・・」

「ガア!？」

ジャンニクが部隊を率いて別の場所に行こうとした瞬間上空から何かが現れ攻撃してきた。

ジャンニクは直ぐに回避行動を指示したが、回避が遅れた数人が犠牲になった。

「くそっ行き成り攻撃してくるとは・・・何者だ!」

ジャンニクが何者かが攻撃してきた方向を見ると黒い装甲服を着た男が立っていた。

「・・・」

「くそっ仲間の仇だ!」

「おい、よせ!」

一人の隊員がジャンニクの止める声を聞かず攻撃した。

「ふん・・・」

しかし男は、攻撃を最小限の動きで避け素早い動きでブラスターを

連射して反撃した。

反撃を受けた隊員は銃弾を体に三発受け背中から倒れた。

「おい、大丈夫か？しつかりしろ！」

「駄目だ・・・もう死んでる」

「くそっ！各員、奴を敵として対処しろ！場合によっては退却も考える！」

「ほう？向かって来るか、面白い！」

ジャンニクが自分の部隊に戦闘態勢を取らせると、男は嬉しそうに呟きながら指でブラスターを回転させ、警備隊に向け構えた。

「儂を楽しませてくれ！」

「抜かせ！貴様に殺された部下の仇を取ってやる！」

その言葉が引き金となり戦闘が始まった。

男は装甲服に付いたジェットパックで空を飛びながらブラスターを連射してきた。

「全員物陰に隠れる！」

ジャンニクの指示で全員が物陰に隠れ攻撃を回避し、物陰から反撃する。

「くそっ、なんてスピードだ！全く当たらないぞ！」

「ピロセイ！前に出過ぎるな！」

「分かっている！ラッシング！」

物陰に隠れながら攻撃していると男が攻撃を止めた。

「弾切れか？」

「分からん・・・だが、今動くのは危険だ」

「自分が様子を見えます」

「よせ！無茶は止めるタイフォ！」

タイフォは他の隊員が止めるのを聞かず隠れていたランドスピード
ーから顔を覗かせた。

其処にはミサイルランチャーを空中で構えた男がいた。

「愚かな・・・わざわざ顔を出すとは。新兵か？まあいい、消えて
貰う」

男はそう言いながらミサイルランチャーを発射した。

タイフォはその場から離れようとするが、足下に仕掛けられたスタ
ン・ネットが起動した。

「ぐあああ!!」

タイフオがスタン・ネットに掛かり身動きが取れないでいる内にミサイルは着弾、周りは爆音に包まれた。

「タイフオ!!」

ジャンニクの叫び声が周りに響いた。

「よくも!!」

何人かの隊員が物陰から飛び出し攻撃をする。

「いかな・・・戦いで冷静さを失っては。命を落とす事になるぞ?・・・この様に!」

男は片手に持ったアドベンチャー・スラッグスローワー・ライフを片手で構え、正確に攻撃してきた。

「くそっ!」

攻撃をした隊員達は辛うじて回避した隊員以外は全員正確に急所を撃ち抜かれ、殺された。

生き残った隊員は武器を構えたが其処に男の姿は無かった。

「何処に行った!?!」

「後ろだ」

隊員が気付いた時には男は後ろに居り、隊員の体を男が持っていた
フォース・バイクが貫いた。

「ガハツ……」

男は、隊員を貫抜いたフォース・バイクが引き抜くと隊員はそのまま倒れ、二度と起き上がる事は無かった。

「さて、これ位で良いだろう。王宮に戻るか……ああ、そうだ、それなりには楽しめたぞ？ではな……」

男はそう呟くとジェットパックで去って行った。

「奴は一体……生き残ったのは何人だ？」

「さっきいた数の半分以下です……」

「そうか……」

「うっ……」

ジャンニクが被害報告を受け落胆していると、近くから呻き声が聞こえた。

「タイフォか！？何処だ！」

「こっちです……」

「見つけたぞ！タイフォ、今助けてやるからな！」

ジャンク達はガレキに挟まって身動きが取れないタイフオを見つけた。

「タイフオ！怪我は・・・酷いなこりゃ」

「右目をやられました・・・多分もう治らないでしょう」

「そうか・・・取り敢えず傷の手当てをしよう。この有様では戦えない」

ジャンクは生き残った隊員に傷の手当てを指示し、部隊の再編に全力を尽くすのだった。

said out

side チルノ

チルノとアミダラ女王達はハンガーに到着し、攻撃を開始するのだった。

「一気に終わらせる！」

チルノはそう言つとドロイドの集団に突っ込み、次々破壊して行った。

「マスタートレバーに続け！」

チルノに続こうと王室警備隊も攻撃を仕掛ける。

「今の内にファイターに！」

アマダラ女王の指示にパイロット達がファイターに乗り込み、飛び出して行く。

「よし、これで最後！」

チルノが最後のドロイドを破壊した。

「これから何処に？」

「玉座の間に行き総督を捕らえます」

「よし、第一部隊付いて来い！」

ハンガーから出ようとすると、扉が開き其処には黒いローブをきた男が立って居た。

男はチルノの方を静かに睨んだ。

チルノとクワイ＝ガンは女王を庇う様に前に出た。

「陛下、ここは私とクワイ＝ガンに御任せ下さい」

「分かりました。回り道をします」

「マスタートレバー、御武運を！」

「ああ、分かった・・・死ぬなよ」

「大丈夫よ。負けないから」

チルノはジョクラドの言葉に満面の笑みを浮かべながら応えた。

「アミダラ女王達が別の道から行くのを見た後、チルノは男に視線を向けた。」

「さて、タトウインで会った以来かしら？襲撃者さん？」

「チルノ、知っているのか？」

「まあ、ちよつとね」

「・・・」

「あの時は決着を着けなかったけど、今回は本気で決着を着けるわ」
チルノはそう言うつと自分のライトセーバーを起動した。

「それがお前のライトセーバーか」

男・・・ダース・モールはチルノのライトセーバーを見てそう言った。

「ええそうよ。私のライトセーバーは少し特殊でね？普通のライトセーバーよりも出力が高くてね、加減が出来ないのよ」

「ライトセーバーの出力が高かろうと関係ない。お前達は此処で死ぬのだ」

ダース・モールはそう呟きながら黒いローブを投げ捨てた。

「やってみなさいな」

「私に勝てると思っているのか？」

「出来る、出来ないじゃ無い・・・やるのよ」

チルノはそう言いながら、ライトセーバーをダース・モールに向けた。

「抜かせ」

ダース・モールは自分のライトセーバー起動させる。

しかしその刃はタトウインの時とは違い、両刃であった。

「へえ・・・それが本当の姿？」

「そうだ・・・行くぞ」

「クワイ!!ガン、来るわよ。気を付けて」

「ああ、分かっている」

チルノとクワイ!!ガンが短い会話を交わすと、ダース・モールが切りかかって来た。

「はっ!」

「っ!」

チルノは即座に反応し、攻撃を受け止めた。

ライトセーバー同士がぶつかり合い、一瞬ダース・モールが硬直した。

「ふっ！」

チルノはその隙を見逃さずライトセーバーを弾き、ダース・モールにフォースを打ち込んだ。

「！」

ダース・モールは少し吹き飛ばされるが、直ぐに受身を取った。

「おおお！」

だが其処にはクワイガンがあり、ダース・モールに切りかかった。

「ふっ」

しかしダース・モールはクワイガンの攻撃を軽々と防いで行く。

「くっ、何という強さだ！」

「中々出来るが・・・そこまでだ」

「私を忘れないでくれない？」

「ふん・・・」

そう言いながらダース・モールに飛び掛る。

ダース・モールは飛びかかって来たチルノの攻撃を防ぎ、そのまま攻撃してきた。

「くう！」

「どうしたジエダイ、その程度か？」

「そんな訳無いでしょ！」

「あまり舐めないでもらおうか」

チルノとクワイガンは同時にダース・モールに攻撃したが、ダース・モールはその攻撃を防ぎこった。

「手加減は止めておけ」

「……どう言う意味かしら？」

「タトウイーンで見た力を使え。それとも、使えないのか？」

「！」

「その反応……凶星か。タトウイーンで言った言葉の通りなら周りに誰か居ると巻き込んでしまう、そうだな？」

「驚いたわね……そこまで分かるなんてね。でも、まだ一つ分かってないわね」

「何？」

「力を抑えれば能力は使えるのよ。こんな風に！」

チルノはそう言うと冷気をダース・モールに打ち込んだ。

「ちっ！」

ダース・モールは距離を取りライトセーバーを構え直した。

「能力は使いたくないんだけど・・・お望みなら使ってあげるわ」

そう言うとチルノの周りに冷気が集まり出した。

「気を付けなさい。こうなるとさっきの比じゃ無いわよ」

チルノは冷気を纏いながらそう言った。

ダース・モールとチルノは同時に攻撃しライトセーバー同士がぶつかった。

ライトセーバーがぶつかった瞬間辺りは凄まじい衝撃に包まれた。

s a i d o u t

s a i d ジョクラド

チルノと別れたアミダラ女王達は玉座の間に向かっていった

「玉座の間まで後どの位ですか？」

「この上の階です。それまでの護衛をお願いします」

「我等が付いておりますご安心を」

アマダラ女王達が少し先に進むと黒いローブを着てフルフェイスの仮面を被った男と同じくローブを着て、フードを被った男が二人待ち構えていた。

「陛下、先に行って下さい。これは我等の戦いです」

「分かりました。後を頼みます」

アマダラ女王達はジヨクラドとオビ＝ワンを置いて先に進んだ。

ジヨクラドとオビ＝ワンは直ぐ様アマダラ女王を庇うように前に出た。

「ジェダイの騎士だな？」

「そうだと云ったらどうする？」

ジヨクラドは敢えて男に聞いた。

「消えてもらおう」

そう言うと男達ははローブから刃の付いていない柄を取り出した。

「その柄……まさか!」

ジヨクラドが何かに気付いた様に声を上げた。

「ライトセーバーを使うのが、お前達ジエダイだけだと思っなよ」

男達が柄に付いたスイッチを押すと赤い光を放つ刃が現れた。

「ライトセーバー・・・やはりシスか！」

二人のシスはそれぞれライトセーバーの形が違った。

片方・・・ダース・マルガスは標準型ライトセイバーを一本持っており、もう片方・・・ダース・エイギスはダブルブレードライトセーバーを持っていた。

「何故シスが三人も居るんだ!？」

「愚かだなジエダイよ。それを話すと思うのか？」

マルガスはオビ＝ワンに手をかざすとオビ＝ワンは弾き飛ばされた。

「グッ！」

オビ＝ワンは受身を取るが、接近してきたマルガスがオビ＝ワンにライトセーバーを振り下ろした。

「オビ＝ワン！」

ジヨクラドはオビ＝ワンライトセーバーを投げ、マルガスが振り下ろしたライトセーバーを弾いた。

ライトセーバーを弾かれたマルガスは硬直し、その内にオビ＝ワンが距離を取りライトセーバーで戦い始めた。

「オビ＝ワン、今援護に……」

「お前の相手はこっちだ」

ジヨクラドがオビ＝ワンの援護に向かおうとするが、ダブルブレードライトセーバーを構えたエイギスに防がれた。

「邪魔をするな」

ジヨクラドは片手に持ったライトセーバーで切り付けた。

「ふっ……」

しかしエイギスはライトセーバーの攻撃を自分のライトセーバーで受け止めた。

「やるな……流石シス……と言った所か？」

「我々はジェダイを殺す為に様々な訓練を受けている。只のジェダイでは勝てる筈が無い」

「我々を殺す訓練か……厄介な」

「お喋りはここまでだ。戦いの続きをしようではないか」

そう言いながらエイギスはライトセーバーを回転させた。

「良いだろう、・・・来い」

ジヨクラドライトセーバーを構えながらそう言った。

「はっ！」

「ふん！」

ジヨクラドとエイギスが攻撃したのは同時だった。

ライトセーバー同士がぶつかり合う。エイギスが空いていた片手でフォースを使い、ジヨクラドの体制を崩した。

エイギスはその隙を見逃さずライトセーバーで突いた。

エイギスは体を滑り込ませ回避し、エイギスにフォースを打ち込み弾き飛ばした。

不意を突かれたエイギスは遠くに弾き飛ばされた。

オビィワンも、隙を突いて距離を取りジヨクラドの居る場所に戻って来た。

「マスターダンヴァ、御無事ですか？」

「ああ、大丈夫だ。（だが、このまま時間を書けるわけにはいかな・・・）」

「マスターどうしますか？」

オビィワンがそう言うとジヨクラドは手を肩に置きこつ言った。

「オビィワン、お前は女王を追いかけるのだ」

「何故です！？二人で戦えば必ず勝てます！」

「確かに二人で戦えば勝てるだろう。だが、もし女王が我々と同じ相手と戦っていたらどうする？我々の任務は女王の身を守ることだ。わかるな？」

「・・・はい、マスター」

「頼むぞ、女王をお守りしてくれ」

「マスター！！」

そう言うとジヨクラドは二人のシスに向かって走り、飛んだ。

空中で回転しながら腰に付けていたダブルブレードライトセーバーを起動し、二刀流でシスと戦い始めた。

二人のシスはジヨクラドを前後から挟み攻撃してきた。

ジヨクラドはその攻撃を防ぎ、的確に反撃する。

シスが二体同時に攻撃し、その攻撃をライトセーバーで受け止める。

二人のシスが攻撃出来ない状態になるとジヨクラドが叫んだ。

「オビ＝ワン、行くのだ！後を頼むぞ！！」

ジヨクラドがそう言うとおビ＝ワンは駆け抜けていった。

二人のシスは距離を取った。

「貴様・・・最初からそのつもりで」

「さあ、どうだろうな」

「貴様を殺し、直ぐに後を追えば良いだけだ」

マルガスはそう言うとおビ＝ワンはジヨクラドを攻撃した。

「私が居る限り、させんよ」

ジヨクラドはマルガスの攻撃を防ぎながら言った。

「二対一で勝てると思つのか？」

エイギスが後ろから電撃を放つ。

ジヨクラドはライトセーバーを交差させ電撃を防ぎ、防いだ電撃を放出し、自分の傍に居たマルガスを感じ電させる。

「ゲッ・・・」

電撃を浴び怯んだマルガスが怯んだ隙に、ジヨクラドは電撃を放つ隙が出来たエイギスの頭にライトセーバーを叩き込んだ。

「グウ!？」

エイギスは顔の仮面が吹き飛び、顔はライトセーバーで傷付いた。

「又アア!！」

エイギスは怒り狂いながらライトセーバーを振り回し、マルガスもエイギスの援護に回る。

「むん!！」

「ちい!！」

ジヨクラドはエイギスとマルガスの激しい攻撃を防いでいく。

「はっ!！」

ジヨクラドは床にフォースを打ち込み衝撃波を発生させ、挟み込んで攻撃しようとしたエイギスとマルガスを弾き飛ばした。

「ぬう!？」

ジヨクラドは弾き飛ばしたエイギス向かって走り、エイギスに切り掛る。

「ふん!！」

「おのれえ!！」

エイギスはライトセーバーを回転させ連続で攻撃を叩き込む。

ジヨクラドはエイギスの攻撃を回転しながら受け流し、ダブルブレードライトセーバーでエイギスの体を貫いた。

「ば、馬鹿な・・・!?!」

「終わりだ」

ジヨクラドはそう言いながらライトセーバーを引き抜いた。

ライトセーバーを引き抜かれたエイギスは崩れ落ちた。

「これで1体1だ」

ジヨクラドはそう言いながらライトセーバーを構えた。

「ふん・・・」

マルガスは倒れてまだ息が有るエイギスのライトセーバーをフォース奪い取り、起動したライトセーバーを自分の目の前で交差させながら言った。

「これで問題は有るまい？」

「来い」

「言われずとも行つてやる」

ジヨクラドとマルガスは短いやりとり終えると、同時に攻撃を仕掛

けた。

「はぁ！」

「ぐっ！？（急に動きが良くなったただと！？）」

「どうしたジエダイ！動きが鈍いぞ！」

「くっ、防ぎきれん！！！」

ジヨクラドは急激に動きの良くなったマルガスの攻撃を防ぎ続けるが、あまりの攻撃にライトセーバーが弾き飛ばされ防御が崩れた。

「しまった！？」

「でやぁ！！！」

「ぐう！？」

マルガスは体勢が崩れたジヨクラドをライトセーバーで切り裂いた。しかしジヨクラドはギリギリで避けライトセーバーは掠っただけで済んだ。

「くっ……」

ジヨクラドは傷の痛みからつずくまり動けなくなった。

「この程度か？ならば死ね」

マルガスはそう言いながらライトセーバーを振り上げる。

「油断は死を招くぞ！お前の死をな！！」

ジヨクラドはそう言いなが渾身のフォースを打ち込んだ。

「！？」

完全に不意を突かれたマルガスはフォースに吹き飛ばされ、窓を割り外に落ちていった。

「油断、慢心、それが死を招く・・・それがどんなに強い戦士でもな」

ジヨクラドは聞こえる筈がないマルガスにそう言うと、自分のライトセーバーを回収しアミダラ女王達を
追いかけた。

ジヨクラドが去った直後マルガスが戻ってきた。

マルガスはフォースで吹き飛ばされた時、咄嗟に窓の縁を掴み生き延びたのだった。

マルガスは傷口を押さえながらうずくまるエイギスの下に向かいこ
う言った。

「奴等は去りました、貴方は失敗したのです。マスター」

「違うぞマルガス・・・これは単なる始まりに過ぎん」

「ええ・・・数百年の時を経て我等シスが再び表舞台に・・・」

マルガスはそう言うとライトセーバーを起動し、エイギスを切り殺した。

「さようなら」

マルガスは息絶えたかつてのマスターにそう言うと、フードを被り直し去っていった。

s a i d o u t

s a i d アミダラ女王

アミダラ女王達は謎の敵をジョクラドとオビワンに任せ玉座の間に向かっていた。

「もう少しで玉座の間です！」

「おかしいですね・・・ドロイドが全く居ないなんて」

「恐らく、グンガンの陽動が上手くいっているのでしょう」

「そうだと良いのですが・・・!?!?」

アミダラ女王が違和感を感じながら進んでいると、突如黒い装甲服を着た男が現れアミダラ女王の頭にブラスターを突き付けた。

「動くな」

「何時の間に！」

パナ力達が武器を構えるが・・・

「周りをよく見るのだな」

男の言葉を聞き周りを見るとドロイドが周りを囲んでいた。

「なっ!?!」

「お前たちは嵌められたと言う事だ」

「貴様、何者だ!?!」

「見て分からんのか？マンダロリアンだ。名は・・・そうだな、ネイグスとでも名乗ろうか。知った所で意味は無いがな・・・大佐、武装を解除させ玉座の間に連れて行け」

「了解しました」

ネイグスと名乗ったマンダロリアンはドロイドの指揮官に指示すると去っていった。

アミダラ女王達武装を解除させられ、玉座の間に連行された。

玉座の間には通商連合提督のルーン・ハーコしかおらず、総督のヌート・ガンレイの姿は無かった。

「陛下、お待ちしておりました」

「総督の姿が見えませんが・・・何処に居るのですか？」

「私なら此処におりますぞ、陛下」

アミダラ女王が声のした方を見ると玉座の間入口にガンレイが立っていた。

「反乱ごっこは楽しゅうございましたかな？陛下。ですが、そろそろ反乱ごっこも終わりに致しましょう」

「反乱ごっこは・・・随分無礼な言葉ですね、総督」

「本来なら陛下の戯れ言にも喜んで御付き合いますのですが、今回はあまり時間が無いのです。ですから

一刻も早く同意書にサインをしてもらい、元老院の論争も仕舞いにしましょう」

ガンレイがアミダラ女王に同意書にサインする事を迫っているとオビィワンが現れた。

「御仕舞いなのはお前だ総督！」

オビィワンはそう言うとドロイドに切りか掛かった。

「パナカ！」

アミダラ女王はオビィワンに注意が行っている事を確認すると玉座

に隠してある小型ブラスターをパナカに投げ渡すとドロイドを撃ち抜いていった。

ドロイドはあっという間に全滅し、形勢は逆転した。

「さあ、交渉の続きと参りましょうか」

アマダラ女王はガンレイとの交渉を続けるのだった。

s a i d o u t

s a i d ブラボー中隊

ナブー軌道上のドロイド司令船の破壊に向かったブラボー中隊は、敵艦隊の激しい攻撃を受けていた。

「くそお、なんて攻撃だ！ドロイド司令船に近寄れないぞ！」

「ナブーに降下した時は護衛艦なんて居なかったのに！」

「一体どうなって・・・うあああ！..！」

「畜生！援護はまだかよ！？」

「それが、どうやら足止めされている様で・・・」

「足止めだと！？」

「敵は艦隊の殆どをあっちにぶつけているらしい..！」

「くそっ！」

「こちらブラボー13！敵が後ろに・・・ぐあああ！」

「通信が錯綜しているぞ！誰が誰に言っているんだ！？」

「お前が誰に言っただけ・・・」

「くっ！取り敢えず援護が始まるまで持ち堪えるしかない！」

「何時始まるか分からない物を待って言うのか！」

「俺達のファイターじゃ、シールドを破れないだろう！？援護が始まるまで持ち堪えるしかない！」

「頼む、速く来てくれ・・・俺達を全滅させないでくれ！」

予想よりも遥かに多い防衛部隊の攻撃を受け、次々友軍が撃墜されていきながらも、

ギャヴィン・サイキスはブラボー中隊と共に援護射撃が始まるのを信じて戦い続けるのだった

s a i d o u t

s a i d チャンバリン

ブラボー中隊が激しい攻撃を受けている時、ファントマは封鎖艦隊の本隊と激戦を繰り広げていた。

大型戦艦 ファントマ ブリッジ

「撃て！」

チャンバリンの指示で攻撃が放たれ、敵艦は爆発した。

「これで4隻目か・・・だが敵の攻撃は全く勢いが衰えないか。どれ程の艦隊が目の前に居るのだ？」

チャンバリンが呟いていると通信士のカーシュが報告してきた。

「中佐！敵艦攻撃、来ます！」

「シールドを展開して防げ！」

敵の攻撃はシールドに防がれた。

「このままでは埒があかないな・・・やるしか無いか。ダンレ！躲しながら敵艦隊を強行突破しろ！」

チャンバリンはダンレに無謀とも言える指示をした。

「無茶を言わないで下さい！」

「無茶でもやるしかない！此処で足止めを受けている内にも友軍が危険に陥っているんだぞ！」

チャンバリンの無茶な指示にダオレは反論するが、チャンバリンの言葉に何も言えなくなつた。

「攻撃を前方の敵艦に集中して攻撃しろ！何としても此処を突破して味方を援護するんだ！」

チャンバリンはかつてチルノがナプー封鎖艦隊と戦った時に使っていた作戦を使った。

チャンバリンは状況を打破する為に賭けに出るのだった。

s a i d o u t

s a i d エル・カスター

エル・カスターはファントマの前方に展開している艦隊の後ろで指揮を取っていた。

ルクレハルク級バトルシップ ヘヴンブリッジ

「10番艦 アインファウスト、13番艦 エンゲルス、15番艦 アヌビス、19番艦 ジャステイス 撃沈！」

「これで4隻か・・・やってくれる！」

オペレーターが有軍艦撃沈を報告し、報告を聞いたカスターは奥歯を噛む。

「良いか！何としても前方の大型戦艦を撃破しろ！此処を突破されたらドロイド司令船は、敵の攻撃の射程距離に入ってしまう！そうすればドロイド司令船は直ぐに撃沈されてしまうだろう！そうなれば我々は

確実に負ける！それだけは防がねばならん！此処で何としても止め

るのだ!!」

カスターは展開している艦隊に通信回線を開き、敵艦撃破を命令した。

それに呼応するように艦隊は展開し、ファントマに攻撃を開始した。

「これは!? 司令! 敵艦が此方に向かって来ます!!」

「馬鹿が! この艦隊を強行突破するつもりか! 一斉攻撃で鉄屑に変えてやれ!!」

カスターの指示で艦隊はファントマに一斉攻撃を開始するが、ファントマは攻撃をギリギリ回避しながら突っ込んでくる。

「敵艦、攻撃を回避ながら突っ込んで来ます!!」

「ええい! 回避予定ポイントを計算し、其処に向かって攻撃する様に通達しろ! そうすれば必ず当たる!!」

カスター指示した通りに攻撃すると、攻撃はファントマを捉えた。

「敵艦に攻撃が命中しました! 司令の予想した通りです!!」

「引き続き攻撃をするように通達しろ! 一気に・・・!? 全艦に通達! 緊急回避だ! 急げ!!」

「司令!? 一体どうしたんですか!?!」

「良いから早く回避するんだ！宇宙の塵になりたいのか！？」

「イ、イエツサー！」

カスターの剣幕に慌てて回避行動を行うが、ファントマの一斉攻撃が回避が間に合わなかった有軍艦数隻を一瞬で塵に変え、へヴンにも損傷を与えた。

「くそっ！被害状況は！？」

「コアシップは無事です！ですが、外周部の一部に損傷があります！」

「友軍艦の損害は！？」

「敵艦前方に展開していた、5番艦 イシュバラ、6番艦 ミロス、7番艦 ラプチャー、8番艦 レイヤード、9番艦 レビヤタンの反応がありません。恐らく撃沈したのだと思われます！」

「敵艦は！？」

「依然此方に向かって来ます！」

「オール・ウエボン・ザ・フリー全艦全兵装使用自由、何としても落とせ！！！」

カスターは目前に迫って来ているファントマに向かって攻撃を命じた。

ファントマは損傷を増やしながらも止まらず、依然進み続ける。

「駄目です！止められません！」

「馬鹿な・・・何故止まらない！奴等には恐れが無いのか!？」

「敵艦、撃つて来ます！」

「シールドを展開しろ！」

「駄目です！間に合いません！」

その声が聞こえると同時にヘヴンに凄まじい衝撃が走った。

カスター直ぐに被害を抑える為に指示をする。

「隔壁閉鎖！被害を抑えろ!!！」

「駄目です！被害が大き過ぎます！これ以上は持ちません!!！」

「馬鹿な!?!ヘヴンが落ちると言うのか!?!」

「司令！ご指示を!!！」

「直ちに総員退艦！脱出ポッドで各自脱出せよ!!！」

カスターは部下に退艦を指示した。

「この借りは必ず・・・必ず返すぞ!!！」

カスターは崩壊する乗艦のブリッジで去ってゆくファントマに向か

つて叫ぶと、脱出ポッドに向かって行った。

s a i d o u t

s a i d チャンバリン

チャンバリンはブリッジで、崩壊する敵旗艦ヘヴンの映像を見ていた。

大型戦艦 フアントマ ブリッジ

「敵艦撃沈しました！」

「これで最後だな！よし、このまま前進しブラボー中隊を援護する！急ぐぞ！」

カスターの艦隊を強行突破したチャンバリン達は友軍の下に急いでいた。

「速度が出ません！損傷を受け過ぎた様です！」

「くそっ！もう少しだ！もう少し持たせてくれ！」

「無茶言いやがる！あんたが無茶をさせたのが悪いんだろうが！」

ウエンディックがチャンバリンに文句を言う。

「これが終わったら修理しなきゃな・・・」

「修理してそんなに経ってねえのにまた修理かよ・・・中佐、ドク

ターに何て言うつもりだ？」

「分かってる！この戦いが終わったなら何でもやってやるさ！」

チャンバリンとウエンディックがそう言い合っているとカーシユが口を挟んだ。

「大尉、ドクターって誰ですか？」

「ああ？分かんねえのか？マスタートレバーの事に決まっているだろうが。あの人がどんな人かってのを少し調べたんだよ。そしたらあの人はジェダイの中じゃ相当有名な科学者だって言うじゃねえかだから

俺はあの人の事をドクターって呼んでんだよ」

「何処で調べたんですか？」

「コルサントで船を修理してる時に会ったジェダイが教えてくれたんだよ。名前はジャックって言ったな」

「そうなんですか・・・っと！どうやらお喋りは終わりの様です！中佐、目標ポイントに到着しました！」

カーシユの報告でブリッジに緊張が走る。

「よし、まだ味方は生きてるな？これより援護射撃を開始する！敵にレーザーの雨ををご馳走してやれ！！」

チャンバリンは目の前に居る敵艦に攻撃を指示し、攻撃を開始する。

ナブー軌道上での戦いは佳境を迎えるのだった。

s a i d o u t

s i d eブラボー中隊

フロントマからの援護射撃が始まると、ブラボー中隊は一気に攻勢に出た。

「ようやく来やがった！遅過ぎるぜ！」

「だがこれで反撃出来るぞ！」

「今までの借りを返してやる！」

ブラボー中隊各機はドロイド司令船に攻撃を開始する。

「ん？あれはシールド発生装置か・・・これを破壊すれば！」

ギャヴィン・サイキスの乗るファイターがシールドを破壊し、ドロイド司令船のシールドを消滅させた。

「良くやった！これで俺達の攻撃が通るぞ！」

「だが、攻撃が激しくて近寄れないぞ！」

「諦めるな！なんとしてもコイツを破壊するんだ！」

ブラボー中隊各機が、激しい戦闘を繰り広げているとドロイド司令船が爆発し始めた。

「どうしたの？船が爆発し始めたわ」

「俺達じゃねえぞ！一体誰が・・・」

「おい、見てみるよ！友軍機が出てくるぞ！」

爆発するドロイド司令船から一騎の戦闘機が出てきた。

「フオオオ！」

「いよつしゃああ！！」

「やりやがった！まさか内部からぶっ壊すとはな！」

「やった！ナブーは勝ったんだ！」

ドロイド司令船を護衛していた艦隊もフロントマにより破壊され、
一同は喜びに酔いながら補給の為にフロントマに戻るのだった。

s a i d o u t

s i d e チルノ

チルノとクワイ＝ガンはシスの暗黒卿ダース・モールと戦いも佳境
に入っていた。

王宮の奥深くで戦うチルノとクワイ＝ガンはダース・モール相手に
激しい戦いを繰り広げていた。

「はあ！」

「ぐう！」

チルノとダース・モールはお互いに攻撃し、それを防ぎ合っていた。

「やっぱり強いわね！」

「貴様は危険だ・・・我が主の為に此処で死ね！！！」

「お断り！」

チルノはそう言うつと一瞬の内に氷のナイフを数本作り出し、ダース・モールに投合した。

ダース・モールがそれを躲し隙が出来た所をクワイ「ガンが切り掛る。

「はっ！」

「ちい！邪魔だ！」

「ガツ！？」

ダース・モールはクワイ「ガンの攻撃を回避し、クワイ「ガンに隙が出来た所を蹴り上げた。

蹴り上げられたクワイ「ガンは、壁にぶつかり気絶した。

「クワイ「ガン！」

「これでようやくお前に集中出来る」

ダース・モールはそう言いながらライトセーバーを構える。

「……ええそうね」

「何？」

「これで少しだけ本気を出せるわ」

チルノはそう言うとコートの中に隠していたもう一本のライトセーバーを取り出した。

「もう一本だと？」

「そう、普段は使わないけど私はライトセーバーを二本持っているのよ。驚いた？」

「……」

「私がライトセーバーを二本使わないのは理由が有ってね？それは・
・」

チルノはそこまで言うと言姿を消した。

「!？」

「強過ぎて加減が出来ないからよ」

チルノが言い終わるとダース・モールは後ろに現れたチルノにライ

トセイバーで切り裂かれていた。

「馬鹿・・・な」

「それと、このライトセイバーはちょっとした特殊機能が有ってね？このダブルブレードライトセイバー

で切られた相手は永久に溶ける事のない氷に包まれるのよ」

チルノがそう言い終わるとダース・モールは氷に包まれた。

チルノは氷に包まれたダース・モールに触れながら呟いた。

「この永遠に溶けぬ氷の棺で、永遠に眠りなさい」

チルノはそう言いながら指を鳴らすとダース・モールは氷の粒になつて消えていった。

「おやすみなさい」

チルノはもう存在しないダース・モールにそう言つと気絶しているクワイガンを担いでその場を去つた。

???

ナブーでは盛大なパレードが開催されグンガンとの友好が築かれた時、とある場所では数人の男達が話していた。

「ナブー占領は失敗したか・・・」

「今回の件の損害は馬鹿にならんぞ？」

「ならば、一時的に計画を凍結すべきでは？」

「いや、計画を凍結する事を総督は許さないでしょう」

「ならどうする？戦力が揃っていないこの状況で共和国に気付かれ
たら我等は終わりだぞ？」

「それは問題無い」

「おお・・・何時お着きに？」

「今着いたばかりだ。計画の凍結はしない。このまま計画を続行す
る」

「ですが・・・」

「儂に考えが有る。問題は無い」

「おお・・・流石ですな」

「儂に任せてお前達は手筈通り事を運べ。良いな？」

「はい、御任せ下さい・・・総督」

黒幕達は計画の為に行動を始めるのだった。

見えざる脅威 6 (後書き)

どうでしたか？ ジョクラドが戦っていたシーンは STAR WAR
S: THE OLD REPUBLIC とある ジェダイマスター
の動きを元にしています。

分かった人はすごいです。

次はキャラ説明2です。更新をお待ちください。
それでは。

キャラ紹介2（前書き）

キャラ紹介2です。今回はあまり面白く無いかもしれません。ご注意下さい。

それではどうぞ。

キャラ紹介2

<キャラ紹介2>

アリア・トレバー（幼年期）

チルノ・トレバーとジヨクラド・ダンヴァの娘で、ジエダイ訓練生。

5歳。

種族 フェアリーハーフ

所在地

特務研究開発局に住んでいる。

容姿

身長は普通の5歳児と同じ位で、髪はチルノと同じ水色の髪をポニテールにしている。

青色のリボンをポニテールを縛るために使っている。

顔は幼少時代のチルノに似ている。

服装は灰色のジエダイローブを着ている。

性格

明るく、好奇心旺盛。

武器

ジェダイ訓練生なので持っていない。

戦闘方法

無し。

備考

ナブーの戦いの五年後に生まれた。

よく同じ訓練生のゼット・ジュカッサと一緒に遊んでいる。

祖父のコールマン・トレバーに懐いており、よく遊んで貰っている。

又、チルノの血が濃く流れており5歳で自分で小型ドロイドを作ったりしている。

ミナ・トレバー（幼年期）

チルノの娘で、ジェダイ訓練生。

アリアの妹。

4歳。

種族 フェアリーハーフ

所在地

特務研究開発局に住んでいる。

容姿

身長は普通の4歳児と同じ位で、髪は姉とは違い黒色の髪を腰まで伸ばしている。

服装は純白のジエダイローブを着ている。

性格

気弱で、大人しい。

武器

ジエダイ訓練生なので持っていない。

戦闘方法

無し。

備考

ナブーの戦いの6年後に生まれた。

本人は気付いていないが桁違いのフォースを持っている。

祖父のコールマン・トレバーにとても懐いており、よく一緒に居る。

他にはジェダイ評議員のキ・アディ・ムンディヤ、ミクリットともよく一緒に居る。

又、歌が好きでよく歌っている。

ミクリット

ミナの友達。

種族 クシバン

所在地

特務研究開発局内のミナの部屋に居る。

容姿

小柄な4足動物の風貌で体長は1m程、全身を乳白色の体毛に覆われており、大きな目と平らな耳を持っており、その瞳は茶色、緑色、青色からなる渦巻き模様を呈している。

性格

小さい体に似合わず気が強く、はっきりと物を言う。

武器

無し。

戦闘方法

無し。

備考

怪我をしている所を、ミナに助けられる。

その後、ミナの部屋で暮らす事になる。

大体ミナと一緒に居る。

又、知能が高く言葉も話せる。

ゼット・ジュカッサ（幼年期）

ジエダイ訓練生。

アリア・トレバーとは幼馴染。

5歳。

種族人間

所在地

特務研究開発局に住んでいる。

容姿

身長はアリアよりも高く、茶色の髪を根元で縛り一つにして背中まで伸ばしている。

服装は灰色のジェダイローブを着ている。

性格

冷静で穏やかだが、アリアの事になると冷静さを失う。

武器

ジェダイ訓練生なので持っていない。

戦闘方法

無し。

備考

5歳でありながら素晴らしいライトセーバーテクニックを持つ。

アリアとは大体いつも一緒にいる。

アリアとはお互いに好き合っている。

クレル

ジエダイマスター。

チルノの教え子。

ルーマス・エティマとは親友である。

種族 ベサリスク

所在地

ジエダイ聖堂在住。

容姿

4本の腕と黄褐色の皮膚を持っている。

服装は茶色のジエダイローブを着ている。

性格

豪快な性格である。

武器

ダブルブレードライトセーバーを二本の所持している。

ライトセーバークリスタルの色は青色と、緑色。

戦闘方法

二本のダブルブレードライトセーバーを使って戦う。

備考

パダワンになる前にジェダイ訓練生養成施設でチルノにダブルブレードライトセーバーの訓練を受ける。

又、チルノと同じくジェダイの伝統に従わない。

ルーマス・エティマ

ジェダイマスター。

チルノの教え子。

クレルとは親友である。

種族 人間

所在地

ジェダイ聖堂在住。

容姿

金色の髪を纏め、タバコを加えている。

服装は上半身は黒色のジャケットのみを着ており、ジャケットのフアスナーは開いたままになっている。

手には黒色の指無しグローブを付けている。下半身は青色のジーンズを穿いている。

性格

大胆不敵で、好んで危険な任務を選ぶ。

又、口は悪いが面倒見が良い。

武器

ライトセーバーを1本所持している。

ライトセーバークリスタルの色は青色。

戦闘方法

ベネクトと言うフォームを使い戦う。

ベネクトはソレスとアタルを組み合わせたフォームで、攻撃を防ぎながら超高速で接近し、敵を葬ると言うフォームである。

備考

若いながらジエダイ評議員達にも匹敵する腕前で、成功率が非常に低い任務を好んで受けており、どのような状況でも必ず任務を成功

させ生還する事から評議会の信任が非常に厚い。

又、チルノの教えを遵守しており、あまりジェダイの掟に縛られない。

タバコが好きで、よく吸いながら任務をこなしたりしている。

服装や、タバコに関しては、ルーマス本人の功績が素晴らしいので評議会は口を出せないでいる。

ジャック・エルダー

ジェダイナイト。

チルノの部下。

種族 人間

所在地

特務研究開発局に住んでいる。

容姿

黒色の髪を背中まで伸ばしている。

服装は茶色のジェダイローブを着ている。

性格

お人好しで、頼まれると嫌と言えない。

武器

ライトセーバーを1本所持している。

ライトセーバークリスタルは緑色。

戦闘方法

ソレスを使って戦う。

備考

特務研究開発局の職員で、此处で研究開発を行なっているので任務に出ることは無い。

しかし、ジャック本人は高いライトセーバーテクニックを持っている。

チルノの無茶振りに、毎日胃を痛めている。

ジャン・チャンバリン

チルノ直属の特殊部隊<アイスフィスト>の隊長。

階級は大佐。

種族 人間

所在地

特務研究開発局内に有るアイスフィスト専用の区画に住んでいる。

容姿

茶色の髪を短く切っている。

服装はアイスフィスト専用の青い軍服を着ており、背中にはチルノを元にした女性の横顔が描かれている。

又、チャンバリンは隊長なので胸には勲章が付いている。

性格

真面目で、冷静に状況を把握出来る。

武器

デュアルトリガー・ブラスター・ピストルを2丁所持している。

戦闘方法

2丁のデュアルトリガー・ブラスター・ピストルを使って戦う。

備考

ナブーが通商連合に占領され、チャンバリンも捕虜として連行され

ている時チルノに助けられる。

その後チャンバリンはチルノと行動を共にし、隠されていた大型戦艦フアントマを使いナブーを脱出する。

その後、ナブー奪還作戦が開始されるとチャンバリンはナブー軌道上で通商連合の司令官エル・カスターと激戦を繰り広げ、エル・カスターの乗る旗艦ヘヴンを撃破し戦いを勝利に導いた。

ナブーの戦いの後チャンバリンは王室警備隊を辞職しチルノに自分を部下にしてくれと頼む。

チルノは快諾し、評議会に部隊を作る許可を貰い特殊部隊アイスフイストを結成する。

普段チャンバリンはフアントマのブリッジで指揮を執っているが、緊急の場合は自分もデュアルトリガー・ブラスター・ピストルを使い戦う。

ジエラス・ジャニック

チルノ直属の特殊部隊<アイスフイスト>の副隊長。

階級は中佐。

種族 人間

所在地

特務研究開発局内に有るアイスフィスト専用の区画に住んでいる。

容姿

アイスフィスト専用の青い軍服を着ている。

性格

責任感が強く、部下の事を最優先に考える。

武器

DCI-15Sブラスター・アイスフィストモデルと強化型加速荷電粒子アレイ・ガンを各2丁ずつ所持している。

戦闘方法

DCI-15Sブラスター・アイスフィストモデルと強化型加速荷電粒子アレイ・ガンを状況に応じて使い分けて戦う。

備考

ナブーが占領された時チルノに救われる。

ナブー奪還作戦の時は地上で部隊を率いてドロイド軍団と戦った。

チャンバリン等と共に王室警備隊を辞め、アイスフィストに入隊した。

セオメット・ダンレ

チルノ直属の特殊部隊<アイスフィスト>の隊員。

階級は少佐。

種族 人間

所在地

特務研究開発局内に有るアイスフィスト専用の区画に住んでいる。

容姿

アイスフィスト専用の青い軍服を着ている。

性格

冷静沈着で、どのような状況でも慌てずに行動できる。

武器

アイスフィスト・ブラスターを1丁所持している。

戦闘方法

アイスフィスト・ブラスターを使って戦う。

備考

ナブーが占領された時チルノに救われる。

ナブーを脱出する時にファントマの操縦士を担当し、ナブー脱出を支えた。

ナブー奪還作戦の時はナブー軌道上で神業的な操縦センスで敵の攻撃を回避していった。

チャンバリン等が警備隊を止めるとダンレも続き、警備隊を止め、アイスフィストに入隊した。

アーヴン・ウエンディック

チルノ直属の特殊部隊<アイスフィスト>の隊員。

階級は少佐。

チルノをドクターと呼ぶ。

種族 人間

所在地

特務研究開発局内に有るアイスフィスト専用の区画に住んでいる。

容姿

黒色の髪をオールバックにしてサングラスを掛けており、服装はアイスフィスト専用の青い軍服を着崩し、軍服の袖をまくっている。

性格

口調は荒いが、陽気で、ムードメーカー的な存在である。

武器

ネペンデスG H Xミサイル・ランチャー1丁、Zー6アーカード・ロータリー・ブラスター・キャノン2丁、E Eー3カービン・ライフル2丁、ナイトシスター・ダガー2本、トイダリアン・セレモニアル・ソード2本所持している。

これ程装備が充実しているのはアイスフィスト内で彼だけである。

戦闘方法

様々な装備を使い分け戦うが、近接武器を使って戦う事が多い。

備考

ナブーが占領された時チルノに救われる。

フロントマ搭乗時にはシールドの管理及び、ジェネレーターの管理を担当していた。

チャンバリン等と共に王室警備隊を辞め、アイスフィストに入隊した。

現在はコルサントの特務研究開発局内で武装開発に携わっている。

アイスファーストの装備はウエンディックだけでなくチルノや他の職員が開発している。

その為、ジャックや他の職員とは知り合いでよく呑んでいる。

又、ウエンディックはジャックと仲が良く、よくジャックの愚痴を聞いている。

ウエンディックは武器の改造が趣味で、特にお気に入りのナイトシスター・ダガーとトイダリアン・セラモニアル・ソードをライトセーバーで攻撃されても問題無いレベルまで強化している。

ウエンディックは他の隊員達を遥かに超える身体能力を持っており、通常ならば殆ど動けない程の重量である重装備を軽々を装備し素早く行動できる。

ウエンディックは高い格闘センスと剣術センスを持っている。

ウエンディックは自分の剣に誇りを持っており、近接武器だけで任務に赴く事も少なくない。

リア・カーシュ

チルノ直属の特殊部隊<アイスファースト>の隊員。

階級は中尉

種族 人間

所在地

特務研究開発局内に有るアイスフィスト専用の区画に住んでいる。
アイスフィスト専用の青い軍服を着ている。

性格

真面目で、任務に忠実である。

武器

ブラスターを1丁所持している。

戦闘方法

ブラスターを使って戦う。

備考

ナブーが占領された時チルノに救われる。

フロントマ搭乗時は通信士をしていた。

チャンバリン等と共に王室警備隊を辞め、アイスフィストに入隊した。

エドワード・ラッシング

チルノ直属の特殊部隊<アイスフィスト>の隊員。

階級は中尉。

種族 人間

所在地

特務研究開発局内に有るアイスフィスト専用の区画に家族と共に住んでいる。

アイスフィスト専用の青い軍服を改造して着ている。

性格

温和で仲間を大切に思っている。

武器

アイスフィスト・スナイパー・ライフルカスタム2丁、フォース・パイクー1本所持している。

戦闘方法

アイスフィスト・スナイパー・ライフルカスタム使用し戦うが、敵が接近してくるとフォース・パイクーを使い戦う。

備考

ナブーが占領された時、家族共々チルノに救われる。

ナブー奪還作戦の時は地上でドロイド軍団と戦った。

チャンバリン等と共に王室警備隊を辞め、アイスフィストに入隊した。

狙撃兵としての能力はアイスフィスト1で、ほぼ1撃で敵を仕留める事が出来る。

ウエンディックが開発したアイスフィスト・スナイパー・ライフルをカスタムした、アイスフィスト・スナイパー・ライフルカスタムを使用している。

又、任務に赴く時には必ず家族の写真が入ったペンダントを持っている。

アーサー・ピロセイ

チルノ直属の特殊部隊<アイスフィスト>の隊員。

階級は中尉。

種族 人間

所在地

特務研究開発局内に有るアイスフィスト専用の区画に住んでいる。

容姿

上半身は白色シャツにアイスフィストの軍服を羽織っている。下半身は黒色のズボンを穿いている。

性格

陽気でよくラッシングと話している。

武器

D L I 4 4 ヘヴィ・ブラスター・ピストル・アイスフィストモデル
カスタム2丁、アイスフィスト・エクストラ・ブラスター・ライフル1丁を所持している。

戦闘方法

距離によって使い分けて戦う。

備考

ナブーが占領された時チルノに救われる。

ナブー奪還作戦の時は地上でドロイド軍団と戦った。

チャンバリン等と共に王室警備隊を辞め、アイスフィストに入隊した。

兵士としては高いランクに入る。

キャラ紹介2（後書き）

どうでしたか？オリジナル武器に関しては、もう少ししてから書きます。

次は見えざる脅威で出てきた敵キャラの紹介です。更新をお待ちください。

それでは。

敵キャラ紹介1(前書き)

見えざる脅威までに出てきた1部の敵キャラの紹介です。

無茶な設定や誤字、脱字が有るかもしれませんが、御注意下さい。
それではどうぞ。

敵キャラ紹介1

< 敵キャラ紹介 >

ヌート・ガンレイ

通商連合の総督。

太古のマンダロリアンの王。

種族 ニモイディアン

所在地

現在はジオノーシスに滞在している。

容姿

身長は191cm有り、他のニモイディアンに比べて格段に体格が良く、体には無数の傷がある。

服装は通常は高価なローブに身を包んでおり、ローブの中には複数の武器を隠し持っている。

戦闘時は黒い装甲服を着ている。

本気で戦う時は全身を銀色の装甲服に身を包み、赤いマントで全身を隠している。

頭にはマンダロア・ジ・インドミタブルの被っていたヘルメットを被っている。

又、マントにはマンダロリアンのマークが入っている。

性格

常に冷静沈着で、意味の無い殺戮、弱い立場の者をいたぶる行為を酷く嫌う。

武器

通常時はLEE30ブラスター・ピストルカスタム2丁、投げナイフを20本所持している。

戦闘時はLEE30ブラスター・ピストルカスタム2丁、アドベンチャー・スラッグスローワー・ライフル1丁、フォース・パイク1本を所持している。

本気の際はカルマ・バスターソード1本、レンヴォルト・ブラスターライフル1丁を所持している。

戦闘方法

通常時に戦う事はほぼ無いが、戦う時は、LEE30ブラスター・ピストルカスタムと投げナイフを使って戦う。

戦闘時はブラスターを使い空中から攻撃し、相手に隙ができると接近しフォース・パイクで仕留める。

本気の際は遠距離ではレンヴォルト・ブラスタライフルを使い、接近戦ではカルマ・バスターソードを使い戦うが、カルマ・バスターソード以外にもレンヴォルト・ブラスタライフルで殴り付ける事もある。

又、強大なフォースを使い、敵を消滅させる技も存在する。

備考

ガンレイは非常に長い時を生きており、何故彼が長い時を生きているのか、何時生まれたかは不明だが、シス大戦の前には生まれていなかった様である。

太古の昔にはマンダロア・ジ・アルティメットと名乗り、マンダロリアン・ネオククルセイダースを率いて共和国に戦いを挑んだ。

マンダロア・ジ・アルティメットはマラコア？でジェダイナイトのレヴァンと戦いに敗れ、その肉体はレヴァンの目の前で消滅した。

しかしマンダロア・ジ・アルティメットはフォースと一体になり生き長らえており、肉体が再生するまでの永き間眠りに着いた。

永き眠りに着いている間にフォースを学び、死者を蘇らせる術を知る。

そして眠りから目を覚ますと其処はマラコア？ではなく月と言つ見知らぬ惑星であった。

彼の目の前では月の人間と地上の妖怪が戦っていた。

マンダロリアンの王は、自らに秘められたフォースを試してみたくなり目の前の軍勢に強大なフォースを放ち月側、妖怪側双方に甚大な被害を与えた。

大きな被害を受けた双方はマンダロリアンの王に攻撃をし始めたが、ガンレイは襲いかかる物全てを持っていく大剣で切り裂いた。

そうして一方的な戦いが続いていると、月と妖怪の指揮官が現れ、戦いを挑んできた。

マンダロリアンの王は3対1の状況をもともせず圧倒した。

先ず剣を持った者を一撃で叩き潰し、奇妙な技を使う者の心を読み「箱庭の世界を創り出し、其処で生き続ける事に何の意味が有る？」と罵り、敵が強い怒りから隙を作った所を切り捨てた。

最後の1人は襲い掛かるどころか、強さに魅せられたのか自分を弟子にしてくれと言ってきた。

マンダロリアンの王は彼女を弟子にし、惑星マンダロアに連れ帰り数百年間フォースと武術の修行を付けた。

数百年の修行を終えた弟子に修行を終えた証として、自らの付けているマントの色違いの銀色のマントを贈った。

弟子をフォースを使い、元居た惑星に戻すと名を隠し、真マンダロリアンに所属する。

そして真マンダロリアン時代には、仕事で多数のジェダイを殺した

事から ジェダイキラー と呼ばれていた。

マンダロリアンの王で有る彼は非常に高いカリスマ性を持っており、マンダロリアンのリーダーであるマンダロアにも推挙されるが本人は辞退した。

只でさえ異名で目立っているのに、これ以上目立つ事を彼避けたかった為である。

その後、ガリドランの戦いが発生すると黒い装甲服に身を包み、ジェダイの機動部隊に戦いを挑んだ。

この戦いでジェダイ側の3分の1がジェダイキラーによって殺され、指揮官のドゥークーも深手を負った。

この事からジェダイキラーは、ジェダイ公文書館のデータベースにも載っており、シスに並ぶ程の危険人物として現在もジェダイが追っている。

ガリドランの戦いの後、ジェダイキラーはヌート・ガンレイと名前を変え通商連合に所属する。

ガンレイは異例のスピードで出世を果たし、通商連合の総督まで上り詰める。

その能力の高さがダース・シディアスの目に止まり、自分の計画の為にガンレイを招き入れる。

しかしガンレイはこの老人に対して忠誠心などは持ち合わせておらず、逆に自分の計画の為に利用している。

尚、ガンレイは護衛にマンダロリアンを雇っている他、とある賞金稼ぎを傍に置いている。

ルーン・ハーコ

通商連合の提督。

ヌート・ガンレイの副官。

種族 ニモイディアン

所在地

ヌート・ガンレイと共にジオノーシスに滞在している。

容姿

黒いローブを着て、頭飾りを付けている。

性格

無慈悲かつ狡猾そして厳格だが、自分の決定が自らの生死に関わる状況になると、本来の臆病な性格が露呈する。

武器

戦闘をしないので持っていない。

戦闘方法

無し。

備考

ハーコはシス卿との恐ろしい同盟関係を締結したガンレイの判断に公然と疑問を呈していた。

彼は心配性の悲観論者であり、この占領のあらゆる局面で禍を予測していたのである。

そして、彼の予測は現実となり、アミダラ女王が包囲された首都シードを奪回したとき、ハーコとガンレイは逮捕され、裁判および処罰のため、コルサントへと送られたのだった。

しかし、通商連合内における影響力によって、ハーコはナブー事件による失脚から早期に復権を果たし、最悪の状況を免れた。

現在もハーコはガンレイの副官として行動している。

エル・カスター

通商連合の指揮官。

種族 ニモイディアン

所在地

ある女性を護衛しながらジオノーシスに向かっている。

容姿

他のニモイディアンのように貧弱な肉体では無く、ガツシリとした体型。

服装は特注製の茶色の軍服を着用し、頭には軍帽被り、黒色の手袋を付けている。

又、軍服の上に黒色のロングコートを羽織っている。

性格

冷静で、決断力や状況把握能力は非常に高い。

又、常に紳士的に対応する。

武器

ウエスター34・ブラスター・ピストルカスタム2丁、ライトセーバー1本を所持している。

ライトセーバークリスタルの色は濃い紫色。

戦闘方法

ウエスター34・ブラスター・ピストルカスタムと体術を使い戦うが、相手がライトセーバーを持っている場合はライトセーバーで戦う。

ライトセーバーで戦う時はペインズと言うフォームを使って戦う。ペインズはカスターが自分で編み出したフォームで我流ではあるがマカシ、ソレス、アタル、ジユヨーを組み合わせた物に近い攻撃的なフォームである。

備考

他のニモイディアンと同じ様な環境で育ったが、臆病な性質にはならなかった非常に稀な例である。

若くして通商連合に所属したカスターは次々功績を残し順調に昇進し、ナブー封鎖時には封鎖艦隊の司令官を任される程に昇進する。

ナブー奪還作戦の時はナブー軌道上でフロントマと交戦しこれを中破させるが、カスター本人が乗る旗艦ヘヴンは撃破され、カスター旗下の封鎖艦隊も壊滅した。

カスターは辛うじて脱出し、生き残っていた友軍艦 ナイトハルトに収容されナブーから撤退した。

その後カスターはコルサントの最高裁判所で裁判を受けるが、ヌー・ト・ガンレイ総督の力により無罪となった。

現在はネクサス級ヘヴィ・クルーザー エンド・オブ・ヘヴンに搭乗し、とある女性を送り届けている途中である。

尚、カスターはジェダイではないがフォースを使え、ライトセーバーを使いこなす事が出来る。

敵キャラ紹介1（後書き）

どうでしたか？ガンレイ総督の話は、設定集を投稿したら書くこと
と思います。

次は設定集です。更新をお待ちください。
それでは。

設定集1（前書き）

今回は設定集です。

一部設定がえらい事になってます。

誤字、脱字が有るかもしれません。御注意下さい。
それではどうぞ。

設定集1

<設定集>

特務研究開発局

コルサントのジエダイ聖堂の隣に有る。

チルノが「技術の研究、開発を専門的に行える施設が欲しい」と評議会に許可を貰い、建設した。

ジエダイの使う装備は殆ど此処で造られている他、重要な施設であるため、緊急時に備えて防衛システムや施設を管理しているジエダイマスターのチルノ・トレバー直属の特殊部隊が警備に当たっている為、外敵からの攻撃に非常に強い。

この施設は幾つかの区画に分かれており、ショップや食堂等の施設が有る第1区画、ジエダイ訓練生達が訓練をする為の部屋や、ジエダイとしての知識を学ぶ講義室等有る第2区画、警備部隊であるアイスフィストが待機している第3区画、戦闘機やアイスフィストの旗艦であるフロントマが停泊している第4区画、技術の研究、開発を行う第5区画、チルノのみが入れ、遺伝子研究やチルノのみで行なっている極秘研究をする為の極秘研究施設が有る第6区画に別れている。

尚、チルノは普段は第2区画か第5区画にいますが、第6区画で研究をしている事もあり、チルノが第6区画に入ってしまうと誰もチルノに会えなくなる。

チルノに会えなくなる理由は、第6区画は特務研究開発局内の区画の中で最も広く、最も危険である為である。

第6区画に入るゲートにはチルノが開発したガーディアン・ドロイドがゲートを警備しており、ゲートにはIDカード認証装置、指紋認証装置、網膜認証装置、パスワード入力装置等のチルノにしか解除する事が出来ない警備装置が有る。

尚、厳重な警備が敷かれている第6区画内にはウイルス研究や実験を行うウイルス実験室、遺伝子研究を行う遺伝子研究室、特殊な装備や戦闘機等を造る開発室、チルノがあらゆる惑星から集めた資料が有る資料室などが有る。

アイスフィスト

チルノ直属の特殊部隊。

元々はナブー王室警備隊の隊員達だったが、ナブー占領時にチルノに救われ、共にナブーを脱出、ナブー奪還作戦の際には地上でチルノを援護する部隊とナブー軌道上で敵艦隊と交戦する部隊の2つに分かれ、ナブー奪還作戦を戦い抜いた。

戦いの後、彼等は王室警備隊を辞め、チルノの部下になる。

その際に、結成したのがアイスフィストである。

アイスフィストの装備は全てオリジナルの物であり、チルノとウェンディックが主導で開発を行なっている。

アイスフィストは全員で7名しかいないが、全員が特化した能力があり、人数の少なさを補っている。

普段は、特務研究開発局内を見回ったり、局内に散らばって自由に行動しているが、任務になると全員が任務用の装備を装備し任務に向かう。(近接武器のみを装備して任務に向かう者もいる)

アイスフィストには厳しい規律は無く、犯罪行為以外は基本的に全て許されている。

又、アイスフィストは独自行動権限を持っており、評議会の命令を聞く必要が無い。

尚、アイスフィストにはエンブレムがあり、チルノをモチーフにした女性の横顔が描かれている。

アイスフィスト隊員の能力は以下の通り。

ジャン・チャンバリン 指揮能力に特化。

ジェラス・ジャニック 正面突破が得意。

セオメット・ダンレ ファントマの操艦を担当している。

アーヴン・ウエンディック 単独での拠点制圧や施設破壊が得意。

リア・カーシュ 通信士としての能力が高い。

エドワード・ラッシング 狙撃手としての能力が非常に高い。

アーサー・ピロセイ 兵士としての能力が高い。

<宇宙戦艦の紹介>

フロントマ

ナブー王室警備隊の上層部が極秘に開発した大型戦艦。

自衛の為に造られたとの事だが、自衛の為に造られた思えない程に強力な戦艦である。

スペックは、全長720m、全幅460m、全高200m、ハイパードライブ能率はクラス2、予備クラスは12、乗客定員は800人、武装はレーザー・キャノン・タレット50基、クワッド・レーザー・キャノン・タレット30基、アサルト・レーザー・キャノン60基、クワッド・ターボレーザー10基、プロトン魚雷発射管10門という明らかに火力が高過ぎである。

シールドも中途半端な攻撃では傷一つ与えられない程強力である。

チルノとチャンバリン達はこの船に乗りナブーを脱出し、ナブー奪還作戦の際には中破しながらも通商連合の大艦隊を撃破した。

戦いの後、チルノはフロントマをナブーに1度返したが、アミダラ女王がチルノにお礼という形にしてチルノにフロントマを贈呈した。

その後、アイスフィストが結成されると、フロントマはアイスフィストの旗艦となった。

ネクサス級ヘヴィ・クルーザー

通商連合がエル・カスターの為だけに建造した超大型戦艦。

姿はサブジュゲーター級ヘヴィ・クルーザーに似ているが、ネクサス級ヘヴィ・クルーザーはサブジュゲーター級ヘヴィ・クルーザーの大きさを遥かに上まっている。

その大きさにも関わらず、機動力は桁違いに高い。

この戦艦は単艦での惑星攻略、或いは破壊を前提に造られている為、堅牢な装甲を持つ戦艦でも一瞬で宇宙の塵となるだろう。

シールドの強度も桁違いに高く、このシールドを突破出来る様な火力を持つ戦艦は22 BBY時点では存在しない。

ネクサス級ヘヴィ・クルーザーには都市があり、乗員達は其処で暮らしている。

この都市は、エル・カスターの意向で設備が充実しており、シヨップの品揃えも豊富で大体の物は此処で揃うため、乗員は船を降りる事は稀である。

エル・カスターも自らの邸宅を都市内に構えており、其処暮らしているため船を降りる事は少ない。

尚、この船はサブジュゲーター級ヘヴィ・クルーザー2隻、ケイリス級デストロイヤー10隻の艦隊で行動しており、単艦で行動する事は非常に稀である。

ネクサス級ヘヴィ・クルーザーのスペックは、全長59800m以上、エンジン250基、ハイパードライブ能率有り、ハイパードラ

イブ有効距離、クラス1 予備：クラス7、ハイパードライブ
有り、パワー出力 4・08×3749 W 以上、動力機関
シーナー・フリート・システムズ社製SFSCR27200ハイ
パーマター・リアクターシールド あり、センサー センサー・ア
レイ、航法システム 有り、武装 スターデストロイド・キャノ
ン2基、イオン・パルス・キャノン3480基、ヘヴィ・ターボレ
ーザー砲塔2820基、ターボレーザー・キャノン1800基、デ
ュアル・レーザー・キャノン 1600基ミディアム・ターボレ
ザー砲塔1550基、重点防御ライト・レーザー・キャノン砲塔
1200基、トラクター・ビーム砲塔200基、プロトン魚雷発射
管700門、補助装備 ヴァルチャー級ドロイド・ファイター35
00機、ハイエナ級ボマー1800機、その他の支援船多数、操縦
要員 48、000名、乗客定員350、000名となっている。

ケイリス級デストロイヤー

ケイリス級デストロイヤーは、レキュザント級ライト・デストロイ
ヤーの弱点である装甲面を大幅に強化し、弱点を無くした船である。
装甲以外の改造面は無いが、汎用性は高くなっており、現在試験的
にエル・カスター旗下の艦隊に10隻配備されている。

< 装備の紹介 >

アイスフィスト・ブラスタ

アイスフィストの装備の一つ。

ブラスターの出力を上げ、連射力を上げた物である

使用者はセオメット・ダンレとリア・カーシユ。

DCI15Sブラスター・アイスフィストモデル

アイスフィストの装備の一つ。

DCI15Sブラスターの出力、連射性、弾数を強化した物である。

使用者はジェラス・ジャンニク。

強化型加速荷電粒子アレイ・ガン

アイスフィストの装備の一つ。

加速荷電粒子アレイ・ガンの弾数、集弾性を強化した物である。

使用者はジェラス・ジャンニク。

ネペンデスGHXミサイル・ランチャー

アイスフィストの装備の一つ。

火力、連射性、弾数等、非常に高い性能を誇るが非常に重く、ア
ヴン・ウェンディック専用の装備になっている。

使用者はアヴン・ウェンディックのみ。

Z-16アーカード・ロータリー・ブラスター・キャノン

アイスフィストの装備の一つ。

凄まじい火力を持つ兵器で、重装甲の車輛の装甲を紙の様に貫通させる事が可能である。

ブラスター・バレルが秒間300回転という超高速で回転し、無数の弾を発射する。

弾数も豊富で、10万発分は有るが撃つ時の衝撃が半端ではなく、重量も非常に重いので、この武器を作ったウエンディックにしか使いこなせない。

尚、ウエンディックはこの武器を両手に装備して使用している。

使用者はアーヴン・ウエンディックのみ。

アイスフィスト・スナイパー・ライフル

アイスフィストの装備の一つ。

驚異的な超長距離射撃が可能で、命中精度が落ちる事も無い。

又、火力や連射速度も高く、使いこなせば最高クラスの性能を誇る。

尚、ラッシングはこの武器をカスタムした物を2丁所持しており、装弾数と弾速を大幅に強化している。

使用者はエドワード・ラツシング。

D L I 4 4 ヘヴィ・ブラスター・ピストル・アイスフィストモデル
アイスフィストの装備の一つ。

火力を限界まで強化し、超高火力実現した物である。

反面、重量は軽く、使いやすくなっている。

ピロセイはこの銃をカスタムしたものを2丁持っている。

使用者はアーサー・ピロセイ。

アイスフィスト・エクストラ・ブラスター・ライフル

アイスフィストの装備の一つ。

汎用性を重視して作られる筈だったが、チルノが魔改造を行い、想定していた性能を遥かに超える性能を持った。

全てにおいて高い性能を誇るこの銃の最大の長所は、銃から放たれる銃弾の弾速である。

超高速で放たれるこの弾を避ける事は非常に難しいだろう。

使用者はアーサー・ピロセイ。

< マンダロア・ジ・アルティメットの装備 >

カルマ・バスターソード

マンドロア・ジ・アルティメットが自ら「創り出した」超兵器で、現在の技術ではチルノでも作る事は不可能である。

身の丈程もある大剣で普通ならば10人掛かりでも持ち上げる事が出来ない程に重いが、マンドロア・ジ・アルティメットは片手で剣を持ち、羽のように軽々と使いこなす。

この剣はライトセーバーと打ち合っても傷一つ付かない程に硬い超物質で出来ており、斬れ味はライトセーバーと同等である。

この兵器は別の次元にカルマ・バスターソードを置いており、本人の意思で出し入れ出来る様になっている。

マンドロア・ジ・アルティメットは、この剣を振るいレヴァンと戦ったが、敗れ、1度死ぬ事になる。

レンヴォルト・バスターライフル

カルマ・バスターソードと同じく、マンドロア・ジ・アルティメットが自ら「創り出した」超兵器である。

レンヴォルト・バスターライフルはカルマ・バスターソードよりも大きく、材質もカルマ・バスターソードと同じ超物質で出来ている。

カルマ・バスターソードよりも更に超重量だが、マンドロア・ジ・アルティメットはこの兵器を片手で持ち、片手で使用している。

この兵器にはチャージ機能が有り、フルチャージで発射すると都市

一つが消滅する程のエネルギー光弾を撃ち出す事が出来る。

又、チャージをしなくても非常に強力なエネルギー光弾を超高速で連射出来る他、超長距離への狙撃も可能である。

狙撃に関しては、レンヴォルト・ブラスターライフルには倍率スコープは付いておらず、マンダロア・ジ・アルティメットが視認で狙撃する。

マンダロア・ジ・アルティメットはレンヴォルト・ブラスターライフルを格闘武器としても使っており、超重量のレンヴォルト・ブラスターライフルを使い、相手を叩き潰す攻撃を繰り返す。

マンダロア・ジ・アルティメットはカルマ・バスターソードと同じくレンヴォルト・ブラスターライフルも別次元に置いており、必要に応じて取り出している。

戦闘時はカルマ・バスターソードとレンヴォルト・ブラスターライフルを別次元から取り出し、両手に持ち戦う事を好む。

マンダロア・ジ・アルティメットはレヴァンとの戦いの時、カルマ・バスターソードのみで戦っており、敗れたが、もし、レンヴォルト・ブラスターライフルも取り出して戦っていたら結果は違っていただろう。

設定集1 (後書き)

どうでしたか？次は番外編です。
更新をお待ちください。
それでは。

マンダロリアンの王（前書き）

今回は番外編です。東方キャラの負傷シーンがあります。

変な所や、誤字、脱字が有るかもしれません。御注意下さい。

それではどうぞ。

マンダロリアンの王

3 / 960 BBY マラコア？

Saidマンダロア・ジ・アルティメット

これはチルノが生まれる遙か昔の話である。

第1次オンドロンの戦いから始まり、5年間続いたマンダロリアン大戦も、もう終わろうとしていた。

「ぬう！」

「はああ！」

マンダロリアンの王であるマンダロア・ジ・アルティメットは、マラコア？でジェダイナイト、レヴァンと一騎打ちをしていた。

二人は長い間、激しい戦いを繰り広げたが、レヴァンが一瞬の隙にマンダロア・ジ・アルティメットの胸を切り裂いた。

「今だ！」

「ぐはっ!？」

胸を切り裂かれたマンダロア・ジ・アルティメットは膝を付いた。

「負けるのか・・・私が・・・」

「ああ」

「我が願いは・・・マンダロリアンの世界を作る事は叶わぬか・・・」

「お前が倒れればマンダロリアンは瓦解する。・・・急ぎ過ぎたんだ、お前は」

「情けない・・・私が焦り過ぎたと言う事か。しかもそれをジエダイに指摘されるとはな」

「言い残す事は有るか？」

レヴァンはそう言いながらライトセーバーを構えた。

「死ぬ事は怖くない。だが、貴様達がどのように生き、どのように死んで行くのかを見れないのは残念だ」

マンダロア・ジ・アルティメットがそう言い終わるとレヴァンはライトセーバーを振り下ろした。

マンダロア・ジ・アルティメットはレヴァンに聞こえない声で「無念」と呟くと静かに眼を閉じた。

その瞬間ライトセーバーがマンダロア・ジ・アルティメットの首を斬り落とした・・・筈だった。

「何っ!？」

ライトセーバーがマンダロア・ジ・アルティメットの首を斬り落とす事は無かった。

マンダロア・ジ・アルティメットの体がレヴァンの目に前で消えたのだ。

その後レヴァンは、マンダロア・ジ・アルティメットの姿を必死に探したが決して見つかる事は無かったのだった。

???

(此処は・・・何処だ?)

マンダロア・ジ・アルティメットは混濁した意識の中考えていた。

(この感覚・・・これがフォースなのか?何故、私はフォースと一体になっている?)

マンダロア・ジ・アルティメットは、何故自分がフォースと一体になっているのか分からなかった。

彼自身フォースと一体になる方法を知っていたが、決して自分がこの様な事になる事は無いと思っていたのだ。

(まあいい・・・今は眠り、傷を癒すとしようか・・・)

マンダロア・ジ・アルティメットはそう考えながら、長い眠りに着いた。

s a i d o u t

800 B B Y 月

s a i d 綿月姉妹

綿月依姫は、姉の綿月豊姫と共に軍を指揮して地上から来た妖怪達と戦っていた。

「戦況は圧倒的ね依姫」

豊姫は戦況を見て、依姫にそう言った。

「穢れに塗れた地上の妖怪如きに我々が負ける筈がありません」

「穢れに塗れた、ね・・・」

依姫の言葉に豊姫は顔を曇らせながら呟いた。

「お姉さま、どうかしましたか？」

豊姫の様子を疑問に思った依姫は豊姫に聞いた。

「ねえ、依姫、何故私達は月に上がったのかしら？」

「それは穢れに塗れた地上よりも、穢れない月の方が良いからでしょう？」

「只、穢れているからって地上を捨てて月に来る必要があったの？」

「穢れは、我々にとって有害な物だというのはお姉さまも知ってい

るではないですか。その穢れから逃れる為に我々は月に来たのですよ?」

「確かに地上は穢れているかもしれない。でも、地上の人々はその穢れている地上で短い一生を一生懸命に生きているのよ?それなのに依姫、何故貴方はそんな彼等を只、穢らわしい物と決めつけるの?」

「それは・・・」

「依姫、私ね、この戦いが終わったら地上に行くことと思うの」

「なっ!?何故です、お姉さま!何故あんな穢れた場所に行くこと言うのですか!?」

「私は、自分の目でちゃんと見て考えたいのよ。本当に私達は月に来る必要が有ったかを・・・ね」

「お姉さま、それは月夜見様への反逆ですか?」

「そうかもしれないわね。私は小さい頃から地上の事を穢らわしい場所だと教わってきたけど、どんなに教えられても地上が穢れているとは思えなかったのよ。だから、私は地上に行くわ」

「そんな・・・」

「私はもう・・・此処に縛られくないのよ・・・」

「ですが!お姉さま・・・!?!?」

豊姫と依姫が言い合っていると急に依姫の様子が変わった。

「依姫、どうしたの？」

豊姫が、依姫に何か有ったのかを聞くと、依姫は視線を鋭くし、遠くを見つめながら答えた。

「何か・・・来ます！」

「何かって？」

「分かりません。ですが一つ分かります」

「何が分かったの？」

「これから現れるモノは今戦っている妖怪なんて比べ物にならない程に強いという事ですよ」

依姫がそう言い終わると月全体が激しく揺れた。

「くっ！」

「月が揺れるなんて今まで一度も無かったのに！」

「依姫様！」

激しい揺れに耐えていると、一人の軍の将校が走って来た。

「何か有りましたか!？」

将校が報告してきた。

「此処から少し離れた所に空間に歪みが発生しました！」

「空間に歪みが！？周りに影響は！？」

「無い様です！」

「分かりました！貴方は・・・え？」

「揺れが収まった？」

あれ程激しく揺れていた揺れが急に止んだ。

「一体何が・・・」

「！依姫、あれを！」

依姫は豊姫の指差す方を向き眼を見開いた。

依姫が見た先には全身を銀色の装甲服に身を包み、赤いマントで全身を羽織った男が居た。

s a i d o u t

s a i d マンダロア・ジ・アルティメット

マンダロア・ジ・アルティメットが目覚めたのはマラコマ？では無く、見知らぬ惑星だった。

「ふむ、傷が癒えたのは良いが此処は何処だ？それに・・・」

マンダロア・ジ・アルティメットは掌を握りながら呟いた。

「頭の中に急に流れ込んできた情報・・・フォースの使い方と死者を蘇らせる術だと？どうやって私は意識が無い内にこの様な物を覚えてたのだ？」

マンダロア・ジ・アルティメットは少し考えたが、答えが見つかる筈も無く、考えるのを中断した。

「まあ、良いか。この身にフォースが宿ったのならば試してみるだけだ」

そう言うマンダロア・ジ・アルティメットは、掌にフォースを集申し始めた。

少しすると掌に小さな球体が出来、月の軍と地上の妖怪達を見ながらマンダロア・ジ・アルティメットは呟いた。

「悪いが私にどれだけのフォースが有るのか試させて貰おう」

そう言い終わるとマンダロア・ジ・アルティメットは掌に出来た球体を握り潰した。

その瞬間凄まじい衝撃と光が放たれマンダロア・ジ・アルティメットの目の前に居た者達は悲鳴も上げる間もなく消滅した。

「ほう・・・凄まじいな。目の前に居た者は完全に消滅したか」

マンドロア・ジ・アルティメットは自らのフォースの強力さに口元を緩ませた。

「此方に向かって来たか。そうでなくてはな」

マンドロア・ジ・アルティメットはそう言つと次元をこじ開け、カ
ルマ・バスターソードを取り出し、構えた。

「楽しませて貰おう」

マンドロア・ジ・アルティメットはそう言つと向かって来る敵軍に
向かって走って行った。

s a i d o u t

s a i d 八雲紫

地上の妖怪を率いて月に攻め込んだ八雲紫だったが、戦況は圧倒的
に不利だった。

「やっぱりこうなるわよねえ」

しかし紫は、この状況でも特に慌てずにいた。

元々月に攻め込んだのは、自分の計画の障害になりうる力を持つ妖
怪を、間引く為だった。

「もう少ししたら逃げましょうか」

紫はそう呟き、戦場を見ていた。

「!?!」

しかし、突如起きた地震に紫は驚いた。

「凄い揺れね・・・!」

激しい揺れに堪えていると、揺れが収まった。

「何だったのかしら・・・え?」

紫が見た先には一人の男が立っていた。

「月の人間かしら?」

紫がそう呟いていると、男は掌に小型の球体を生み出した。

「一体何をするつもりかしら・・・なっ!?!」

男が球体を握り潰すと凄まじい衝撃と光が放たれ、男の目の前に居た者は全て消滅した。

「冗談でしょ・・・もし、あんなのが地上に降りたら!?!」

紫は男の強さに恐怖した。

そして、もし男の狙いが地上なら、自分の計画を確実に崩壊させるだろうと危機感を抱いた。

「危険な芽は摘み取っておかなきゃね・・・私の理想の為に」

紫はそう言うと、月側の指揮官の居る場所に転移した。

s a i d 豊姫

綿月姉妹は、たった一人の男によって引き起こされているこの惨劇に、顔を真っ青にしていた。

「そんな・・・」

「依姫？」

「こんな事がありえる筈が・・・我々月の民の中でも精鋭である我が軍が、たった一人にほぼ壊滅だなんて・・・」

依姫は、月人が穢れた者に負ける筈が無い というプライドの所為でこの状況を認める事が出来ない様だった。

「依姫・・・この状況をなんとかしなきゃ」

「・・・ええ、分かっていますお姉さま」

綿月姉妹がなんとか状況を打破しようとしていると、紫が現れた。

「こんにちは、月の指揮官の方々」

「何者！！」

「待って、依姫！」

依姫は、突然現れた紫を攻撃しようとするが、豊姫に止められた。

「お姉さま!？」

「妹が無礼をしてしまって、申し訳ありません。私は綿月豊姫、こつちが妹の綿月依姫です。それで一体、私達に何の用でしょうか？」

「あら、話分かるわね。私の名は八雲紫と言うわ。此処に来た理由は貴方達に協力をお願いしに来たの」

「協力？」

「そう。今、月側、妖怪側関係無しに殺している、あの男を倒すのに協力してもらいたいのよ」

「何故我々が協力などしなければ・・・」

「分かりました。協力しましょう」

「お姉さま!何故です!？」

紫の提案を即答で受け入れた豊姫に納得がいかないのか、依姫が問い詰めて来た。

「依姫、分かっているでしょう?私達じゃもう抑えきれないって」

「・・・くっ!！」

「じゃあ行きましょつか」

「そうですね」

三人はマンダロア・ジ・アルティメットを倒すためにマンダロア・ジ・アルティメットがいる場所に向かった。

s a i d マンダロア・ジ・アルティメット

「ふん、この程度か」

マンダロア・ジ・アルティメットは自分に襲い掛かる者を尽く滅ぼし佇んでいた。

「つまらんな・・・もっと齒応えの有る者は居らんのか？」

「そこまでです」

「これ以上はさせない」

「私達なら貴方を満足させてあげられるわ」

そう言いながら紫達が現れた。

「・・・次元を超越しただと？貴様等・・・何者だ？」

「初めまして。私は八雲紫と言いますわ」

「綿月依姫です」

「綿月豊姫よ」

「我が名は、マンダロア・ジ・アルティメット。マンダロリアン達の王であり、究極の名を持つ者」

「先程の言葉、そっくりそのまま返すわ。貴方は何者？何が目的なの？」

「なに、永い眠りから覚めたばかりでな。眠りに着いている内に入れた力を試しただけの事だ」

「そんな理由で・・・許さない!!」

「依姫、駄目よ!」

そう言うと依姫はマンダロア・ジ・アルティメットに切り掛つてきた。

「遅い」

マンダロア・ジ・アルティメットは刀を二本の指で挟み、受け止めた。

「そんな!？」

「それなりに鍛えておるようだが・・・私には勝てん」

マンダロア・ジ・アルティメットは、そう言いながら依姫を投げ飛ばした

「穢れた地上の者に、私が遅れを取る筈が無い!!」

依姫は、受身を取り、もう一度切り掛りながらそう言った。

「穢れだと?」

マンダロア・ジ・アルティメットはカルマ・バスターソードで防ぎながら聞いた。

「穢れた地上の者は、我等月人に支配されていれば良いと言つのに！身の程をわきまえなさい!!」

「ふん、不快な・・・この星では下らぬ考えが浸透しておる様だな」

マンダロア・ジ・アルティメットは時空をこじ開け、レンヴォルト・ブラスターライフルを取り出した。

「なっ!!?何て大きさの武器なの!?!」

「その、下らぬ教えを生み出した元を、消し飛ばしてやろう」

マンダロア・ジ・アルティメットはそう言いながら月の都に巨大な銃口を向けてエネルギーをチャージし始めた。

「まさか月の都に!?!くっ、させません!?!」

「流石に、これ以上はさせないわよ!」

「大人しくしておれ」

マンダロア・ジ・アルティメットの目的が月の都だと気付いた依姫と紫は、それを阻止しようとするが、マンダロア・ジ・アルティメ

ツトは、地面にカルマ・バスターソードを突き立て、フォースで依姫の動きを封じた。

「体が・・・動かない!？」

「くっ、こつちも動けないわ!」

「さて、チャージが終了したようだ。その目に焼き付ける。貴様らの下らぬ教えが打ち碎かれる瞬間を」

そう言うと、マンダロア・ジ・アルティメットは引き金を引き、青色の凄まじいエネルギー光弾を打ち出した。

side out

月の都 中枢

said 月夜見

月の指導者である月夜見は、未だ終わらぬ戦闘に苛立っていた。

「ええい!まだ終わらんのか!?!依姫は何をしておる!!!」

「それが・・・突如現れた一人の男によって、月面軍はほぼ壊滅状態だということです」

「たった一人に、月面軍が壊滅だと!?!ええい、無能めが!儂直属の近衛軍を呼び出せ!儂自ら地上のゴミ共を掃除してくれる!!!」

月夜見がそう息巻いていると、急に周りが明るくなった。

「何だ？急に周りが明るく・・・」

「月夜見様！御逃げ下さい！！」

月夜見の側近がそう言いながら慌て入って来た。

「一体何を言つて・・・ぐああああ！！！！」

月夜見がその言葉を理解する前に中枢は光に包まれ、月夜見と月の高官の殆どが消滅したのだった。

s a i d o u t

s a i d マンダロア・ジ・アルティメット

マンダロア・ジ・アルティメットの放った攻撃は月の都の中枢に命中し中枢を消滅させた。

「あ、あああ・・・」

「これで愚かな者達は消え、お前達は下らぬ教えから開放された」

呆然とする依姫を他所に、マンダロア・ジ・アルティメットは静かにそう言った。

「もう・・・私は、此処に縛られなくても良いの？」

「好きにするが良い」

豊姫の言葉にマンダロア・ジ・アルティメットは、はっきりと答えた。

「ありがとう・・・」

豊姫は、誰にも聞こえない声で、そう呟いた。

「よくも・・・」

「・・・」

「よくもおおお!!」

呆然としていた依姫が立ち上がり、怒りの赴くままにに切り掛った。

依姫の剣戟は、確実にマンダロア・ジ・アルティメットを捉えたが、マンダロア・ジ・アルティメットの体には傷一つ付いていなかった。

「飽いた・・・」

マンダロア・ジ・アルティメットはそう言いながら依姫の首を掴み、地面に叩きつけた。

「がはっ!?!」

地面に叩きつけられた依姫は、あまりの衝撃に、呻いた。

「潰れて消えよ」

マンダロア・ジ・アルティメットは、依姫を地面に叩きつけたまま、

依姫の首を掴んでいる手にフォースを集中させ、ゼロ距離で打ち込んだ。

「あ……ぐ……!!」

依姫は、凄まじい痛みと衝撃で意識を失った。

「さて……これ後は一人か」

「二人じゃないの？」

「戦意を喪失している者を、殺す趣味は無い」

マンダロア・ジ・アルティメットは、豊姫を見ながらそう言った。

「逆に、戦意の有る者には容赦しないって事？非道いわねえ……そんな理由で次々と殺していったの？」

「非道、なあ……私からすれば、貴様の考えている事の方が残酷極まりないと思うがな」

「……」

マンダロア・ジ・アルティメットの言葉に紫は目を見開いた。

「此処に攻め込んだのは、自分の計画の障害になりうる力を持つ妖怪を間引く為か……外道めが。貴様は、自分の理想の為に後、どれ程の同胞を殺すつもりだ？」

「……何故、私の考えが分かるの？」

「なに、新しく手に入れた力を使って心を読んだだけだ。だが、この能力を使うは控えるでしょう。貴様の様な、どす黒い考えを覗き込むなど、不愉快極まりない」

「貴方には分からないでしょうね・・・このまま行けば妖怪は消滅するわ。それを阻止する為にも、この犠牲は必要なのよ！」

「その犠牲の先に、貴様は何を目指すのだ？」

「私は妖怪の為の理想郷創るの。その為にも、私は邪魔をする者は全て排除するわ!!！」

「・・・下らんな」

「・・・なんですって？」

「下らんと言ったのだ。箱庭の世界で、只生き続ける事に何の意味が有る？其処に閉じ籠り、滅びを先延ばしにするのか？愚か者よ」

「・・・っ!!！」

「滅びゆく運命？下らん。運命などと言う、曖昧な言葉に惑わされおつて。何故その運命に逆らわぬ？逆らいもせず諦め、次の段階に進むと？立派な物だ。貴様が諦めた所為で一体どれ程の者が死んだのだらうな？」

「黙りなさい!!！何も分からない人間が、知った風に言っんじゃ無いわよ!!！」

マンダロア・ジ・アルティメットの言葉に紫は怒りを露わにした。

「貴方という存在が私の計画を狂わせた・・・貴方はやりすぎたのよー!」

「狂わせた？最初から狂っているだろう、この計画は。私は、この狂った計画を叩き潰す。理由は、ただ一つだ」

「消えなさい！イレギュラー!!」

「貴様の生き様は、美しくない」

「ほざくな！人間!!この無数の弾幕を食らって消えなさい!!」

紫はそう言うと、空間を開き、其処から無数の光弾を打ち出した。

「ほう・・・数も、弾速も中々の物だ。だが・・・」

マンダロア・ジ・アルティメットはカルマ・バスターソードで光弾を弾き返しながら接近した。

「この程度では、話にもならん」

「ならばこれでどう!？」

紫は、もう一つ空間を開き、其処からレーザーを発射した。

「ぬっ!」

紫の攻撃が、マンダロア・ジ・アルティメットを掠り、傷一つ付い

ていなかった装甲服に傷を付けた。

「次は、外さないわ」

「ふ、ふははは！！」

紫がそう言った瞬間、マンダロア・ジ・アルティメットは笑い始めた。

「意思と意思のぶつかり合いはやはり良い！良き音色を奏でるものよ！！」

「な、何を言ってる……」

「お前のその強さに敬意を評し、本気で戦ってやろう……行くぞ！！」

マンダロア・ジ・アルティメットは、一瞬で紫の目の前に移動した。

「その目に刻み込めい！！」

マンダロア・ジ・アルティメットは、そう言いながら、無数の斬撃を浴びせた。

「かはっ！？」

紫は、体に無数の斬撃を浴び、倒れた。

「うむ、中々に楽しめた。考えは外道だが、戦闘力は其処に転がっている小娘とは比べ物にならないほどに高かったぞ？」

「……」

「意識を失ったか。まあ、生きているだけでも驚くべき事だがな・
」

マンダロア・ジ・アルティメットは、そう言って立ち去ろうとした。

「待ってください!」

「ん?」

「私も連れて行ってください!」

しかし豊姫が引き止め、自分も連れて行ってくれと言ってきた。

「何故だ?」

「もう、此処には居たくないんです!だから、私を連れて行って下さい!」

「好きにするが良い」

「は……はい!」

豊姫は、マンダロア・ジ・アルティメットの後を追いかけるのだった。

s a i d o u t

s a i d 又ト・ガンレイ

24 B B Y ジオノーシス付近

ネクサス級ヘヴィ・クルーザー エンド・オブ・ヘヴン 艦橋

又ト・ガンレイは、エンド・オブ・ヘヴンに乗り、ジオノーシスに向かっていた。

「懐かしい事を思い出したものだ・・・」

マンダロア・ジ・アルティメットという名を隠し、又ト・ガンレイと名乗っている今この時に昔の事を思い出し、ガンレイは懐かしそうに呟いた。

「どうかされましたかな？総督」

「なに、昔を思い出していたのだよ。あの頃は若かったものだ」

「そうなのですか。宜しければ、私にお話下さいませんか？」

「ああ、構わんよ。そうだな・・・何から話そうか」

ガンレイは、艦隊司令のエル・カスターに自らの昔話を話し始めるのだった。

マンダロリアンの王（後書き）

どうでしたか？次は第二部作を書く予定です。

更新が遅くなるかもしれませんが。

それでは。

クローンの攻撃（前書き）

お久しぶりです。

更新が遅くなって申し訳ありません。

今回はコルサントでの話です。

変な所や、誤字、脱字が有るかもしれません。御注意下さい。

それではどうぞ。

クローンの攻撃

24 BBY コルサント

ナブールの戦いから10年経ち、銀河元老院に不穏な気配が漂っていた。

数千もの星系が共和国から脱退する意思を表明したのだ。

謎の指導者ドゥークー伯爵の指揮のもと、この分離主義運動は限られたジエダイ・オーダーの力で銀河系に平和と秩序を維持することを困難にしたのだった。

ナブールの前女王であるアマダラ元老院議員は、苦境に立たされたジエダイへの支援軍隊設立の是非を問う重大な票決に参加すべく、銀河元老院へと戻るのだった……

特務研究開発局 第6区画ゲート前

一人の白衣を着た女性が第6区画のゲートに立っていた。

「IDカード認証をしてください」

アナウンスに言われた通り、女性は認証装置にIDカードを近づけた。

「IDカード認証が完了しました。続けて、指紋認証、網膜認証を

してください」

女性が、指紋認証、網膜認証をし終わると、パスワード入力装置が現れる。

「最後にパスワードを入力してください。」

女性はパスワードを打ち込み、少し待つ。

「パスワード FANTASIA を確認しました。第6区画の入室希望者を、マスタートレバーと認知、ゲートを開放します」

アナウンスの声と同時にゲートが開放され、第6区画への道が開いた。

「何か、一々こうやるのも面倒よね・・・」

ゲートのロックを解除した本人である、チルノ・トレバーは、そう呟きながら第6区画に入っていた。

第6区画 遺伝子研究室

チルノは遺伝子研究室で端末を使い、遺伝子研究をしていた。

「これと、これを弄って・・・よし、出来た！」

チルノはそう言うと立ち上がり、研究室内に有る、薬品生成装置に近寄り、端末のデータを送信した。

「上手くいけば、バクタを遥かに超える薬品が出来る筈！」

チルノがそう言っただけで薬品の生成を待っていると、研究室に備え付けて有る通信機に通信が入った。

『マスタートレバー、儂じゃ。評議会室に来れんかの？』

「申し訳ありませんが、今は此処を離れるわけにはいかないんです」

『何をしているのじゃ？』

「今、新しい薬品を生成しているんです。私が、此処を離れている間に、問題が起きたら取り返しがつかなくなります。ですから、評議会室には行けません」

『なるほどのう。では、用件だけを話すでしょうか。先程、アミダラ議員が乗る船が爆破されての。議員は無事であったが念の為に議員の護衛を頼みたいのじゃ』

「分かりました。元老院アパート・ビルに行けば良いんですね？」

『うむ、そうじゃ。頼むぞ』

ヨーダはそう言っただけで通信は切った。

「さて、完成したみたいね」

チルノが薬品生成装置を見ると一つの薬品容器が出てきていた。

「本当は詳しく調べたいけど・・・仕方ないか」

チルノはそう言いながら試薬を保管すると、XJ-4エアスピダーに乗り、元老院アパート・ビルに向かった。

元老院アパート・ビル

XJ-4エアスピダーを、駐車場に置いて元老院アパート・ビル前に行くと、オビワン・ケノービと若いジェダイが居た。

「オビー！久しぶりね！」

「マスタートレバー！お久しぶりです！マスターも議員の護衛に？」

「ええ、マスターヨーダに頼まれてね。それにしても久しぶりよね！前に会ったのは4年前だっけ？」

「マスタートレバーの、二人目のお子さんが生まれた時以来ですから4年前で合ってますね」

「あの・・・」

チルノとオビワンが話していると、隣に居るジェダイが話し掛けてきた。

「あ、御免なさい！貴方は・・・」

「僕ですよ。アナキン・スカイウォーカーです」

「アナキン？随分男前になったじゃない！」

「ありがとうございます！マスターは、相変わらずお美しいですね」

「あら、嬉しいわ！ありがとうございます、アナキン」

3人は、話しながらエレベーターに乗った。

エレベーターで宿舎に向かっている中、アナキンの落ち着きがなくなってきた。

「落ち着きが無いな」

「・・・別に」

「こんなに落ち着きがないのは、ガンダークの巣に落ちた以来だ」

「巣に落ちたのはマスター、貴方です。僕が助けたんです」

「そうだったか？」

「そうです」

「ハハハ・・・汗ばむな。深呼吸してみろ」

「十年ぶりに彼女に会っんです」

（へえ・・・）

チルノはアナキンの様子を見て、大体分かったが、敢えて言わなかった。

少しすると議員の部屋に着いた。

「オビー？オビー！お久しぶり、会えて嬉しいよ！」

「私もだよジャー・ジャー」

「チルノも、お久しぶりね！」

「ええ、そうね。5ヶ月振りかしら？」

「そうだと思うよ！」

「また何時でも来てね。子供達も喜ぶから」

「分かったよ！あ、忘れてたよ・・・案内するね！」

ジャー・ジャーはチルノと話していたが、ジャー・ジャーが思い出したように奥に案内した。

「パドメ議員！ミーのお友達ね！誰だと思えます？ジェダイの到着！」

「またお会いできて光栄です議員」

「私達が議員をお守り致します」

「お久しぶりです。マスターケノービ、マスタートレバー」

オビーワンとチルノに挨拶をしてアナキンを見ると、一瞬固まって

口を開いた。

「・・・アニー？大きくなりましたね」

「貴方も、大きくなられた！その・・・更に美しくなられた」

「タトウイーンの腕白坊やは相変わらずね」

「目障りにならぬ様に隠れてお守り致します」

「ナブー王室親衛隊、隊長のタイフォです。マスターケノービ、ジヤミラ女王より話は聞いています。事態は議員が思っているよりも深刻です」

「欲しいのは護衛よりも答えです。私を襲ったのは誰かを」

オビワンが、アミダラ議員の言葉を否定した。

「我等が派遣されたのは、議員をお守りする為です」

「犯人は必ず捕まえて見せます」

しかしアナキンは、オビワンとは逆に、犯人を捕まえると言った。

「評議会の命令の枠を超えてはいかん」

「！」

オビワンの言葉にチルノが反応したが、誰も気付かなかった。

「勿論彼女を守る課程でという意味です」

「出過ぎた真似は許されない。私の指示に従え」

「・・・」

「何故です?」

「何?」

「僕らが呼ばれたのは、犯人を捕まえる為でしょうか? 身辺警護だけなら、ジエダイの出る幕じゃない。命令には犯人の捜査の含まれていて当然です」

「評議会の指示通り動けば良いのだ。・・・お前はまだ若い、だから・・・」

「・・・オビ」

チルノは、オビ＝ワンの言葉に割り込み、顔をしかめながらこう言い放った。

「ただ指示に従うだけじゃ意味が無いでしょ? 今回の護衛には、アナキンの言う通り、犯人の逮捕も含まれるのは当たり前よ。もっと柔軟に考えて行動しなさい。そんなんじゃ、もしもの時行動出来ないわよ」

「しかし・・・」

「しかし、じゃ無いでしょ? 貴方の掟に直ぐ縛られるその頭の固さ

が、アナキンの成長を阻害している事に気付かないの？元々掟なんて、有って無い様な物なのに・・・そんな物に色々顔色を伺うなんて、くだらないわ。だから私は、掟に背いて結婚したし、子供も産んだ。いい？掟や、評議会に縛られる必要なんて無いの。必要ならば掟を破ったって問題無いのよ。私みたいだね。分かった？」

「はぁ・・・分かりました。努力してみます」

チルノに言い負かされた、オビ＝ワンは溜め息をつきながら言った。

「とにかく、貴方方に期待するのはこの陰謀を明らかにする事です・・・私は休みます」

そう言うと、アミダラ議員は寝室に向かった。

「ともかく、心強い限りです。私は、下の階に居ますので」

「またアニーに会えてミー最高に幸せよ」

「直ぐに僕だとは分からなかった・・・僕は1日として忘れては無かったのに！・・・彼女は忘れてた」

「お前は物事をマイマス捉えすぎだアナキン。彼女は喜んでいたよ」

「そうよ。ほら、気を取り直して見回りに行きましょう？」

チルノとオビ＝ワンは、落ち込むアナキンを連れて、見回りに向かうのだった。

s a i d o u t

s i d e ????

コルサントの一角で、賞金稼ぎのザム・ウィゼルが、黒色の装甲服を着た男を話していた。

「やったと思いましたが、身代わりでした」

「今度こそ確実に仕留める。あの女には、消えてもらわねばならん。・・・これを使え」

そう言つて男は、カプセルを渡した。

「クーハンだ。猛毒を持っているから、扱いには気をつける・・・ザム」

カプセルを渡されたザムは、立ち去ろうとするが男に呼び止められた。

「次は無い。今度こそ殺せ。確実にだ・・・分かったな」

ザムはその言葉に頷き、コロ2・エグゾドライブ・エアスピーダーに乗り暗殺に向かった。

s a i d o u t

s a i d チルノ

夜になり、3人のジエダイはアミダラ議員の部屋の前で待機していた。

「下の警備は、嚴重そのもの……まず侵入は無理ね。こちらはどう？」

「異常なしです。……此処でただ待っているだけでは芸はない」

「ん？カメラが見えないぞ？」

「彼女がカメラにカバーを。監視されているのが嫌なんでしょう」

「何を考えてる……」

「侵入者が有れば、R2・D2から連絡が有ります」

「けど、暗殺の手段何ていくらでも有るわよ？」

「わかってます。暗殺者を捕まえる事も考えないと」

「議員を囮にするつもりか」

「彼女が自分から……指一本、触れさせません。何か変化が有れば感じます。大丈夫」

「危険過ぎる。お前の感覚もそこまでは磨けてはいない」

「……貴方の方は？」

「まずまずだ」

少しして、オビ＝ワンはアナキンが少しやつれてる事に気付いた。

「疲れているな」

「……最近眠れなくて」

「お母さんの事か？」

「何故か、母の夢ばかり見ます」

「夢には意味がある」

「どうせなら、パドメの夢を……彼女の間に居ると我を忘れる」

「気を付けるアナキン。危険な兆候だ。ジェダイの掟に、従うと誓った事を忘れるな。それに、彼女は政治家だ。政治家は信用できない」

「ほかの議員とは違いますよ」

「議員が好意を持つのは、選挙資金を気前良く提供してくれる相手のみだ」

「講義は結構です。特に政治と金の問題はうんざりだ」

話を聞いていたチルノがオビ＝ワンに聞いた。

「オビー、何か政治家に恨みでも有るの？」

「そうでは有りませんが……」

「議員の中にも例外は有ります。最高議長は立派な人だ」

「パルパティーンは政治家だ。銀河元老院と言う化け物がひしめくプールを泳ぎ回っているだけだ」

「そう？私は、議長は有能だと思っけどね」

「彼は良い人です。僕は・・・！？」

「私も感じた！」

「こんな時に！」

三人が寝室に入ると、クーハンがアミダラ議員に、襲いかかるようにしていた。

「パドメから離れる！！」

「はっ！！」

アナキンが一匹を焼き切り、チルノが氷の刃で貫いた。

オビ＝ワンは、窓から離れようとしているドロイドに飛び掛り、窓を破ってドロイドに掴まりながら飛んで行った。

「無茶するわね・・・柔軟に考えて行動しろって言ったって、これはやり過ぎよ。まあ、ぼやいたってしょうがない。行きますか！」

「パドメ、君は此処に居て！」

チルノとアナキンは、暗殺者を追う為に駐車場に向かうのだった

駐車場に着くと、アナキンはサイモン・グレイシエイド元老院議員のXJ-6エアスピーダーに乗ってオビワンを追いかけようとした。

「この車で・・・」

「ちよい待ち！そのスピーダーは止めたほうが・・・」

「非常事態です！罪には問われませんよ！」

「ダメだつて！！議員のスピーダーを、勝手に使ったらどんな問題が起きるか・・・」

「先に行きます！！！」

アナキンはチルノの静止を聞かずに、スピーダーで先に行ってしまった。

「ちよつとおく！！・・・ああもお！どうなっても知らないわよ！！！」

先に行ったアナキんに悪態を付きながら、チルノはXJ-4エアスピーダー乗り追いかけるが・・・

「まずい・・・見失ったわ」

アナキンが乗っていたスピーダーは、思ったよりも早く、見失ってしまった。

「・・・なんで、先に行かなかったんだろっ・・・はぁ〜落ち込むわぁ」

チルノがブルーになっていると、コムリンクに通信が入った。

『マスタートレバー、暗殺者を捕まえました。直ぐに来てくださいますか？場所は、アウトランダー・クラブの前です』

「・・・分かったわ」

チルノは通信を切り、アウトランダー・クラブに向かい、数分後に二人と合流した。

「・・・来たわよ」

「マスタートレバー、何か有ったんですか？」

「いいえ、気にしないで。それで、この人が暗殺者？」

「今から尋問するところです」

「誰に指示された？答えるんだ！早く!!」

アナキンを怒りに任せて問い詰めると、暗殺者が話し始めた。

「マンダロリアンの男で・・・名前は・・・うっ!？」

暗殺者が名前を話そうとした瞬間、首に何かが刺さった。

「誰!？」

チルノが何か飛んできた方向を見ると、黒色の装甲服を着た男が居た。

「動きを止めさせてもらおうわ!！」

チルノは直ぐに氷の短剣を数本生み出し、投げ付けた。

ふん・・・

「嘘!？」

しかし男は短剣を全て受け止め・・・

返すぞ・・・ジエダイ

逆に投げ返した。

「くっ!！」

チルノが短剣を避けている内に、男はブースターで飛び去ってしまった。

「逃げられた・・・何者なの?・・・っ!しまった!？」

「ああ・・・ネイ・・・グス」

チルノが刺さったのが、毒の塗られたダーツだと気付き、処置をしようとするが時すでに遅く、暗殺者は謎の言葉を言い残して、絶命

した。

「駄目か・・・それにしても、クローダイトだとはね」

「何者でしょうか？」

「分からないけど・・・相当の手練よ。まさか、逆に投げ付けて来るとは思わなかったわ」

「奴が、暗殺者を指示したのでしょうか？」

「多分ね。人を殺すのに、こんな珍しい物を使う人間なんてそうそう居ないわ」

チルノは暗殺者に刺さっていたダーツを抜き取り、それを見ながら言った。

「知っているんですか？」

「カミーノ・セイバードアトって言うてね？ダートの中に猛毒が仕込まれていて、標的に当たると中の毒を体内に注入する仕組みになっているの。これが造られたのは、カミーノという惑星よ」

「カミーノ？聞いたことが有りませんが・・・」

「でしょうね。カミーノを知っているなんて、よっぽどの物好きか、私達みたいな一部の科学者ぐらいよ。私は、評議会に許可を取ってカミーノに向かうわ」

「私も行きます」

「アナキン、貴方は議員を守って」

「分かりました」

チルノとオビワンは、暗殺者を追うために動き出した。

s a i d o u t

s i d e エル・カスター

惑星ジオノース付近

ネクサス級ヘヴィ・クルーザー エンド・オブ・ヘヴン 艦橋

チルノ達が動き始めた頃、一隻の超大型戦艦がジオノースに向かっていった。

「大佐、ジオノースまでは後どれくらいだね？」

「およそ2時間です」

「よろしい。そのまま航行を続けたまえ」

超大型戦艦ネクサス級ヘヴィ・クルーザーの艦長である、エル・カスターは紅茶を飲みながら大佐と呼ばれたドロイドに指示を出す。

「うむ、やはり紅茶はダージリンに限るな。さて、後少しで到着するが、今回の航行は如何だったかね？」

「素晴らしい物でしたわ。ありがとうございます、閣下」

カスターに聞かれた銀色のマントを羽織った女性は、笑いながらカスターに礼を言う。

「君のような美しい女性に、そう言って貰えれば幸いだよ。豊姫君」

カスターにそう言われた女性・・・綿月豊姫は笑う。

「美しいなんて・・・冗談が上手なんですな」

「女性に嘘はつかんよ。そういえば、君は総督の弟子らしいな？なら、さぞかし能力が高いのだろうな」

「いいえ、私なんてマスターに比べれば・・・」

「ハハハ、自分を卑下にしてはいかんな。総督の目に叶うという事は、相当の能力を持っていると言う事だ。自分に自信を持ちたまえ」

「ありがとうございます閣下」

カスターに諭された豊姫は、嬉しそうに笑った。

「閣下、まもなく到着します」

「モニターに映したまえ」

カスターが大佐に指示し、大佐はモニターを映した。

「見たまえ。あれがジオノーシスだ」

「あれが・・・あそこにマスターが居るんですね」

豊姫はジオノーシスを見ながら、静かに呟いた。

「大佐、予定ポイントに向いたまえ。其処にドックが有るはずだ」

「了解」

ジオノーシスに降下を始めた艦内でカスターは一人呟く。

「さて、通商連合の首脳が集まるのは10年ぶりだな。息災であれば良いが・・・」

しかし、その言葉は誰にも聞かれることは無かったのであった。

クローンの攻撃（後書き）

どうでしたか？

エル・カスターはグリーン・ワイアット大将閣下を元に戻しています。
性格や容姿は違いますが（笑）

次はカミーノです。更新をお待ちください。

それでは。

クローンの攻撃2（前書き）

今回はカミーノでの話です。チルノが天才科学者としての能力を見せま

変な所や、誤字、脱字が有るかもしれません。御注意下さい。

それではごうそ。

クローンの攻撃2

評議会に許可を取り、オビワンはデルタ7・イーサスプライト級ライト・インターセプターで、チルノは専用機であるブルーティアーズでカミーノに向かった。

惑星カミーノ

saidチルノ

チルノとオビワンは、着陸せず濡れになりながら施設に入った。

「あゝあ、ずぶ濡れね・・・着替え持ってくれば良かった」

チルノがぼやいていると一人のカミーノアンが現れた。

「マスタージェダイ、お待ちしておりました」

「待っていた？」

「そうです。どんなに待ち望んだことか。何年も待ち続け、正直諦めかけていたのですから」

「そうなのですか・・・」

カミーノアンがチルノを見た瞬間、目を見開いて聞いてきた。

「貴方はもしや・・・チルノ・トレバー博士では？」

「ええ、そうですが・・・」

「やはり、そうでしたか。トーン・ウィです。高名な、トレバー博士にお会い出来て光栄です。貴方程の方がいらつしやったと首相が知れば、とても喜ばれるでしょう。さあ、此方へ」

トーン・ウィに案内された部屋には、一人のカミーノアンが居た。

「ご紹介します。こちらはラマ・スー首相閣下です。そして、こちらがマスタージェダイの・・・」

「オビ＝ワン・ケノービです」

「初めまして。チルノ・トレバーです」

チルノが挨拶すると、ラマ・スーは嬉しそうに話し始めた。

「おお、貴方があの・・・ラマ・スーです。博士の名は、カミーノにも届いておりますよ。カミーノ滞在をお楽しみ下さい。さあ、どうぞ」

二人は用意された椅子に座る。

「では、早速用談に。お約束の品はスケジュール通り進んでおります。20万ユニットが完成、100万が製造中です」

「成程・・・それは、良い知らせです」

「マスターサイフォ・ディアスにお伝えください。ご注文は、期日

までに満たされると」

ラム・スーが、口にした人物の名前にチルノは疑問を抱く。

「失礼・・・今誰の事を？」

「？ジェダイマスターの、サイフォ・ディアス殿です。今でも彼が評議会をまとめておいででは？」

「マスターサイフォ・ディアスは10年前に行方不明になっています」

サイフォ・ディアスは、10年前に、とある任務の途中で消息を断っていた。

「ああ・・・知らなかった。残念だ。完成した軍隊を彼に見せたかった」

「軍隊ですか？」

「さよう、クローン兵です。これまでで、最高の出来と自負しております。博士にもご満足頂けると思います」

チルノは少し考えた後、一つ質問した。

「お尋ねしますが、マスターが最初にその話をした時、軍の目的を明かされましたか？」

「ええ、もちろんです。軍は共和国の為だと。ご自分の目で完成具合をご覧になりたいでしょう」

「そうですね。お願いします」

ラム・スーに案内された場所には、巨大なクローン製造工場があった。

「これは・・・かなりの物ですね」

「いえいえ。博士の造られた、傑作には及びません」

「遺伝子研究では、貴方の方が上ですよ」

「貴方がお作りになった、ガーディアン・ドロイド『MTシリーズ』や、上位機種である『ACシリーズ』はとても役に立っております」

「そう言って貰えれば、幸いです」

「ご覧ください。彼等が、我々の最高傑作です」

ラム・スーの目線の先には、一糸乱れぬ動きで教練に望んでいるクローン達が居た。

「かなりの出来ですね」

「きつと、博士にもご満足頂けると思っています。まず、クローンは自分で考えます。その優秀さは、ドロイドなど比べ物になりません。彼らに施す戦闘教練にも自身が有ります。このグループは5年前に作られた物です」

「これは・・・成長を早めているのですね」

「もちろんです。人間と同じ成長速度では時間が掛かりすぎます。半分の時間で大人になります」

「成程・・・」

「彼らは従順で、どんな命令にも逆らいません。遺伝子操作で、オリジナルのホストが持っていた独立心を、大幅に削っています」

「傑作と、豪語するだけでは有ると・・・しかし、独立心を削るのはいただけませんね。それでは咄嗟の判断が出来なくなってしまう」

「いやはや、博士の仰る通りですな。今日から独立心を削る行為は、控えましょう」

「そう言えば、オリジナルのホストと言いましたが・・・そのホストとは、誰です?」

「ジャンゴ・フェットと言う賞金稼ぎです」

「その賞金稼ぎは何処に?」

「ああ、彼なら此処に居ますよ。ジャンゴは、高額のホテルとは別にもう一つ条件を出しました。自分と同じクローンを作れとね。変わってるでしょう?」

「・・・同じ物を?」

「遺伝的に純粋な複製です。遺伝子構造を弄らずに、成長を早めることない、もう一人の人間」

「オリジナルホストであるジャンゴ・フェットに、是非会って話をしたいものです」

「お望みなら会えるようにはからいましょう」

「お願いします」

話しながら進んでいると、クローン兵の格納庫に着く。

「如何です？素晴らしいでしょう」

「兵士としては、理想的とも言えますね。共和国に、これ程の軍隊はもう存在しません。宇宙艦隊なら有るのですが……」

「ほう？共和国に、まだ軍隊が残っていたとは……」

「まあ、この事はどうでもいいですが。ジャンゴ・フェットの所に案内してもらえませんか？」

「分かりました。こちらです」

「……」

チルノは、先程から無言だったオビ＝ワンに話し掛けた。

「オビー、どうしたの？」

「話について行けなくて・・・」

「?取り敢えず、行くわよ」

チルノは、頭を抑えているオビ＝ワンを連れて、ジャンゴ・フェットの元に向かう。

トーン・ウィに案内され、部屋の前に着くと、トーン・ウィは呼び出しのスイッチを押す。

少しすると、子供が出てきた。

「ボバ、お父様は居る?」

「ああ」

「会えるかしら?」

「ああ。パパ、トーン・ウィだぜ」

部屋の中に案内され、少し待つとジャンゴが隣の部屋から出てきた。

「ジャンゴ、お帰りなさい。実りある旅でしたか?」

「大いに」

「こちらはジェダイマスターのオビ＝ワン・ケノービと、同じくジェダイマスターのチルノ・トレバー博士。進捗状況を見に来たの」

「貴方のクローンを拝見したけど、素晴らしいわね」

「宇宙に自分の足跡を残しておきたくてな」

「遠く、コルサントにも足跡は残したか」

「何度か行った」

「マスターサイフォ・ディアスをご存知かしら？」

「・・・ボバ、扉を閉める」

ボバは指示された通り、部屋のドアを閉めた。

「誰だつて？」

「サイフォ・ディアス。君をこの仕事に雇ったジェダイだ」

「サイフォ・ディアス・・・いや、知らないな」

「本当か？」

「ああ。俺を雇ったのはネイグスつて奴だ。ボグデンの月でな」

「ネイグス・・・暗殺者が、死ぬ寸前に口にしていたわね」

「そういえば、兵士は気に入ったか？」

「科学者としては、戦場でどんな動きをするかを、この目で見てみたいわ」

「最高の軍隊だ。俺が保証する」

「時間を取らせて悪かったな」

「オビー」

オビーはワンが部屋を立ち去ろうとしたが、チルノに止められた。

「私は、カミーノに何日か滞在するわ」

「は？」

チルノの言葉に、オビーは訳が分からないという顔をした。

「いや、だから何日か滞在するって言ったんだけど？」

「それは分かりましたが、何故滞在するんですか？」

「もう少し此処のクローン研究を見たいから」

「そんな理由ですか・・・」

チルノの言葉に、オビーは思わず頭を抑える。

「そんな理由ってなによ！ここまでの規模のクローン製造施設なんて、そうそう無いんだから！」

「分かりましたよ・・・評議会には、ネイグスと言う人物については、ほぼ収穫無しと報告しておきます」

「ネイグスを探しているのか？」

二人の話を、聞いていたジャンゴが口を開いた。

「知ってるの？」

「ああ。奴は此処に居るぞ。今日、ジオノーシスに向かうと言っていたな」

「・・・オビー、頼むわね」

「御任せ下さい」

オビーは、部屋を飛び出していった。

「トーン・ウィさん。ジャンゴと二人で話したいので、部屋の前で待っていて貰えませんか？」

「分かりました。さあ、ボバ行きましょう」

トーン・ウィは、ボバと共に部屋を出ていった。

「さて、誰も居なくなったから、ようやく本題に入れるわね」

「本題？」

「貴方、私の部隊に入らない？」

誰も居なくなつた瞬間、チルノは本来の目的を果たそうと話し始めた。

s a i d o u t

s a i d オビ＝ワン

オビ＝ワンは、ネイグスを捕らえる為に、エアポートに向かっていた。

エアポートに着くと、宇宙船に乗り込もうとしているネイグスが居た。

「待て！」

・・・

ネイグスはゆっくりと振り向く。

「ネイグスだな？」

ジエダイが何用だ？

「アマダラ議員暗殺指示の容疑で、逮捕する！」

オビ＝ワンは、ライトセーバーを起動しながら言った。

やってみる・・・若造

ネイグスはそう言いながら、L1ー30ブラスター・ピストルカスタムを両手持ち、超高速で連射してきた。

「くっ!!」

オビ=ワンは、超高速の光弾をライトセーバーで、なんとか防いでいく。

どうした?この程度か。俺はまだ、一歩も動いておらんぞ

「何て攻撃だ!防ぐだけで精一杯とは!!」

暫くの間、膠着状態が続いたが、ネイグスは急にブラスターを撃つのを止めた。

ソレスか・・・面倒なフォームだ

「攻撃が止んだ!?!」

ネイグスは、Lレール30ブラスター・ピストルカスタムをしまい、フォース・パイクを取り出す。

こちらで片付けるとしよう

そう言いながらネイグスは接近し、フォース・パイクで攻撃してきた。

「何!?!」

オビ=ワンは、ネイグスの攻撃を辛うじて防ぐ。

ふん・・・中々の反応だ。雑魚では無いという事か。だが・・・

それだけだ

「あまり舐めていると、痛い目を見るぞ！」

オビィワンは連続で攻撃をするが、ネイグスに全て防がれ、鏝迫り合いになる。

この程度か？

「まだまだ！」

オビィワンは更に攻撃を加え、隙が出来た所を蹴り飛ばした。

しかしネイグスは、軽々と受身を取る。

ふむ・・・やれば、出来るではないか

受身を取ったネイグスは、オビィワンを褒め称えた。

「気に入ってもらえたかな？」

ああ。だが・・・時間が無いのでな

そう言いながら、ネイグスはもう一本フォース・パイクを取り出し、構える。

終わりにするぞ

ネイグスはゆっくりと歩きながらそう言うと、高速で切り掛かった。

「うつ！？」

オビ〃ワンはなんとか攻撃を防ぐが・・・

隙が出来たぞ

ネイグスは、隙が出来た所をスタンモードにしたフォース・パイクで攻撃した。

「ぐあああー！」

オビ〃ワンの身体に電流が流れ、オビ〃ワンは倒れる。

気が変わった。今は、生かしておいてやろう

そう言って、ネイグスは去っていった。

「くっ・・・」

体の痺れから回復したオビ〃ワンは、飛び去る宇宙船に、追尾装置を投げ付けた。

「逃がすわけには・・・」

オビ〃ワンは、ネイグスを追いかける為にデルタ7・イーサスプライト級ライト・インターセプターに向かうのだった。

s a i d o u t

s i d e チルノ

『部隊に入らないか?』チルノは放った言葉に、ジャンゴは表情を険しくした。

「……どう言う意味だ?」

「そのままの意味よ。アイスフィストに、入らない?」

「何故、俺を勧誘する?」

「貴方が、優秀だからよ。それに、ただでとは言わないわ」

チルノはホロクロンを取り出し、映像を映した。

「私の部隊には、独自行動権限が有ってね?ジェダイ評議会の命令に従う必要が無いの。それに、アイスフィストには厳しい決まりなんて無いから、自由に出来るわよ」

「それで大丈夫なのか?」

「特に問題は無いわよ?あ、そうそう!給料もかなりの額よ」

「いくらだ?」

「えーと……これ位よ」

チルノは、ホロクロンの映像を給料明細に切り替えて、ジャンゴに見せるとジャンゴの表情が驚きに染まった。

「……なんだこの金額は!?!」

「まだ足りない？なら・・・」

「いや、待て！十分だ！！」

チルノが、更に給料を増やそうとするのを、ジャンゴが必死に止める。

「入ってくれるの？」

「ああ、あんたと契約する」

「ありがとうね」

ジャンゴとチルノは友好の証として握手をした。

「トーン・ウィさん、もう良いですよ」

チルノが呼ぶと、トーン・ウィとボバが入って来た。

「実りある話し合いでしたか？」

「ええ。トーン・ウィさん、重要な話が有るのでラマ・スー首相の下に連れて行ってくれませんか？」

「構いませんよ。さあ、此方へ」

「それじゃあね、ジャンゴ」

「ああ」

チルノはジャンゴと別れ、ラム・スーの下に向かう。

ラム・スーの下に着くと、チルノは用件を話し始めた。

「首相、クローンについてお話が有るのですが」

「一体、どのような話ですか？」

「クローン研究についての資料を、見せてもらえませんか？」

「資料ですか？ええ、よろしいですよ」

ラム・スーはそう言うのと装置を動かし、資料を映し出した。

「少し失礼して・・・」

チルノは高速で閲覧していく。

「なんとという速度だ・・・」

その速度にラム・スーは、目を見開く。

「・・・？首相、このオーダー66とはなんですか？」

「ああ、それは緊急時に発動するオーダーです」

「内容は？」

「確か・・・クローンに危険が迫ると、身の安全を確保するという物だった筈です」

「・・・成程（この違和感は何？）」

チルノは説明を聞きながら、オーダー66に対する、強い違和感を感じた。

「それで、資料の内容は如何ですか？」

「良い物ですね。・・・首相、一つお願いが有るのですが」

「なんですか？」

「私専用、クローン兵を造ってはくれませんか？」

「クローンを？」

チルノの言葉に、ラマ・スーは訝しげにした。

「造ると言っても、一から造らなくても現在製造中のクローンに調整を施してくださいれば、それで結構です」

「どのように調整を？」

「独立心を削らずにおくのと、オーダー66を削除してもらいたいです」

「オーダー66を？」

「はい」

「構いませんが・・・他には、何か御要望は有りますか？」

「他には・・・そうですね、装甲服は青色に統一して・・・胸には、私の部隊のエンブレムを付けて下さい」

「御要望は、分かりましたが・・・ただと、言う訳にはいきませんぞ？」

「分かっております。これをご覧ください」

チルノは、ホロクロンにあるデータを映し出す。

「先程見せて貰ったクローン達や、資料を見せてもらって私なりに問題点、改善点を纏ってみました」

「あの短い時間で・・・」

「他にも、新しく製造予定の特殊兵器　ファンタズマ　の試作機と、先日ロールアウトした最新鋭機である　レッドバタフライ　を差し上げましょう。如何ですか？」

「その試作機は、どれ程の物なのですか？」

「それについては、これをご覧ください」

チルノは、ホロクロンの映像を、ファンタズマに切り替える。

「装備は試作機ですので、レーザーキャノンとクローアームのみで

す。それでも非常に強力ですが。レッドバッテリーについては、こちらのデータをご覧ください」

ラム・スーは、チルノが表示したデータを見ると、とても喜んだ。

「素晴らしい物だ！喜んで御要望に、応じましょう」

「ありがとうございます。後、此处に数日滞在したいのですが・・・」

「そうですね、どうぞゆっくりとなさってください。もし、博士が宜しければ研究に参加なさっても構いません」

「分かりました。それでは、私はこれで」

チルノはラム・スーとの交渉終え、部屋を出るのだった。

クローンの攻撃2（後書き）

どうでしたか？ ACシリーズの機体はドロイドとして出しました。出した理由は、作者が好きだったからです（笑）

次はジオノーシスでの話です。更新をお待ちください。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7216w/>

スターウォーズ 氷帝伝

2011年11月19日16時52分発行